



処女航海

Maiden Voyage

ブライアン 作

前橋梨乃 訳

自分が、どこの何者であるかがわからないとしたら、誰だって不安だろう。

親の名前もわからない。どこの町で生まれたかもわからない。正確な誕生日すら知らないのだ。

幸せな子供時代があった人には、そんな人生があるということ自体、簡単には理解できないと思う。

生まれた時から孤児だった僕のことを想像してみしてほしい。

生まれたばかりの僕は、アトランタの、ある福祉施設の前に捨てられていた。名前もなく身元もわからない「いたいけな子鹿」。生後2ヵ月くらいだが、栄養状態は悪く、体内には、母乳から入ったらしいヘロインの痕跡すらあった。

始まりがそんなだから、あとは知れたものだ。

育った施設は、「ボーイズ・タウン」(※)より「オリバー・ツイスト」(※)の方に近かった。

(※訳注 ‘Boys Town’ =1978年制作のアメリカ映画 愛にあふれた少年更正施設が舞台 ‘Oliver Twist’ =C・ディケンズの小説 19世紀前半イギリスの悲惨な孤児院が描かれる)

そこでの虐待やひどい扱いについて、今さらぐだぐだ言ってもしかたないから、話を飛ばして……13歳の時、僕は、自らの意志でそこを脱走した。

とはいえ、その先に待っていたのは、当然、路上生活だ。それがどんなものだったかも、言うまでもないだろう。

生きるためには、どんなことだってしなければならなかった。盗み、たかり、いざこざ、けんか……つねにまわりを警戒し、誰も信じられなくなるわけだ。

自然、第六感のようなものも研ぎす

まされていく。自分が生きていくために、さっと状況を読み、どんなことだって……そう、どんなことにだって対応できる動物的カンのようなものが培われた。

その後起きたとんでもないことに、僕がなんとか対応できたのは、それが大きな理由だったのかもしれない。

ともあれ、そんなつらい生活の中で、僕がすさんでいったとしても、不思議ではないだろう。

僕は、世の中の人を憎んでいた。ことに、カッコいい車に乗って、美人の妻が待つ家に帰り、豪華なベッドで寝るような人々を。

そう、激しく憎んでいた。

ただ、僕がうらやましかったのは、彼らが金持ちだからというだけじゃない。

それは、まさに、孤児の夢なのだ。

家族……僕を気づかってくれる誰か、僕を求めてくれる誰か、僕を愛してくれる誰か……そんな誰かを持つことを、僕はまだあきらめていなかった。

僕はなにより、家族がほしかったのだ。

僕が、マイアミで港湾労働の日雇い仕事にありついたのは、19歳になったばかりの頃だった。

路上生活は相変わらずだったが、この歴史ある商業港を僕は気に入っていた。

とはいえ、そこで友だちができたわけではない。いっしょに働く仲間はいたが、僕のような育ちの人間にとって、友だちをつくるのは生やさしいことではないのだ。友だちというのは、僕のことを心からわかってくれる人たちの

ことだろう。

たとえば僕は、そんな仲間とともに、仕事帰りにビールを飲んだりもした。そして、そこで話される話題にも加わろうとした。

ところが、そこでの話題は、たいてい、彼らの家族のことなのだ。

もちろん僕には、話すことなどにもない。

と、誰かが言うのだ。

「いつまでもグレてないで、親孝行しろよ」と。

孤児だったという記録は、通常、社会的には秘密にされ、施設を去ったあと、本人とも接触が断たれるものだ。たとえば施設から里子に出されたような場合など、その方が都合がいいだろう。

僕はそう思っていたのだが、それは

まちがっていたようだ。

最近では、医学上の理由から、孤児の家系について再調査されることがあるらしい。たとえば、将来、臓器移植が必要になるような場合に備え、血縁関係がある人間がいるなら、それがわかっていた方がいいということだ。

どこでどう足取りをつかんだのか、アトランタのソーシャルワーカーから、その件について話したいという呼び出しを受け、僕は、北行きのトレーラーをつかまえ乗せてもらった。それは、僕が、かすかな希望を抱いていたからに他ならない。

そう、今さらという気はしながらも、僕はついつい、心の中に夢物語を抱いていた……。

たとえば、なにかのまちがいで幼子を見失い、未だに探しつづけている中年夫婦。それとも、初めて甥の存在を

知り、養子にして面倒をみようという叔父さん。あるいは、未だ見たことのない孫に会いたがっている祖父母。もしかして、離ればなれに育った兄弟姉妹……？

いや、もちろん、そんな考えは持たない方がいいのはわかっていた。

たとえば、僕の出生の秘密が明確となったとしても、そして、僕の本当の姓がわかったとしても、その血縁者は、僕に会いたがるだろうか？

なにしろ僕は、無一文でホームレスのティーンエイジャーなのだ。

その誰かにとって関心があるとすれば、それは僕自身ではなく、僕の臓器だろう。

そんな心がまえでソーシャルワーカーと面会した僕は、できるだけ平然とした顔で僕の来歴を聴こうとした。

家族との「涙の対面」とやらを果たすにしても、要するにそれは、その誰かと僕健康のためにすぎない。望外の期待は、抱かない方がいい。

しかし、そこで僕は、意外な事実を知らされた。

僕は、拾われたあと名前を付けられたのだと思っていたのだが、じつは、僕を捨てた時点で、母親はすでに出生届を出していたらしい。

つまり、捨て子である僕の身元は——名前も含めて——すぐにわかったのだという。

ではなぜ、母親のもとに戻されなかったのか。その理由は、やはり憂鬱としか言いようのないものだった。

僕の母は、売春婦で、しかも麻薬常習者だったようだ。

ソーシャルワーカーはあえて触れなかったが、口ぶりから、その母親も、

とうの昔に死んでいるらしいことがわかった。

ただ、最も意外だったのは、その時、僕が母親のもとに戻されなかったもうひとつの理由だ。

1人の子供を育てるのも困難なのに、2人ではなおさら……ということだったらしい。

そう！ 僕は双子だったのだ。

僕には、双子の……妹がいた！

僕は思わず、そう告げたソーシャルワーカーの中年女性を抱きしめていた。

将来、里子としてもらわれていく際、双子では不利だからという判断で、僕らふたりは当初から離され、まったく別の町の施設に入れられたのだという。

ただ、その思惑がうまくいったとは言えないようだ。

僕は、そこを飛び出すまで施設にいたのだし、妹の方も、少なくとも12歳までは里子の機会はなかったという。それ以降の経緯については、こちらの社会福祉事務所では把握していないということだった。

彼女の名前は、アンドレアといった。

僕はずっと、アンドリューと呼ばれてきた。

つまり、僕ら兄妹は、アンドレアとアントリューという、いかにも双子らしい名前を持っているわけだ。

でも、僕にもたらされたその報告には、彼女の住所などはなかった。

「あ、あのお……」

僕は、それがどういうことかわからず、おずおずときいた。

「なんででしょう？」

「妹と、連絡がとりたいたんですが……」

「ごめんなさい。それはできないのよ。」

将来、臓器移植が必要だという医者
の診断書が提出された場合、お互いの
所在を伏せたまま、こちらで仲介す
るといのが決まりなの」

僕は、それにがっかりした。

血を分けた家族がいることを知ら
され、その上で、彼女となんの連絡
も取れないというのだ。

どう考えても、僕は移植が必要と
なるような病気になりそうもない。
そして、同じ血を引く双子だとい
うなら、彼女だってそうだろう。
ということは、僕らはけっきょく、
一生接触するチャンスさえない
ということだ。

僕がそんなふうに考えたことが、
表情からわかったにちがいない。

礼を言って立ち上がった僕と握手
した時、彼女は、そっとなにかを
渡してくれた。

部屋を出てから広げてみると、それ

は、走り書きのメモだった。

ジョージア州 サバンナ市 ロバート・E・リー通 1701

電話 555-1361

アンドレア・ジョーンズ

やったぜ！

僕は、法を犯してまで僕の気持ちをわかってくれたその女性に、心から感謝した。

初めて本当の家族に会えるのだ。こんな気持ちが味わえるなんて、孤児だからこそだろう。

僕は、長距離用(※)のテレフォンカードを買うお金を手に入れるため、そ

の日の午前中、アトランタの街で物乞いした。

(※訳注 アトランタとサバンナはともにジョージア州だが、直線距離で360キロほど離れている 日本で言えば東京—京都間といったところ)

もちろん、コレクトコールだってできるわけだが、それは恐かったのだ。

こんなに神経質になっているのは、いったいいつ以来だろう？ 実の妹に受信拒否されるのではないかという恐れに比べれば、路上生活で味わった恐怖など、なにほどでもない。

「はい、もしもし」

電話の向こうでハスキーな声が応えた。

「こ、こんにちは。ア、アンドレア・ジョーンズさん？」

「ええ、そうですが……」

「19年前、サバンナ児童ホームに入所したアンドレア……ですよね」

「あなた、誰？ なにが目的？」

とたん、電話の聲がとがった。

「い、いや、そうじゃなくて。切らないで聞いて。どう言ったらいいか……つまり……、僕の名も、アンディといいます。君の……双子の兄の」

長い長い沈黙の時間が流れた。

もし、このまま電話を切られたらと思うと、僕は死にたいような気分になった。

と、しばらくして、彼女の聲が返ってきた。ささやくような声だった。

「私も、この前、そんな報告を聞かされました。でも、どうしたら……。今、近くにいるの？」

「近くじゃないけど、明日には行けると思う」

「ええ、ぜひ。ぜったいに会いに来て。」

私、どれほど自分の家族と話したかったか……」

彼女はそう言って、サバンナ市の、あるレストランの場所を告げた。

僕は、翌日、そこに着けそうな時間を伝えた。

僕は、よほど興奮して見えたにちがいない。

ヒッチハイクしようと上げた親指に応え、車を停めてくれたセールスマンも、最初はいぶかしげな顔をした。きっと、車ごと持ち逃げされるのではないかと警戒したのだろう。僕があせっている事情を説明したところで、やっと乗せてくれた。

そのレストランに到着した時、すでに約束の時間から20分遅れていた。それでも僕は、すぐに中に入れなかった。

問題は、僕のなりだ。

よれよれに薄汚れ、いかにもホームレスという感じ。

……こんな格好で現れれば、僕の唯一の肉親はどう思うだろう？ 彼女は、ひどくショックを受けるにちがいない。

でも、ここですごく引き下がるわけにはいかなかった。

……僕は彼女と会わなければならない。たとえ、彼女からすぐに帰ってと言われたとしても、会うことには大きな意味がある。こんな僕にも家族がいるのだということを、この目で確かめられるのだから。

……それに、彼女だって、僕と話したいと言ったじゃないか。

そう覚悟を決め、僕は入った。

とたん、また心細くなった。そこは、とんでもなく高級なレストランだった

のだ。

僕と同じ生い立ちであるはずのアンドレアが、どうしてこんな場所を選べるのだろうか。僕は首をかしげながら、そのテーブルに近づいていった。

顔を合わせた瞬間、僕は彼女を知っていると思った。

僕らが血のつながった家族であることは、疑いようもなかった。そして、双子であることも。

彼女は、僕と同じブロンドの髪だった。ショートカットだから、よけいに似て見えた。

青い目や、ほんのちょっと受け口気味の顔のつくりもそっくりだ。

女性にしては長身の6フィート弱(約180センチ)という身長さえ、僕と同じ。その上、僕同様に贅肉がなく、やせていた。

ボーイッシュではあったが、彼女は

美人でかわいかった。どちらかといえ
ば筋肉質だが、胸もそれなりにはあつ
た。ジーンズとTシャツの方が似合う
気もするが、今着ている高そうなドレ
スも悪くなかった。

「アンドレア？」

「アンドリュー？」

彼女は、席を離れ、僕を抱きしめて
きた。

涙をこらえるのが大変だった。

……僕の妹からのハグ。家族からの
ハグ。

彼女が席に着き、僕もその前に座つ
た。

……ああ、僕の妹。血を分けた家族。

「なにから、話したらいいのか……」

僕は戸惑いながら言った。

「あなたのことを聞かせて」

「あ、ああ、まあ……。僕は、13の時
に施設を逃げ出したんだ。で、その後

は、ろくでもない仕事ばかりしてきた。それだけだな」

「どこに住んでるの？」

「その……いつも動きまわってるから、決まってるな」

僕は、実際の僕の状態を、そんなふうにごまかした。

金のために会いに来たなどとは、思われなくなかった。彼女から、なにがしかのものをせびろうという気が、まったくなくなかったと言えはウソになるが。

「君についても、きかせてよ」

「そうね。私は18になった時に施設を追い出された。そのあと、なんとかモデルの仕事にありついて働いてたの。で、去年、デューク・グレイソンという男と知り合った。じつは、もうじき結婚するの」

「えっ、結婚？ それは……おめでと

う！」

実の妹ばかりでなく、義理の兄弟までできるわけだ。僕は今年、どんな感謝祭を迎えるのだろうか？

「ええ」

彼女は素っ気なくうなづいた。

その表情に、腑に落ちないものを感じた。僕のお祝いの口調ほどの熱意もこもっていないのだ。でも、なりたての兄貴としては、それをどう問いただしたらいいのか、よくわからなかった。

「で、どんな人なの？」

「ひとことで言えば、億万長者。グレイソン産業の社長で大株主。私は、いっぺんに上流階級の仲間入りってわけ」

それなら、なおさら、その熱のないしゃべり方は変だろう……？

「ハネムーンは、世界一周なんだって」

つまり、アンドレアは、とんでもな

い人生を手に入れたということじゃないか。

僕は、ついつい、大金持ちの男が親戚になるということについて、思いをめぐらせていた。

花嫁の兄として、彼に気に入ってもらわなければならない。

なんと言っても、産業界のトップだ。そうすれば、僕にも、いい仕事を世話してくれるにちがいない。もう働き口さがしに追われることもない一生の定職を。

給料の前払いだって頼めるだろう。その金で、アパートだって借りられる。これまで経験したことのない安定した生活が手に入るのだ。

「それで、式はいつなの？」

「あさって」

「えっ、ほんとに？ それは、すごいじゃない」

「もしよかったら、列席してくれる？」

「えっ、僕が？ でも……」

もちろん、出たいのはやまやまだった。しかし、僕には金がない。結婚式に着ていくものすら買えないのだ。

と、アンドレアは、そんな僕の様子に気づいたようだ。

「服のことなら、心配しなくていいわ。式が始まるのより前に来てくれる？

入り口で、これを見せれば通してくれるはずよ」

彼女はそう言って、一枚の名刺を差し出した。それは、彼女がモデルとして使っているものらしかった。

「あなたが着るべきものは、こっちで用意しておくから」

「そんな……。僕は、君を困らせるようなことはしたくないよ」

「心配しないで。お金は、デュークが出すんだから」

僕は、気が進まなかった。施しを受けるのは、いやだと感じたのだ。

いや、もちろん僕は、これまで物乞いをしたことは何度だってある。でもそれは、どうしても、命をつなぐ手段が見つからなかったからだ。

そう、場合によっては、盗みだって働いた。でもそれは、道徳的に振る舞うにはあまりに悲惨な場所にいたからだ。

「で、式はどこでやるの？」

「マリーナ(※)にあるデュークのヨットの上よ」

(※訳注 サバンナ市は、大西洋岸の港湾都市)

彼女はそう言って、名刺の裏にマリーナの所在地を書いた。

「一度、デュークに会って挨拶しておきたいな」

「式の時まで待って。それより前に引き合わせたいけど、なにしろ今、ふた

りとも式の準備でてんてこ舞いな。じつは私も、あんまり時間がないのよ。もう行かなくっちゃ」

僕は、その言葉にがっかりした。

ずっと会っていなかったのだ。兄と妹という実感を得るためにも、語り合いたいことは、まだたくさんあった。

「忙しい時に、むりやり会いに来ちゃったりして、ごめん」

「いいのよ。ハネムーンから帰ったら、週末はもちろん、いつだって会えるでしょ。じゃあ……」

彼女はそう言って、僕の手には100ドル札を握らせた。

「なんでも、好きなものを食べて。結婚式で会いましょ」

そして、僕の頬にキスすると、そそくさと席を立った。

僕はけっきょくコークを頼み（浮浪者根性は、そう簡単に抜けるものじゃ

ない。せっかくの金をこんな高給レストランで使う気はなかった。)、それを飲みながら考え込んだ。

アンドレアに会えたのは、本当に嬉しかった。

でも、なんだか煮え切らないものを感じていた。

……彼女が、どこか浮かない顔をしていたのはなぜだろう？ ふつう、花嫁というのは、もっと幸せそうな顔をしているものじゃないだろうか？

少なくとも、結婚を間近に控えているというのに、彼女は妙に冷静に見えた。

それに、花婿のデュークに僕を紹介しないのはなぜだろう？ もちろん、結婚式になれば会えるのだが、それにしても、長年、音信不通だった兄が現れたのだ。いくら忙しくても、たとえば、ディナーに招くとかはできるはず

だ。

……いや、そんなふうに思うのは、よくないことかもしれない。

兄と言っても、まだ、彼女のことはほとんどなにも知らない。それなのに、彼女の気持ちを軽々しく詮索すべきじゃないだろう。

僕にはまだ、えらそうに兄貴面をする資格などないのだから。

こんな僕を、結婚式に招待してくれただけでも、幸せだと思わなければいけない。

僕は、ウェイターが持ってきた革製のバインダーに、レシートの中身も確かめずに100ドル札をはさんだ。

彼がおつりを持ってきた時、僕は、自分がやはり身のほど知らずのことを考えていたのだと思い知らされた。

今、彼女が生きている世界では、コーラ1杯が50ドルするらしい。

2日後、僕は、そのマリーナの入り口に立っていた。

前夜、教会のホームレス収容施設で事情を話すと、シャワーを使わせてくれ、ひげも剃らせてくれ、その上、新品ではないがきれいに洗濯した服も支給してくれた。

これなら、新しい家族に会っても、恥ずかしい思いはしなくてすむはずだ。

それにしても、これまで、こんなにたくさんのポルシェやメルセデスやフェラーリが、一カ所に停まっているのを見たことがない。

僕は一瞬、この近くに、盗品専門の解体屋がないかと考え、そんな自分に腹を立てた。

「せめて、あたりまえの人間のように振る舞うんだ」

僕は、自分自身にそう言い聞かせた。

入り口をこそこそ入り、デュークのヨットはどれかと探した。そして、しばらく歩いたところで目の前に現れたものを見上げた僕は、それが、小さな島でないことに、やっと気づいた。

ここまでに、次から次へとたくさんのヨットがつながっていた。僕が思い描くことのできるヨットの範囲は、せいぜい、毎日の荷積みや荷下ろしに使うタグボートやはしけより立派なものという程度だ。それらの船は、まあ、その範囲に入っていた。

でも、きっとデュークのヨットは、それよりは大きいのだろう。20人乗りぐらいのクルーザーということか……そんなふうに想像していたのだ。

ところが今、僕の目の前にあるのは

……オハマ(※)より大きいじゃないか！

(※訳注 アメリカ海軍の軍艦)

これはのちに知ったことだが、この船、グレイソン二世号には、5室の豪華なスイートルーム、ジム、サウナ、パーティールームが完備し、その他に、機関室や乗組員室があるのだ。

どうやらデュークは、大西洋の総水量にも負けなくらいの大金持ちらしい。そのへんの金持ちでは、こんな船は中古だって買えないだろう。

少なく見積もっても、デュークには、10億ドル単位の資産があるということだ。

僕は、思わず尻込みしていた。

アンドレアが、その大金持ちのフィアンセに、僕のことをどう告げたのか、それが気になった。

「ねえ、ハニー、どう思う？ ずっと

会ってなかったホームレスの兄が、突然やって来て、結婚式に出たいって言うの」

……どう考えても、ここは僕のいるところじゃないだろう。彼女が新婚旅行から帰ったあとで、もう一度、電話してもいいことだし……。

……いや、そんな弱気でどうする。僕はまちがいなく、アンドレアの兄なのだ。恥じることなどない。少なくとも僕は、親族席の片隅に座る資格はあるはずだ。

そう決意し、僕はタラップへと向かった。

結婚式が始まるまでにはまだだいぶ時間があったが、多くの人々がそこを出入りしていた。料理の材料を運び込む料理人や運搬人、会場設営のための作業者らしい人々……。

それらの人にまぎれて入ろうとする

と、そこにいた警備員がとめた。

「君は、なんの係だ？」

「あ、いえ、その……ぼ、僕は、花嫁の……アンドレア・ジョーンズの兄なんです」

「彼女には、兄弟はいないと聞いているが」

「ぼ、僕らは、赤ん坊の頃生き別れになって、別々の施設で育ったんです。だ、だから、ついこの前まで、彼女は僕の存在すら知らなくて……。そ、そうだ。彼女は、これを見せろと言っていました」

僕は、アンドレアからもらった名刺を見せた。

警備員は、それをちらりと見て言った。

「いったい、なにをたくらんどるのかしらんが、お前、こんなものでだませると思ってるのか」

「い、いや、ほんとなんです」

「さっさと消えろ。さもないと、警察を呼ぶぞ」

僕はどうすることもできなかった。

いや、たぶん、この男ひとりくらいは、どうとでもできた。でも、それはまずいだらう。大切なウエディングの場で、けんかなどしたら、アンドレアに迷惑がかかる。

それにしても、彼女は、どうして僕のことをちゃんと伝えておいてくれなかったんだらう……。

救いの神が現れたのは、その時だった。

クリップボードを持った40年配の女性だ。ビジネススーツ姿で、いかにもキャリヤウーマン然としている。そんな年齢と色気のない服にもかかわらず、彼女はじゅうぶんに美人に見えた。背がすらりと高く、そのくせ、出ると

ころは出て、均整のとれた体つきだ。

「ラーズ！」

彼女は、僕の前に立ちほだかる男に向かって言った。

「通してあげて。私が聞いているから」

その言葉に、ラーズは、直立不動になって脇にどいた。

「はい。承知しました」

と、その女性は、僕の腕をとり、船内へと招き入れた。

「私は、ニッキ・ルイス。ミズ・ジョーンズの個人秘書よ。いやな思いをさせて、ごめんなさいね。なにしろ、時間が迫って、みんな混乱してるから。ミズ・ジョーンズは、あなたをみなさんに紹介する前に、着替えてほしいと言ってるわ」

アンドレアもこの前言っていたことだし、それは当然だろうと僕は思った。

なにしろ、上流階級の人々に引き合

わされるのだ。きっと、これまで着たこともないような高級スーツかタキシードに着替えさせられるのだろう。

そう考えながらも、僕は、船内の豪華な雰囲気におどおどと目を走らせた。

「落ち着かない？」

ニッキがきいてきた。

「いえ、というか……まあ、そのとおりです。正直言って、僕は、ゆうべ、教会の収容施設に泊まったような人間です。ここには、不釣り合いな気がして……」

と、ニッキは立ち止まり、僕の目を見つめてほほ笑みかけた。そのほほ笑みは、やさしくて、本当にすてきだった。

「聞いて、アンディ。あなたは、ここにいる誰にも負けなくらい立派よ。もっと胸を張って、笑ってみて。恥ず

かしがることなんて、なにもないんだから」

「ありがとう」

ニッキは、その笑顔どおり、本当にやさしい人のようだ。

僕は、できたら、式の間、ずっと彼女がそばにいてくれたらと思った。パーティでダンスを踊ることになるなら、その相手は、彼女だろう。

「どっちにしても、あなたも私も、ここに来てしまったわけだしね」

彼女はなんだか意味ありげに言って、傍らのドアを指さした。

「この中で、ちょっと待っててくれる？」

そう言われ、僕はその部屋に入った。

小さめの部屋で、家具はベッドとナイトスタンドだけ。他にクローゼットの扉が並び、あとはバスルームらしいドアがある。どうやら、乗組員用の個

室らしい。

中にアンドレアはいなかったの
で、僕は、ベッドに腰掛けて待
った。

彼女が現れたのは、15分ほど経
った時だった。

「アンディ！」

入ってくるなり、彼女は笑いか
けた。「もし来てくれなかったら
どうしようって、心配してたのよ」

「まさか。妹の結婚式に、出ない
わけにはいかないだろ」

……そう、今日は僕のかわいい妹
の結婚式なのだ。家族にとっては、な
により大切なイベントだ。

「なにか飲む？」

彼女は立ったままで、そうきいて
きた。

「それよりもまず、着替えなくて
いいのか？」

僕はそう問い返した。教会のチャリティで寄付された服を見られているのは、やはり恥ずかしい。

「式が始まるまでには、まだ、たっぷり時間があるわ。私は、この前のつづきの話を聞きたいの。お兄さんのことをもっとよく知りたいから」

彼女がクローゼットの扉のひとつを開けると、そこから、小さなバーカウンターが現れた。

「なにがいい？」

僕は、いつも飲んでいるサンダーバード・ワインでは安っぽすぎると感じ、知っているうちでいちばんおしゃれだと思うジン・トニックを頼んだ。

「どうぞ……」

彼女は、僕にグラスを渡しながら、ベッドに隣り合って腰掛けた。

「あなたの話を聞かせて」

僕は、手にしたグラスをぐいとあお

った。

「いったい、なにを話せばいいんだろう？」

自分のこれまでの人生をふり返ってみても、話すべきことはなにもない気がした。女の子とつき合ったこともなければ、趣味や蒐集しているものもない、その上、まともな仕事すらないのだ。

僕は、自分が、まったく意味のない人間に思えてきた。

「話すことなんて、たいしてないんだ」

僕はそう言って、その酒をもうひとくち、ごくりと飲んだ。

その酒は、少しもおいしいと感じなかった。なんだか、苦すぎる気がした。

「そんなことはないでしょ。話してよ。20年近く生きてきたわけだし」

アンドレアは、かわいらしくほほ笑んでいた。

「うん、まあ、くだらない仕事と……
あとは、あちこち渡り歩いたくらいのことしか……あれ？ 君は飲まないの？」

「ええ、だって式を控えてるのよ。あなたは、遠慮なく飲んで」

彼女は、僕がジンを脇に置いたことを気にしたようだ。

僕は、その酒の味がどうも苦手だったのだが、彼女の悲しそうな表情に、あわててもうひとくちあおった。

そして、そのせいで、気分が悪くなってきた。

「いや、ほんとの話……ほんとに……うっ！」

僕は、胃のあたりを押さえていた。インフルエンザの初期症状（もっと悪い段階かも知れない）が、急に襲ってきたような感じだった。いや、それどころではなさそうだ。

神様、よりにもよって、どうしてこんな時に……。

僕は、もうこらえきれなくなり、ベッドに倒れ込み、体を丸めていた。

そして、助けを求めるようにアンドレアを見上げた。

ところが、驚いたことに彼女は、少しも心配しているようには見えなかった。というより、さっきまでと同じ、かわいらしい笑顔を向けているのだ。

「ア、アンドレア……？」

言った声が、かすれた。

気がつくのと、体を動かすことができなくなっていた。

「心配しなくていいわ、アンディ。お酒の中に、ちょっとお薬を入れただけよ。筋肉弛緩剤。お友達の薬剤師に頼んで、急いで調合してもらったの」

僕は、どうしてそんなことをしたのかときこうとした。しかし、口を動か

すこともできなくなっていた。指先をかすかに動かすことすらできない。

……なんてことだ！　いったい、妹は何をしようとしているんだ？

それが口に出せたにせよ、アンドレアには、すぐに答える気はなさそうだった。

彼女は、僕の体を、ベッドの上に乗っすぐに寝かせ直すと、ほほ笑みかけてきた。

「どうやら、うまくいきそうね」

……なにが、うまくいくというのだ？

アンドレアは、さっきとは別のクローゼットの扉を開け、そこに吊された衣装袋から、なにかを引っ張り出した。

クローゼットの中には、他にもいろいろ入っているようだったので、僕はそれを確かめようと、首をまわそうと

した。しかし、それももうまくいかない。

やっと僕の視野の中に入ってきたアンドレアは、ベッドに腰掛けた。

そこで、自分自身のために用意したらしいグラスを一口すすり、話し始めた。

「アンディ、聞こえてる？ もちろん、あなたには申し訳ないと思ってるわ。つまりね、ひとことで言えば、私はデュークを愛してなんかいないってことなの。私が愛してるのは、デュークの財産。施設を出た時から、こんなチャンスを待ってたのよ。まぬけな金持ちをつかまえて、私に夢中にさせる。その男を利用して、上流の仲間入りをする。デュークと会った瞬間、そんな計画にぴったりの男だと思ったわ」

彼女は、そこで、もうひとくち酒を飲み、そしてつづけた。

「最初はね、彼と結婚して何年か夫婦

生活を送ったあと、離婚して慰謝料を取ってやろうと思ったの。安く見積もっても、何千万ドルよ」

アンドレアは、夢見るように中空を見ながら言った。

「でも、それじゃあ面白くないって気もしてきたのね。たしかに、デュークはすてきな男よ。それは認めるわ。でも、寝る気にはならない。私の好みじゃないもの。だけど、彼の財産を手に入れるためには、そうせざるを得ない。毎晩、好きでもない男のおもちゃにならなきゃいけないのよ。そんなの耐えられる？」

アンドレアの笑顔は、なんだか不気味なものに変わっていた。

「そしたら、あなたが現れた。ね、愛するお兄ちゃん。それで、問題は解決したってわけ。いい？ デュークはね、私への誠意の印として、結婚と同時に、

つまり今日づけで、彼の預金口座を、私との共同名義にするって約束したの。私はもう、いつでも、彼の財産を持ち逃げできるってわけ。だけど、もし、式の最中に私がいなくなったら、さすがの彼も、すぐに手を打つはずでしょ。そこで、あなたが役に立つってことね」

僕は、なんとか体を動かそうとしたが、それは無駄だった。

要するに、僕は罠にはめられたのだ。おそらく、僕が金を盗ったように見せかけるということだろう。僕を殺しておいて、その死体をどこかに隠し、彼女自身も姿をくらます。僕が彼女を脅して金を手に入れ、そのあと、彼女を殺したと見せかけるわけだ。そうにちがいない。

しかし、その考えは、彼女の言葉により、もっと悪い方向へと否定された。

「いい、アンディ。式が終われば、私は自由にお金を手に入れられる。でも、私たちは、そのままハネムーンに出発することになってるの。しかも、この船でね。デュークは、1年かけて世界一周するとか言ってるわ。その間ずっと、私には、預金を下ろすチャンスがないってことよね。でも、もし、他の誰かが、私の身代わりになってくれるとしたら、どう？ 誰かが私の代わりに花嫁をやってくれてる隙に、預金口座をからっぽにできる。デュークがだまされたって気づいた時には、もう遅いってわけね」

そんな……。いくらなんでも……。そんなこと、無理に決まってる。

彼女には、僕の思ったことがわかったようだ。

「そう、あなたよ。あなたは今日、花嫁になるの。で、デュークがあなたの

正体に気づいた時には、私は、リオ行きの飛行機の上ってことね」

彼女は、本気でそんなとんでもない計画が成功すると思っているのだろうか？

彼女の今の言い方では、僕はまるで、妹の花婿を横取りしたがつているやきもちやきの姉のようじゃないか。そうでもないかぎり、僕が、妹の結婚式を乗っ取り、花嫁をやり通すわけがないだろう。

だいいち、そんなことをすれば、正体がばれたとたん、僕は刑務所行きだ。

しかし彼女は、なにも心配していないというようにつづけた。

「さあ、あなたにとって大事な結婚式よ。花嫁は、めいっぱいおめかししなきゃね」

そう言うと、彼女は恥ずかしげもなく——そして、こちらにとってはとん

でもなく恥ずかしいことに——、僕の服を脱がし始めた。

「ふふふ、すてきよ」

彼女は、僕の上半身の服をはぎ取りながら言った。

「最初に電話をもらったあと、もし、あなたががっちりした大男だったらどうしようって思ったのよ。でもあなたは、こんなにやせてる。これなら、完璧にかわいい花嫁になれるわね」

僕は叫び出したかった。彼女のことを殴り飛ばしたかった。でも、まるで猿ぐつわでも噛まされているようだった。拘束服でも着せられているようだった。

いや、そんな一時的な体の麻痺なんて大した問題じゃない。それより恐ろしいのは、やがて僕が、妹のかわりに着飾られるということだ。

そう思っているうちに、僕は全裸に

されていた。

自分のしていることを僕にも見せるためだろう。アンドレアは、わざわざ僕の頭を持ち上げ、その下に枕をかけた。

そんな姿勢で見ていると、彼女は、僕の脚に泡を塗り始めた。そのシェービングクリームがこぼれ落ち、シーツをへとべとに湿らしていたが、そんなことにはおかまいなしだ。

もちろん、かまわないだろう。彼女はこれから、フィアンセの金を盗み、兄に恥をかかせて逃げるつもりなのだから。シーツのことなんて、どうでもいいわけだ。

次になにをされるかは、想像がついた。

思ったとおり、女性用カミソリを取り出した彼女は、僕のすね毛をそり上げていった。途中何度か、カミソリを

すべらせ、僕の肌に小さな傷ができたが、彼女は、気にとめる様子もない。

次に彼女は、僕の腋の下を泡立てた。「さすがに、私より筋肉があるわね」そこにカミソリを走らせながら、彼女は言った。

「でも、誰にもばれないと思うわ。ほらね……」

残った泡を拭き取り、彼女はほほ笑んだ。

「こんなにきれいですすべすべよ。じゃ、次は胸毛ね」

といっても、僕はもともと毛深い方じゃない。乳首のまわりに少しと、へその下あたりに少し、毛が生えている程度だ。あっという間にそこからも毛がなくなった。

そのあと彼女は、毛抜きを持って僕がそり残していたらしいひげを何本か抜き、いったん作業を中断した。

視野から消えた彼女が戻ってきた時、その手には「氷のう」のようなものが握られていた。そして、なんの警告もなしに、彼女はそれを、僕の股間に押し当てた。その中にはやはり、クラッシュした氷がつめられていたようだ。僕の睾丸はいっぺんに縮み上がり、腹腔近くまで上昇した。男性自身も、見る影もなく縮んでいる。

「さっき、お酒に氷を入れるの忘れたから」

アンドレアは、からかうような口調で言った。

「それが、悪酔いの原因かもしれないでしょ」

縮こまった袋のあたりが、しびれるような感覚になったところで、彼女はまた、屈辱的なものを持ち出してきた。パッドを入れたブラだ。

「じつは、最初に選ぼうと思ったウエディングドレスは、オープントップで胸の谷間が見えるようなやつだったのね。それにしなくてよかったわ。今のなら、このブラだけで、にせ物であることがばれずにかわいい胸ができるはずよ」

彼女がそのストラップに僕の両腕を通して、僕は彼女になんとかきけないものかと思った。

いったい、どうして僕が、花嫁役をやり通すなどと考えるのかと。

花嫁をやるには、このままでは無理だ。でも、この麻痺が解け、動けるようになったとたん、僕は着ているものを引き破り、彼女のやったことを、列席者全員に告発することだってできるのだ。

しかし、そう思ったところで、僕は、彼女のフィアンセのデュークが気の毒

な気がしてきた。僕がそれをばらしたとたん、そのあわれな男は、衆目の面前で自分が何重にもだまされていたことを知るのだ。デュークも僕も、恥ずかしい思いをするのに変わらない。でも僕は、少なくとも、フィアンセに裏切られるわけではない。

すでに僕は、ブラを着けていた。僕はまるで……いや、ブラジャーをした男にしか見えない。この上、ウエディングドレスなど着たら、いったいどんなふうに見えるのだろうか？

……まあ、そんなことはどっちでもいいことだ。体の自由がきくようになったら、そのウエディングドレスも、すぐに引き裂かれるのだから。

このままいけば凍死するのではないかと感じたところで、アンドレアは、例の氷のうを僕の股からどけた。そして、また何かおかしなものを、僕の視

野の中に持ち込んだ。

「これは、ガフって言うの」

彼女はそう言いながら、その女性のビキニパンティのようなものを僕に見せた。

「これは、あなたの男性自身を隠してくれるわ。結婚式の最中にスカートが持ち上がって、ぴくぴく動いたりしたら、やでしょ」

反抗する力のない僕の脚を持ち上げ、彼女は、その衣類を履かせていった。

もし、体の感覚が戻っていたのなら、僕はそこにえもいわれぬ痛みを感じていたにちがいない。その下着は、それほどきつかった。僕の睾丸は、骨盤の中に埋め込まれ、縮こまった上に折り曲げられた僕のペニスは、もはやそこにはないように見えた。

こうして僕は、女性下着を身につけ、

力なくみじめにベッドに横たわっていた。

アンドレアが、ピンクのつけ爪を僕の指に押しつけ始めた時、僕はもう、さほどの驚きも感じなくなっていた。それよりも、このあとなにがされるのかが気になった。

「さてと」

まるで、僕が気になっていることに答えるだけでも言うように、アンドレアは言った。

「髪とメイクは後まわしにして……、いよいよウエディングドレスが着られるわよ」

ちらりと視野に入っているところから察するに、そのウエディングドレスは、雨天で試合開始が遅れた球場に敷かれる例のシートほど大きそうだ。そうでないとしても、使われた生地の量も、それにコストも、あれに負けない

くらいかかっているにちがいない。

……いや、もちろん、そんなことを気にする必要などない。体の自由がきくようになったとたん、どのみちそれは、びりびりに引き裂かれるのだ。

そのがらくたの中に、ベッドに寝たままの僕を埋め込むのは、やはり、けっこう手間がかかるようだった。時間のことが気になったせいか、アンドレアは、けっしてやさしいとは言えないやり方で、僕を扱った。

シェービングクリームでシートが湿った部分からずらされ、今度はベッドに横向きに寝かされた僕は、まるで、ずた袋にジャガイモをつめるように、押し込まれ、体を揺すられた。支える力のない僕の首は、それに合わせ、さらに激しく左右に揺れた。

そこで、アンドレアのやっていることが見えなくなった。体を裏返され、

その結果、顔が枕の中に埋まってしまったのだ。おかげで僕は、約2分の間、呼吸さえできなかった。

僕はこれまで、女を殴ったことなどない。でも、僕の双子の妹が、その第1号となることは、もはやまちがいがなかった。

「私の靴じゃあ、合わなさそうね」

ベッドからはみ出した僕の足を調べながら、彼女は言った。

「しかたないわね。なしでいきましょ。ヒールの高さもないわけだし、このウェディングドレスの裾は長いから、うまく隠れるわよ」

彼女は、さらに笑いながら言った。

「ふふ、裸足の花嫁か。ヒールが無理なんて、ひょっとしてあなた、もう妊娠してるの？」

落ちつけ、アンドリュー！

今、怒ってみてもしょうがないんだ

から。

そのうち、体さえ動くようになれば、アンドレアの正体を暴露することだってできるんだ。

寝たままの僕には、まだ、ウエディングドレスを着た自分がどんなふうに見えるのか、わかっていなかった。

ただ、ひとつだけたしかながあった。

僕はこれまで、自分の見かけに対して気を使うことなどなかった人間だ。1週間のうち何度かシャワーを浴びられれば、それで満足だという男だ。

アンドレアが僕を、どんな上流階級の花嫁にしようとしているかは知らないが、そんなことで動揺したりはしないはずだ。

気がつくと、視野からアンドレアが消えていた。

僕は、このまま、彼女が帰ってこなければいいのにと考えた。

でも、もちろん、そうはならなかった。

彼女は、僕に辱めを与えるにとどまらず、いよいよ、とどめの一撃を加えようとしていた。

それなのに僕は、未だ起きあがれないままだった。

聞こえてくる音から判断すると、彼女は、クローゼットの中からはなにかを引きずり出しているようだ。

それが視野に入ったところで、メーキャップテーブルであることがわかった。

ベッドによじ登ったアンドレアは、なんの警告もなしに僕の体をまたぎ、急所のあたりにどすんと腰を下ろした。その結果として、僕は、ひきつるほど息をつまらせた。

……お前は今、運がよかったんだぞ。わかってるのか？ もし、僕が動けたなら、今ごろ、お前はどうなっていたか……。

ブラシ、ペンシル、パフ、そして、口紅……そんなものが、僕の視野に入っては消えた。

自分がなにをされているのかは、頭の中に思い描いてみるしかなかった。

ただ、アンドレアが、ずいぶん手の込んだメイクをしていることだけはたしかだ。ウエディングドレスから出た首や肩にさえ、彼女は、パウダーをはたいた。

これが終わると、僕はきっと、白塗りのピエロのようになっているにちがいない。

どうやらその作業が終わったらしく、アンドレアは、悪魔の微笑を向けてうなずいた。

「ふふ、あなた、立派に花嫁よ」

そこで、彼女は腕時計を見た。

「あら、髪もきれいに仕上げるつもりだったのに、あんまり時間がないわね。ごめんね、アンディ。今日があなたにとって、人生でいちばん大事な日だっというのはわかってるのよ。だから、完璧な花嫁にしてあげたかったのに…」

僕は、必ず復習すると心に誓っていた。

たとえ、この件で刑務所にぶち込まれたとしても、たとえ、その刑期が20年だったとしても、出所したあと、必ず彼女を捜し出し、この借りを返してやる。

僕を毘にかけ、こんな辱めを受けさせているだけでも、その価値はじゅうぶんにある。その上、こんな格好で衆目の面前に立たせ、恥をかかせるのだ

とすればなおさらだ。

いや、なにより腹が立つのは、その言いぐさだ。

まるで僕が、進んで花嫁を演じるとでもいうような、きれいな花嫁であることを喜んでいるとでもいうような、その言いぐさ。

……いつか、必ず殺してやる。

アンドレアは、ぼさぼさの僕の髪を手早く切りそろえ、ヘアスプレー1本をすべて使い切るほど吹きかけ、セットしたようだ。

スプレーの霧が鼻に入り、僕が苦しい思いをしていることなど、まるでおかまいなしに。

彼女は、そのできに満足してはいないように見えた。でも、僕の方が、その何倍も気分が悪いのだ。

そこでアンドレアは、少し離れて僕の全身を点検した。

「まあ、いいわ。……準備完了。あなたは、いつでも花嫁として動き出せるわ。髪はともかく、そのメイクだったら、疑う人はいないはずよ。誰にも気づかれないと思うわ。でも、よく覚えといて……」

アンドレアは、部屋をかたづけ、化粧品をしまい、僕の服を拾い集めながらつづけた。

「すてきな花嫁に見せたいんなら、背筋を伸ばして立つこと、高い声を出すようにすること、それに、花婿と長すぎるキスはしないこと。物欲しそうで、みっともないからね」

アンドレアは、気でも狂ったのだろうか？

僕が、花嫁を演じるなんて恥ずかしいことを、本気ですると思ってるのか？

彼女の犯罪を隠蔽し、逃亡を助ける

とでも考えてるのか？

あわれな男の財産を独り占めする悪
だくみに手を貸すなんて、信じてるの
か？

で……、そんな悪ふざけみたいな犯
罪のせいで、僕が刑務所に送られるよ
うなことはない、保証するとでもい
うのか？

僕には、彼女の考えていることが、
さっぱり理解できなかった。

アンドレアは、部屋の中をすっきり
かたづけ、僕の服をすべてゴミ袋につ
めていた。

「これは、逃げる途中でどこかに捨て
させてもらおうね」

彼女がゴミとして扱っている僕の服
は、まあ、たしかにゴミのようなもの
かもしれない。でも、あの服のポケッ
トには、僕のなけなしの50ドルだっ
て入っているのだ。

そこで彼女は、もう一度僕に近づいた。

「ほんとにごめんなさいね、アンディ。でも、あなたが現れてくれたおかげで、すべてがうまくいったのよ」

彼女は、そう言って、僕の頬にキスした。

「怒るのはわかるわ。でも、そんな目で見ないで。デュークは、いい男よ。もしかしたら、あなただって、お金持ちの奥さんになることが、嬉しいって感じるかもしれないでしょ」

彼女はウインクをひとつ残し、僕の視野からいなくなった。

部屋のドアが開き、そして閉まる音がした。

彼女は、行ってしまったようだ。

* * *

僕は、もうどのくらい、こうしているのだろう。たぶん、実際の時間は、僕が感じているのより短いにちがいないが。

鼻がむずむずしていた。同じ姿勢をとらされているせいで、脚も痛み出していた。

ということは、体の感覚が戻り始めているということでもあった。でも、その感覚はまだ局部的で、体全体がつながっていない感じだ。

こんなみじめな気持ちを、正確に伝えるのはむずかしい。動けないという苦しさは、恥ずかしい格好をしているということも忘れさせるほどだ。

……僕の体を麻痺させているこの薬は、どのくらい強いのだろうか？

……アンドレアは、使う量を間違えたりしなかっただろうか？

……もしこのまま、一生動けなかつ

たら、どうしよう？

そんな長い恐怖との闘いのすえ、睡眠をとりすぎたあのような体のしびれが、あちこちで起こりはじめた。

まだ、通常感覚は戻っていないが、意識すると、指先が痙攣するように動く。

のどからも、かすれた音が出ていた。「よ……お……し……」と、思ったことが、かろうじて声になった。

僕は、早く動かなければならない。結婚式が始まり、誰かが花嫁を迎えに来るより先に、ここから抜け出し、力を貸してくれる人を探さなければいけない。

それから、30分くらいは経っただろうか。

腕や脚が、ある程度、動くようになった。

とはいえ、体の軸には、まだ力が入らない。

「もう少しだ」

考えたことが、ちゃんと言葉になった。

「あと少しで、なんとかなる」

まるで赤ん坊が発育するように、時間をかけて体を起こし、僕は、ベッドに座ることに成功した。

でもまだ、首がすわっていない。体をちょっと動かすだけで、大きく揺れるのだ。

頭の中では、このごてごてした服をさっさと脱ぎ、顔を洗い、代わりに着るものを探したいと、切実に思っているのだが、当面、僕にできたのは、ただ座って、心を落ち着かせることだけだった。

でも、このままでは、気が狂いそうだ。

僕は、なんとか、ベッドから立とうと試みた。

しかし、ウエディングドレスの何枚も重なった生地が、それをじゃましていた。足の所在さえよく見えない。

僕はスカートの裾を持ち上げ、床に着いた足に力を込め、なんとか、立ち上がった。

のどが渴いていた。なにか飲み物か、水道水でもいいから口にしたいと思った。

先刻、アンドレアが酒をつくったバーカウンターを思い出した。あそこには、まだ栓を開けていないトニックも並んでいたはずだ。

そう考え、クローゼットに近づいた時だった。壁に掛けられた姿見に、僕の姿が映った。

思わずそれを見つめ、僕は——恐ろしいことに——妹のたくらみの一部

が、すでに成功していることを知った。

そこにいたのは、たしかに、ファッション・クイーンとか、上流階級の女性とか、雑誌の見開きモデルとか、そんなふうにしてさしつかえない人物だった。

それが言いすぎだとしても、少なくとも、姉のウエディングドレスをむりやり着せられた14歳のおてんば娘のようではあった。おてんばではあっても、その姿から男を想像するより、少女だと思ふ方が簡単なのだ。

ウエディングドレスは、なんだかひどく大きく見えた。シルクとレースが何重にも重なったボリュームあるスカートが、腰から足先までを分厚く覆っている。

あのガフとかなんとかいうものを着けさせられているが、この服なら、あんなものは必要ないだろう。たとえ僕

のものが勃起して10インチの長さで立ち上がったとしても、そのすべてを、このふわふわした生地が吸収してしまうにちがいない。

たぶん、僕とアンドレアの体つきの微妙な差のせいだろう。上半身はちょっときつく、ことに、ウエストのまわりは、生地が張りつめていた。そして、それにもかかわらず……というか、それだからこそ、僕はより女に見えていた。結婚式でこの姿を目撃した人々は、僕を男だと思うより、僕が妊娠していると思う可能性の方が高い気がするのだ。

……そんな！

そのくびれから広がっていく上半身のシルエットは、胸のふたつの盛り上がりや、驚くほど本物っぽく見せている。

むき出しになった首や肩の肌は、日

頃の労働で日に焼けていたけれど、それがドレスの白と合わさり、細く見せる効果となっていた。

そこに、ネックレスがされていることに、僕は初めて気がついた。僕が動けないのをいいことに、アンドレアが着けたにちがいない。

……なんだよ、これは！

顔は、さらに悪かった。

僕は元来、鏡なんてそんなに見ないたちだ。ひげは薄く、あまり剃る必要はなかったし、髪も、ただまっすぐ下ろしているだけだから、わざわざ鏡で確かめなくても、とかすことができた。

たまに鏡を見るのは、ガソリンスタンドの洗面所で顔を洗った時くらいだが、そこで見る僕の顔は、やせこけて間の抜けたティーンエイジャーの男にすぎなかった。

それなのに、今日の前にいるのは、

ほっそりして清楚なティーンエイジャーの女の子なのだ。

ぼさぼさだった髪は、ヘアスプレーで優しい感じに整えられ、はっきりと女性の髪型になっていた。

ひび割れ荒れた唇は、赤い口紅とグロスが加わっただけで、可憐と言っているものに変わっている。

ハイライトのチークは、こけた頬を目立たなくし、女っぽい輪郭に見せていた。

マスカラは、僕の目を、パッチリとつぶらなものに変えていた。

アンドレアが、僕の顔を自分に似せるのにどこまで成功したかは判断がつかなかったが、少なくとも、僕を、美人にしてしまったことだけはまちがいはなかった。

……いや、それがどうしたというんだ。

メイクなんて、洗えばとれるのだ。
服だって、脱げばすむ。

要するにそれだけのことだ。

僕はそう思い、まだ多少もつれる足
で、バスルームへと向かった。

ところが、そのドアは鍵がかかっ
ていた。

それなら、メイク落とし用の化粧品
という手もあるだろうと思い、さっき
のメーキャップテーブルを取り出そう
とした。ところが、クローゼットもま
た、すべて鍵がかかっていた。

胃のあたりで、不安が渦巻いた。

つまり、今ここには、水もなく、化
粧を落とす他の手だてもないというこ
とだ。

そこで、さらに悪いことに気がつい
た。

アンドレアは服を持ち去ったわけだ
から、着替えるものすらないのだ。

唯一、体に羽織れるものがあるとするれば、それはベッドのシーツだが、それは、溶けた氷とシェービングクリームで、今やぐちゃぐちゃになっている。

いや、それよりなにより……。

僕は、女のようにメイクされたこの顔と、全裸の上にシーツだけを巻いた姿で、出口を求め、船内をうろつく自分の図を想像していた。

たとえば船から抜け出せたとして、そんな姿で街に出るのか？

アンドレアを装って電話し、誰か人を呼ぶという手はあるかもしれない。

コールドクリームと、スエットスーツを持ってきて……？

いや、そんなのは、疑いを招くだけだ。声でばれるだろうし、だいいち、すでに準備を終えた花嫁が、そんなものを頼むのか？

とりあえずこのまま出て行って、誰

かに水と着替えを頼むというのはどう
だろう？

誰かがなにかこぼしたとか言って…
…？

それはなんだかわざとらしい。

事情を、正直に言えるのがいちばん
いいのだが……。

問題は、船内に、僕の存在を知って
いる人間がいないということだ。

……いや、そうでもない。

そうだ、ニッキだ。

僕は、あのすてきな年上の女性のこ
とを思い出し、思わず泣きそうになっ
た。彼女なら、アンドレアの兄が、こ
の船内にいることを知っている。

少しの間、アンドレアになりすまし
て、誰かにニッキを呼ぶように頼むく
らいなら、できるかもしれない。

彼女はやさしい人らしいから、事情
を説明すればわかってくれるだろう。

僕を救い、すべてをうまく収めてくれ
そんな気がする。

でも、本当にこんな格好で、部屋の
外に出る勇気が、僕にあるだろうか？

僕に、勇気はあるか……？

僕は、これまでのことを思い出して
いた。

マコンの郊外では、夜中に興奮した
番犬に追われ、真っ暗な野原を逃げき
った。

ナッシュビルでは、見てはいけない
ヤクの売人の取引を目撃してしまい、
追われたすえ、10フィートのフェンス
をよじ登った。

タルサでは、売春婦のヒモにイチャ
モンをつけられ、バーの裏でナイフを
突きつけられた。

……いや、でも、今日の前にあるの
は、そんなこととはまったくちがうこ
とだ。

かつて、それらの危機に直面した時、少なくとも僕は、自分にどのくらいのことができるのかはわかっていた。逃げ足の速さだとか、すばしっこさだとか、そんなことをわかっていたから、自分をコントロールできたのだ。

ところが、今はどうだ。

結婚式を控えた花嫁として、人から疑われない？

いったい、僕の中のなにをどう使えば、そんなことができるんだ？

僕はもう一度鏡の前に立ち、自分自身をチェックしてみた。

メイクは、まだ崩れておらず、なんの問題もないように思えた。

あとは……。

そう言えば、さっきアンドレアがなにか言っていた。

背筋を伸ばして立つ。

そして……、高い声でしゃべる。

僕はそれを思い出しながら、幸せそうな笑顔をつくり、内心の恐怖を隠そうと試みた。

入り口のドアに手をかけると、やはり、ここだけは鍵がかかっていた。

さっきの微笑を思い出し、顔を作る。そして、高めの声でつぶやいてみる。「今日は、あなたの人生で一番うれしい日でしょ。そういう顔をしなきゃダメ……よ」

さらにもう少し笑顔をつくり、背筋を伸ばし、僕は、ニッキを探して廊下を歩き出した。

船の中は迷路のようで、ちょっと歩いただけで、どっちへ行っているのかわからなくなってしまった。

ときどき、乗組員たちとすれ違ったが、みんな僕に笑いかけながら通り過

ぎていった。どうやら、疑いの目はないようだ。僕はそれに、ちょっと安心した。

10分近く歩きまわったあげく、僕はけっきょく、誰かにきくしかないという結論に達した。

そして、責任ある仕事に就いていそうな船員を見つけ、声をかけた。

高さに気をつけながらも、小さな声で、ニッキの居場所を知らないかときいてみたのだ。

と、その船員が、ちょっとの間、瞬きしながらこちらを見つめてきた。僕は、今の声からばれたにちがいないと思い、どぎまぎした。

「ニッキ？」

彼はそう繰り返したあと、すぐ気づいたように言った。

「ああ、ミズ・ルイスですね。ちょっと待ってください。呼び出してみまし

よう」

どうやら、ばれたのではなさそうだった。

そもそも双子だし、アンドレアはハスキーだ。ひと言かふた言なら、うまくごまかせるのだろう。

その船員は、携帯無線機に向かって話していた。

「……そう、ミズ・ジョーンズが、ミズ・ルイスの居場所をお知りになりたいそうだ。誰か知ってる人間はいるか？……そうか、了解。そうお伝えするよ」

そして、彼は僕に向き直った。

「彼女は、ブルー・ルームにいるそうです。よかったら、来てくれと」

……ブルー・ルーム？ それは、いったい何だ？

「あ、あの……、まだ、船の構造がのみこめてないもんですから……」

「ああ、そうですね。あのドアを
通ってまっすぐ行って、階段を
上がると、右側です」

軽く会釈し、僕はすぐそこに向
かった。

そこは広いパーティルームだ
ったが、がらんとしていたので、
ニッキの姿はすぐ見つかった。

できたら、彼女がひとりのと
ころをつかまえたかったのに、
ニッキはテーブルで、男と談
笑していた。

男は、ニッキと同じカーキ色
のユニフォームを着て、サング
ラスをかけている。船員のユニ
フォームとはちがい階級章の類
はついていなかったが、顔は日
に焼けて風雨に刻まれている。
もしかすると、パイロットかな
にかかもしれない。

「おやおや、かわいい花嫁が
こんなと

ころに来てていいのかい？」

彼は、サングラスをはずしながら、
そう言って手を差し出してきた。

一瞬その手を強く握り返しそうになり、
そこで気づいて、ただ差し出すだけにとどめ、彼の力に任せた。

「アンドレア、その顔、かなりナーバスになってるな」

……困った。アンドレアは、この男と親しいようだ。でも、僕にはなんの手がかりもない。

今のところ、正体に気づかれたという感じではないが……。

僕は、とりあえず彼には答えず、ニッキの方を見た。

「ニッキ、ちょっと、話したいことがあるんだけど。二人きりで」

ニッキは、まだそのパイロット(?)と話したそうにしていたが、それにうなずいた。

「ええ、わかったわ。トレント、悪いけど、ちょっと外してくれる？」

と、そのトレントという男は、ニッキにウインクし、立ち去った。

ニッキは、そんな彼の後ろ姿を、なごり惜しそうに目で追った。

どうやらニッキは、トレントにロマンティックな感情を抱いているようだ。

彼の姿が消えると、ニッキはやっと、僕のことを思い出した。

「なんてすてきな！ そのウエディングドレス、ほんとによく似合うわ」

彼女はやさしく微笑みかけてきた。「でも、ちょっとメイクが濃すぎない？直してあげましょうか？」

そう言うと、ハンドバッグからパフを取り出し、僕の顔に当ててきた。

「いや、そうじゃなくて……」

僕は、あわてて身を引いた。

「もっと大事な話が……」

僕はそこで、他に人がいないか、もう一度周囲を見まわしてからつづけた。

「あの……今日の結婚式、中止してください」

と、ニッキは、どこか同情するような顔で僕を見た。

「ハニー、それ以上言わなくていいわ。私にはもう、わかってるんだから」

「えっ……知ってるんですか？」

「もちろん。心配しないで。すべて私に任せて。必ずうまく運ぶから」

僕は、肩の荷が下りた気がし、思わず喜びの声を上げそうになった。

今起きていることを、このニッキが知っているなら、心配することはなにもないだろう。彼女は、僕が逃げ出すのを手伝ってくれるにちがいない。

「こっちへ来てくれる？」

彼女はそう言って席を立つと、僕の手を引き、部屋の側面のドアまで連れて行った。そして、そこを開けると、さらに奥へと進んだ。

そこは、なんだか狭い通路だったが、抜けれると、小さな四角いスペースに出た。

壁の鏡とか、花瓶の花とか、装飾はそれなりにあるのだが、どこか殺風景な感じのする部屋だ。

「ちょっと、ここで待ってて」

ニッキは、そう言った。

「すぐに戻るから」

椅子はあったが、肘掛けの間が狭すぎて、ウエディングドレスでは座れそうになかった。

それで僕は、壁の大きな鏡の前に立って、自分自身の姿を点検するように見た。

と、自分が、なんだか妙にナーバスになっていくのを感じた。

目の前の女性の姿には、やはり大きな違和感がある。

性が変わっているというのはもちろんだが、どうもそれだけではない。

僕は、これまでの人生で、まともな服を着たことがない。高級といわれる服などなおさらだ。

だからこれは、僕にとって初めての高級な服なのだ。

おそらく数千ドルは費やしたオーダーメイドのウエディングドレス。

僕は今、それを着ているわけだ。

正直言って、僕には、こんな優雅な生活を棒に振ったアンドレアの気が知れなかった。

僕がばらせば、おそらく彼女は、刑務所に入ることになるのだろう。

そこで彼女は、せめてかつての貧し

い生活に戻りたいと思うだろう。

僕は今、そんな彼女を見てみたいと思っていた。

約15分後、ニッキが戻ってきた。

「ほったらかしといてごめんなさいね。いろいろ準備があったものだから。さっきのつづきを話しましょ」

……話しましょ？ なんのことだ？

これから、僕を逃がしてくれるんじゃないのか？

「ねえ、アンドレア」

ニッキは、そう呼びかけた。

「あなたの気持ちはよくわかるのよ。たいていの女の子は、結婚式の日、ナーバスになるものなの。特にその時間が迫ればね」

……えっ、そ、そうじゃないよ。

そんな！ ニッキは、僕の言った言葉を誤解しているのだ。

彼女は、僕のことをアンドレアだと思っている。そして、僕が、マリッジ・ブルーになっているのだと……。

「ちがうよ、ニッキ！」

僕は、あわてて言った。

「そんなことじゃないんだってば。もっととんでもない、もっと恐ろしい話が……」

「アンドレア」

ニッキはやさしい口調でとめた。

「それがなんであれ、そんなことを気にすることはないのよ。今日から、あなたの新しい人生が始まるの。これまでの人生はもう終わったのよ。いつまでも、過去のことにくよくよしてちゃだめ。そんなことは、もう昔の話、取るに足らないことよ。忘れなさい。だって、あなたは、今日から、デュークの奥さんなんですよ」

僕は、もうやけくそになっていた。

「だからッ、デュークと結婚なんて、
できないんだってば」

「落ち着いて、ハニー」

驚いたことに、ニッキは僕の頬にキスしてきた。

「いつかきつと、今日のこと、あなたは私に感謝することになるはずよ」

そう言いながら、ニッキは、僕の手になにか握らせた。

見下ろすと、それは花……さっきまで、そこの花瓶に生けてあった……花束……えっ、ブーケ？

僕がそれに気をとられているうちに、ニッキは、携帯無線機を取り出し、なにか言った。

「オーケー、今よ」

顔を上げると、目の前の壁が、ふたつに割れた。いや、壁ではなく、両開きの大きなドアだった。

その向こうになにかがあるのか、はっ

きり確かめる前に、ニッキが僕の背中を押した。

そのせいで、ウエディングドレスの裾につまずきそうになり、僕は、つんのめるように前に出ている。

と、僕の後ろでドアが閉まり、掛け金がかかった。

そこでやっと、周囲の様子に気がついた。

そこは、大きなホールのような部屋だった。なんと500脚くらいの折りたたみ椅子がセットされ、そのそれぞれに正装した人々が座って……というか、僕が部屋に入ったとたん、その500人がいっせいに立ち上がった。

そして、誰もが知っているあの行進曲が流れ出し、部屋中に響いた。

僕はそれに、胃のあたりが重くなってくるのを感じた。

部屋のあちこちで、フラッシュが光

った。

そのまぶしい光の中、赤いカーペットの向こうの端に、誰かが立っているのが見えた。こちらに向かって微笑んでいるのは、白いタキシード姿の若い男だ。

……つ、つまりニッキは、文字通り、僕の背中を押してくれたってこと？

ウエディングを恐がる娘を勇気づけたということなのだろう。それが僕のためだと……。

……もうッ！ どうしてこうなるんだ！

部屋中の人たちが、期待の眼差しで、僕に注目していた。

僕は、彼らに対し、これは、とんでもなく馬鹿馬鹿しいまちがいなのだ、と、大声で叫ぼうかと思った。

でも、それができないことも、僕にはわかった。

なにしろ、今ここには、何百人という人がいる。

それだけの人たちの前で、僕が女装した男だと白状する？

それは、あまりにも屈辱的だ。僕にとってもそうだが、それ以上に、アンドレアのフィアンセにとって。

結果、僕は、これまでの人生で最も抵抗のある決断をしなければならなくなった。

僕は、赤いカーペットの上を、一歩ずつ進み始めていた。

そのおずおずとした足取りに、さっきより多くのカメラが集中した。

これは、現実とは思えない。

そう、こんなことが、現実であるはずがない。

近づいていくと、アンドレアのフィアンセ、デュークの姿が、さっきよりはっきりと見えてきた。

デュークは、おおよそ30歳くらい見える。ハンサム……そう、GQ誌(※)的な意味でのハンサムだった。

(※訳注 ‘GQ’ アメリカの代表的男性ファッション誌 30~40代のヤングエグゼクティブが読者層 おしゃれだが落ち着いたファッションが特徴)

そして、そこにいるのは、億万長者。胃のあたりに、なんだか苦いものがこみ上げてくる感じがした。

考えてみれば、すべての問題は、この男に起因しているのだ。

もし彼が、僕の妹を見極めるのに、もう少し時間を割いてくれていれば、僕は、こんなめちゃくちゃな目に遭わなかったはずだ。たぶん、1日たりとも、彼の人生にかかわるようなこともなかったはずだ。

僕は、ついにその場まで達してしまい、彼の横に並んだ。

少年……幸せそうな彼の顔は、まるでそう見えた。

まあ、それは不思議なことじゃないだろう。なにしろこれは、彼の結婚式なのだ。

僕は、笑顔をつくるのに最善を尽くした。みじめさやおびえを隠すのに最善を尽くした。

この場から逃げ出すすべがないのだから、そうするしかないだろう。

司祭が、誓いのセレモニーを始めた。びくついて見えないように。幸せそうに見えるように。……僕は、そんな努力をつづけた。

……でもきっと、ブーケを握りしめて立っている僕のほほ笑みは、白塗りピエロのたにたにた笑いのように醜いにちがいない。

これまでいろんなやばい目にも遭ってきたけれど、こんな思いは初めてだ。

式に出てしまった以上、このあとの披露パーティでも、逃げ出すことはできないのだろうか。もしかすると、そのあとまでつき合わされることになるのだろうか。夜になり、デュークの部屋に行くところまで……！

……だ、だめだ。そんなこと。

アンドレアのやつめ、心の底から呪ってやる。

僕は、司祭のスピーチを、ぼんやりと聞いていた。……というか、頭の中ではまったく別のことを考えていた。ここから逃げ出すための算段を。

式が終わったら、たぶん僕は、この服を脱ぎ捨て、船から海に飛び込むだろう。てきたら、どこかに隠れて、着替えるための服を探したい。誰か、乗組員の服を拝借することはできるはずだ。この船には、ランドリーはあるのだろうか？ ……。

と、司祭が咳払いした。そして、隣では、デュークがひどく心配そうな顔で見ている。

それで、やっと気がついた。

「……ち、誓います」

僕は、咳き込むように言っていた。

その緊張した声がおかしかったのだろう。会場から、ちょっと笑いが起こった。

「ジョージア州により与えられた権限に基づき、私は今、あなた方ふたりが、夫と妻であることを宣言します。では、花嫁に、誓いのキスを」

今起きていることをはっきりと認識する前に、デュークの唇が近づき、僕の唇と合わさった。それはもちろん、慎みのある、唇を開かない、結婚式のキスだった。

それでも僕は、ただ呆然とし……目を閉じることさえ忘れていた。

デュークの唇が離れていき、唇をぬぐいたくなる気持ちを必死に押さえている時になって、やっと、このおぞましい一日の意味が、頭の中で像を結んだ。

僕は今、結婚したのだ。

……もう一人の男と。

僕は、花嫁。

僕は……、妻。

僕は、はめられた。

「オーケー、デューク。今度は、新婦の肩を抱いてくれ。はい、笑って」

カメラマンの前に立たされた僕らは、さっきから、1000カット分とも思えるほど、さまざまなポーズと笑顔を要求されていた。

僕は、言われるままに、歩き、花婿と手をつなぎ、式場の通路を行ったり来たりした。

その間、僕はずっと、神様に、願い、祈り、乞うていた。

……どうか、早くデュークと二人きりになれますように。

……誰にもじゃまされない、二人きりの場所に行けますように。

そう、僕には、彼と二人きりになって話さなければならないことがあるのだ。

彼に早く警告しなければ、取り返しがつかないことになる。

もちろん、この結婚が大きなまちがいだということも、わかってもらわなければならない。

そして、アンドレアが僕らに仕掛けてきたたくらみのすべてを、知ってもらわなければならないのだ。

それなのにニッキは、海をバックにした写真も撮ろうと言いだし、僕らを、多くの人々とともにデッキの一隅へと連れ出した。そこでもまた、カメラマンは何ポーズも要求してきた。

デュークと二人の写真だけでなく、僕は、彼の付き添いになった友人や、彼の父親といっしょの写真も撮られた。

そんなふうに花嫁として引きまわされたせいで、そのデッキから海に飛び込んで逃げるなどということもできなかった。

大声で真実を叫びたいという気持ちに何度も駆られたのだが、それができなかったのは、けっきょく、衆目の面前で「男の花嫁」であることが暴露されることへの恥ずかしさだ。

そんな屈辱にさらされるくらいなら、今日一日、花嫁を演じる方が、ま

だましに思えた。

もし、本来の花嫁であるアンドレアの親族でも列席していたのなら、僕の正体はすぐ見破られたのだらうが、僕とまったく同じ理由で、彼女にはそんな親族はいないわけだ。

「君は、ほんとにすてきだよ」

ささやいたのは、僕の……夫だ。

「ありがとう」

僕は、できるだけ感情を込めないように答えた。

さっきから列席者の誰もが、僕に、「きれい」だとか「美しい」とか「かわいい」と声をかけてくる。

僕はそれが、こういう席だからこそこの社交辞令であることを願った。

「オーケー」

カメラマンが言った。

「じゃあ、最後に、新郎新婦のキスのカットだな」

結婚式の時はなんとかがまんしたものの、同性どうしのキスへの嫌悪感を隠すのは、これ以上、無理だ。

「ちょ、ちょっと、座りたいんだけど」

唐突な気もしたが、なんとか高い声をつくり、僕は言った。そして、誰からの返事も待たず、そばのベンチに座り込んでしまった。

と、ニッキが近づいてきて、水の入ったグラスを手渡してくれた。

「アンドレア、ナーバスになるのはわかるわ。でも、今日の主役はあなたでしょ。あなた自身が元気を出さなきゃ。ね。花嫁が、そんなむずかしい顔してちゃだめよ」

そばにはニッキしかいないのを確かめてから、僕は、思わず、彼女の体にもたれかかっていた。

「くそっ！」

小さな声でつぶやいた。

ニッキにはそれが聞こえたようで、ちょっと驚いた顔で見つめたあと、立ち上がった。

「ねえ、みなさん。花嫁は少々疲れています。それに、パーティ会場には、お客様もお待ちかねです。そろそろ移動しませんか？」

また、胃のあたりが重くなった。

できるなら、パーティなんてなければいいと思っていたが、それはもちろん、あるだろう。

それにデュークは、花嫁をさらって駆け落ちする必要などない金持ちだ。

きっとまた、驚くほど大規模なパーティなのだろう。

「ダーリン、なにか、僕にできることはあるかい？」

近づいてきたデュークが、僕の裸の肩に手を添えながら言った。

それに振り向いた僕は、初めて、ま

じまじとその顔を見た。

黒い髪。それとよく似合った黒に近い茶色の目。

そして、輝くような白い歯。

ハンサムなその顔には、しわひとつなく、育ちの良さがしのばれた。

僕は、思わず彼の腕をつかんでいた。

「デューク」

そして、ささやいた。

「話したいことが、あるんだけど」

デュークは、僕の顔を心配げに見返した。

彼が、新妻の思いを無視するような男でないことが、僕にはなんだかうれしいことに思えた。

「うん、中で話そう」

向かった先は、ラウンジのようなどころだったのだが、そこにはすでに、デュークの親族が何人かくつろいでい

た。さっきのカメラマンもやってきて、そばでたばこを吸いはじめた。

「……ここで？」

僕は言った。

「どこか、二人きりになれるところがいいんだけど」

デュークは、またうなずいてくれた。

と、声が近づいてきた。

「ハネムーンが始まれば、二人の時間は、いやというほどあるでしょ」

僕は思わず、つばを吐きそうになった。

ニッキだった。

「さあ、前部デッキに行きましょう。お客様方が首を長くしてらっしゃるわ」

デュークはそれに反論しかけたのだが、ニッキは強引な感じでせき立てた。

僕は、口を差し挟む余裕もないまま、船の前部に向かわされていた。

広い前部デッキには、大きなダンスフロアと、バイキングテーブルがしつらえられていた。何百人という来客たちが囲むテーブルにも、すべて白いテーブルクロスが掛けられている。

「できるだけ早く、抜け出すようにするよ」

デュークが、耳もとでささやいた。

僕らがパーティ会場に入っていくと、12人編成のバンドが、ロマンティックなポップスを演奏しはじめた。

客たちは席を立ち、拍手喝采で出迎えた。

会場の一隅から、フラッシュがつつげざまに光った。

見ると、首からIDカードをぶら下げたカメラマンが何人もいた。新聞や、それよりは落ちるタブロイド紙のカメラマンらしい。

それに気づき、僕は思わず身震いし

ていた。

これは、メディアが取り上げるような結婚なのだ！

デューク・グレイソンと結婚したことが世界中に報道されたあと、僕はいったい、どうやって逃げ出そうというのだ？

僕らは、主賓席に案内された。

ウェイターやウエイトレスが、次々に料理を運んできた。レアのローストビーフ、チキン、魚……。

どういうわけか僕はベジタリアン用のコースだったので、それがちょっと不満だったのだが、まあ、さほどの問題ではなかった。

だいいち僕は、食欲がなかった。

僕がふさぎ込んでいることを心配したらしく、デュークが僕の手の上に、そっと手を重ねてきた。

港灣労働で荒れた僕の手比べ、彼

の手の方がなめらかなことに気づかざるを得なかった。なんだか恥ずかしくなって、僕は手を引っ込めた。

いよいよ幸せな花嫁に見えなくなったのは、まちがいなかった。

司会者が「最初のダンス」(※)を告げるのを聞き、僕は足がすくんだ。

(※訳注 ‘the first dance’ 結婚式のパーティでは、ダンスタイムの始まりに、新郎新婦ふたりだけのダンスが披露されるのが通例)

デュークに手をとられ、僕はしかたなくダンスフロアに出た。

デュークの手がウエストにかけられた時、僕は、彼の身長が僕よりずいぶん高いのにあらためて気づいた。

「あれ？ 君は、ヒールを履くって言ってなかった？」

彼はほほ笑みながら言った。

僕は、あれこれ戸惑いながらも、彼のもう一方の手をとった。

ダンスフロア全体を使って踊り、やがて彼は、フラッシュが次々に光る例のメディア席の前へとリードした。

僕は動揺を隠すため、歯を食いしばっていた。その顔が写真にどう写るかなど、かまっている余裕はなかった。

今朝、アンドレアに拉致された時、僕は、彼女の狂気じみた計画がうまくいくなどとは、つゆほども考えていなかった。

にもかかわらず、今、僕は、新婚夫婦の妻として、1000人にもおよぶ人々の前で夫とダンスしているのだ。

しかも、その1000人の誰ひとりとして、ある重大な事実気づいていないのだ。

これが、悪夢でなくてなんだろう。

「アンドレア」

デュークがささやいた。

「さっきから元気がないけど、どうか

したの？」

もちろん、こんな場所では話せない。ましてやすぐ目の前には、記者やパラッチたちが並び、読者が喜びそうなゴシップでもないかと、目を光らせているのだ。

こんなことは早く終わりたいかったけれど、パーティがすむまで待たなければしかたないのだろう。

「ちょっと、頭痛がしてるだけ」

しかたなく、僕はそう答えた。

そして、彼にほほ笑んでみせた。

……どのみち数時間後には、こいつは、奈落の底に落ちるのだ。

そんなあわれな男に、せめて今だけでも、愛する妻を持った幸せを味わわせてやってもいいだろう。

その、僕のちょっとした微笑が、彼を元気づけたことはまちがいになかった。

その証拠に、彼は、まるでぶつけるように、その唇を僕の唇に合わせてきたのだ。

それは、式の時のシンプルなキスとはちがっていた。

彼は、片方の手を僕の頭の後ろにまわし、やさしいけれど力強く、その舌を僕の口の中に押し入れてきた。

僕はそれに呆然とし、抵抗することすらできなかった。

ちなみに、後日、その時撮られた写真を見た時には、驚きも隠さず大きく目を見開いてキスを受ける僕の顔に、思わず吹き出してしまった。

曲が重ねられ、他の客たちがダンスフロアにあふれてくると、僕を気づかっただけらしいデュークが、席へと導いた。

乾杯とスピーチの時間まで、僕は、そこで大人しく座っていた。

デュークの親族たちが、僕に対し、まるで本物のアンドレアに語りかけるようにしたスピーチは、ちょっと興味深かった。

どうやら、彼らのアンドレアに関する知識は、僕とさほど変わらないようだ。きっと、デュークとアンドレアの婚約期間は、そんなに長くなかったのだろう。

と、突然、僕のところにマイクがまわってきた。

花嫁の番ということのようだ。

僕は、短くて破壊的なスピーチをしたいという衝動に駆られたが、それを思いとどまった。

やはり、こんな場所で、そんな残酷なことはしたくない。

悪いのは、デュークではないのだ。

「デュ、デューク……」

僕は、ちょっと口ごもりながらしゃ

べり出していた。

「く、口べただから、うまく言えないけど、これだけは、知っておいてください。あなたは、本当にやさしくていい人です。あなた自身が、それを忘れないでください。たとえこれから、どんなことが起ころうと、けっして、それを忘れないで。ぼ、いや……あたしは、どんなときも、あなたを傷つけないなんて思いません。あなたのことが……好きだから。それを覚えておいてください。ぼ……あたしは、あなたのことを心から……その、つまり……愛しています」

僕には、他の人のスピーチのように、ロマンティックで齒の浮くような言葉を並べることはできなかつた。できるかぎり、僕の気持ちに添ったことしか言えなかつたのだ。

それでも、デュークは、感銘を受け

たように見えた。

僕からマイクを受け取ると、僕の頬にキスしてきた。

客たちは、それを見て拍手した。

「ああ、アンドレア、なんてかわいい人なんだ。君の今の言葉が、どれほどうれしかったか、わかるかい。君と知り合って1年になるけど、僕はまだ、本当の君をわかっていなかったようだ」

……そう、あなたはもっと、本当の
アンドレアを知るべきだった！

僕は、心の中で言っていた。

「僕も、けっして口がうまい方ではないけれど……」

そのデュークの言葉に、聴衆の中で笑いが起こった。

たぶんそれは、ずいぶん謙虚な表現なのだろう。はっきりしたことはわからないが。

「僕も、君を心から愛してる。僕の持てるものは、すべて君のものだ。一生を君といっしょに過ごし、君を幸せにすることを約束するよ」

……デューク、できない約束は、しない方がいいよ。

来客たちが、歓声を贈った。

デュークは、僕のおでこにキスしたあと、彼らの方を向いた。

「ここに集まったみなさんが、僕たちの幸せを喜んでくださることを、うれしく思います。たくさんのプレゼント、たくさんのお祝いの言葉をありがとう。そして、それ以上に、みなさんの愛に、心から感謝します。僕たちが世界一周のハネムーン・クルーズから帰ったら、また、ぜひお会いしましょう」

……ケッ！ 結婚のイベントは、これで終わりじゃないってか。

最悪の事態を想像した僕の顔は、巨

大なケーキをカットする時も、まるでロボットミ―手術を受けた患者のように見えたはずだ。

実際、その夜、イベントはさらにつづいた。

大方の客が帰ったあとも、僕は、初めて会う（でも、アンドレアは会ったことのあるらしい）人々と話を合わせ、笑顔を保っていなければならなかった。デュークの父親とダンスした時はもちろん、その他の時も、みじめな内心をさらさないよう努力しつづけた。

そんな「二次会」は何時間にもおよび、デュークが僕の手をとったのは、もう朝といってもいい時間だった。

「さあ、そろそろ行こうか？」

僕は、感謝を込めてうなずいた。

たとえ花嫁を演じるのではないとしても、こんなパーティは二度とごめん

だった。

僕には、おしゃれな食べ物と成金趣味を両手に持ち、金持ち風を吹かす鼻持ちならないやつらの相手なんて、もううんざりだった。

こんな場からは、一刻も早く立ち去りたかった。

デュークと僕は、盛大な歓声とライスシャワーを浴びながら、船室部へ戻った。

でも、デュークと話す時間はなかなかとれなかった。そのあともずっと、僕らのまわりには、船員やパーティスタッフ、その他の乗組員がいたからだ。

やがて僕らは、オーク材で装飾された廊下を歩いていた。そして、その突き当たりには、両開きのドアがあった。

ドアが開くと、その向こうは、超豪華設備のスイートルームだった。

……ハネムーン・スイート！

「デューク、あの……」

僕はあわてて呼びかけ、ずっと話したかったことを話そうとした。

「そのまま」

デュークはそれを制するように言った。

そして、まるで僕をすくい上げるように横抱きし……リビングルームを通り抜け……次の部屋の真鍮製ベッドの上に……やさしく横たえた。

あわてて身を起こすと、彼がベッドルームの鍵をかける音が響いた。

これ以上ことが進むことは、あつてはならなかった。これ以上の進行は、断固阻止しなければならなかった。

結婚式の夜の新郎の義務を果たす必要などないことを、デュークに、すぐ

に告げなければならなかった。

「デューク！」

僕は、ベッドから立ちながら呼びかけた。

「どうしたんだい？」

彼は、靴を脱ぎながら言った。

「デューク、待って。話さなきゃいけないことがあるんです」

僕は、後ずさりながら言っていた。

「話す？ 新婚初夜に？」

デュークは、ネクタイをゆるめた。

「これから、いくらだって話せるんだよ」

「聞いてください。お願いします。そんなに長い話じゃないから」

デュークはため息をつきながら、ナイトスタンドのところまで行った。そして、そこからシャンパンのボトルを選び出すと、栓を抜きはじめた。

「じゃあ、話してみて」

「どう言ったらいいか……、うまく言えないけど……」

ポンと音がして、コルクがとんだ。「なに？ 話したいって言ったのは、そっちだろ」

僕は、このとんでもない1日で初めて、自分より気の毒な人間を見ている気がした。

ひとりの男に向かって、あなたの花嫁は男だなんて、どんな顔で言えるのだ？

しかも、その花嫁の男というのは、僕なのだ。

「デューク、あなたの知らない、大事なことがあるんです。大事というか、ひどいというか……」

デュークは、ふたつのシャンパングラスを満たしながら、何気ないように言った。

「もしかして、君は、前に結婚してい

た？」

「いいえ」

「じゃあ、僕の他に、好きな人がいる？」

デュークはそうききながら、僕にグラスを渡した。

そのひとくちが、僕のシャンパン初体験だった。そして、あまりのおいしさに、僕は本当にひとくちで飲み干してしまった。

「好きな人なんて、いません。そんなことじゃなく、もっとずっとひどいことが……」

デュークはすぐに、シャンパンを注ぎ足してくれた。

「言ってごらん。たとえなにを聞かされたとしても、君に対する気持ちは揺るがないつもりだよ、アンドレア」

「心を落ちつけて、聞いてくださいね」

でも、デュークは落ち着いてはいな

いようだった。

僕のむき出しの肩に手をかけてきたのだ。

しかし……

「もしかして、それは……」

そう言ってから、デュークは一拍おいた。そして……

「君が、アンドレアじゃないってこと？」

デュークが浮かべていたちょっとにやけたような表情が、一瞬にして、真剣に問いただす感じになった。

「し……知ってたんですか？」

「ああ、君が本当は誰なのか、正確には知らないけど……」

その声は、傷ついているように聞こえたが、けっして怒ってはいなかった。

「いくらなんでも、自分のフィアンセだ。僕だって、それがわからないほど馬鹿じゃないよ。鼻の形が微妙にちが

う。声も変だ。それに、アンドレアの肩には、こんなそばかすはなかった。たしかによく似ているけれど、アンドレアじゃないのはすぐわかったさ」

僕は、全身から力が抜けていくのを感じた。

「で、でも、どうして、そう言わなかったんですか？」

「式やパーティの間には、そんなひまはなかっただろ。それに、おおよそ見当もついてたし。君は、アンドレアの双子のかたわれ。ちがうかい？ アンドレアはじつは双子で、もう一人もやはり施設で育ったらしいって話は、前に彼女から聞いたことがある」

「そ、そうなんです、生き別れの妹の結婚を祝いたくて来たのに、アンドレアがしたのは、麻酔薬を飲ませることだったんです。それで動けなくなっているうちに、彼女は、あれこれ細工し

て逃げ出した。誰かに知らせようにも、薬のせいで、式の寸前まで動けなくて……。だけど、ニッキにはちゃんと言ったんです。式を中止するようにつて。うまく伝わらなかったみたいだけど……。ウソじゃないです。ニッキにきいてください」

そんな僕の説明に対し、デュークはなにか他のことを考えているようだった。

「親にも、それに友人たちにも、彼女は信用できないって言われてたんだ。だけど僕は、彼女はそんな人間じゃないと言い張った。僕を愛してくれてると思ったから」

「……そ、そうだ。デューク、アンドレアは、あなたの財産を持ち逃げしようとしています。あなたの口座が彼女と共同名義になったのを利用して。それを下ろして、リオに逃げるとか言って

ました。早く、口座の凍結をしないと……」

すると、デュークは首を振った。

「それはだいじょぶなんだ。じつは、彼女にウソをついてたんだ。彼女の気持ちを確認めたくてね。もともと、ハネムーンから戻るまで、名義を書き換えるつもりなんてなかった」

「……えっ？」

僕はまた、体の力が抜けていく気がした。でも、とりあえず謝った。

「ほんとにすみませんでした。でも、さっきも言ったように、ただ妹の結婚式に出たかっただけなんです。それが、まさかこんなことになるなんて……」

今、デュークは、ベッドの反対側に座り、僕からは目をそらしていた。そして、時折、ボトルから直接シャンパンを飲んだ。

「みんな、彼女のことを、詐欺師だと

ののしった。みんな、金が目当てだと言った。僕は、他の人たちが見ていない彼女の本当の姿が見たいと思ったんだ」

「あなたは、なにも悪くないです。二人とも、彼女にだまされたってことだから。初めて妹と出会えて本当に喜んでいたのに、彼女は、クスリ入りの酒を飲ませた。そして、肉親を道具にしようとした……」

本当のことを言えば、僕は、内心ホッとしていた。彼が僕の正体を知って激昂しなかったことに。

あと残る問題は、どうやって帰るかということだけだ。

男物の服を用意してもらい、人に気づかれないようにそっと船から下ろしてもらおう……。

見ると、デュークは、未だ呆然とした顔で僕の言ったことを繰り返した。

「そう、二人とも、体よくだまされたってわけだ。僕も、そして、君……？」

君、名前はなんて言うんだい？」

「アンドリューですけど」

と、デュークはうなだれていた顔を上げ、僕を見た。

そのハンサムな顔が見る見る怒りでゆがんでいった。僕はそれに、わけがわからないまま怯えた。

「な、なんだとッ！」

デュークは叫ぶように立ち上がった。

「ど、どうかしたんですか？」

僕も思わず立ち上がり、後ずさっていた。

次の瞬間、デュークは、僕に飛びつくように近づいた。

そして、僕のウエディングドレスの前の部分に手をかけ、そこを力まかせに引き裂いた。無惨に破れたその高価

な衣装と、ずれたブラの下から、僕の平らな胸と小さな乳首が顔を出した。

「お、お前、オカマ！ アンドレアの姉……じゃなく……兄！」

どうやらそれが、彼が冷静でいられた理由だったようだ。

僕がアンドレアでないことはわかっていたが、僕が男だとは思っていなかった……。

「デュ、デューク、聞いて」

そう言ったにもかかわらず、デュークは振り上げた拳を、僕の顔に向かってつきだした。次の瞬間、僕は床の上に殴り飛ばされていた。

「こ、このホモ野郎！ 世界中の人間に見られたんだぞ。お前と、キスするところを」

彼は僕の腕をつかみ、もう一度、僕を床に打ち据えた。

「お前、自分がなにをしたのかわかっ

てるのか！」

僕は、ひどい目にあったのはこっちも同じだと言おうとした。いや、僕の方がもっとひどい目にあったのだと。でも、すぐには言葉が出てこなかった。

ただ、彼がふたたび拳を振りかざしたのを見て、次にとるべき行動だけは判断がついた。

これまでの何十回とないケンカの経験から、僕は、こんな場合、最も相手をひるませる急所（いや、あそこではなく、眉間だ）を知っていた。そこに向けて、軽くジャブを出すと、思ったとおり、デュークはしりもちをついた。

彼が身を起こし、もう一度襲いかかろうとする前に、僕は、手早くシャンパングラスをつかみ、ドレッサーの角にぶつけて割っていた。

僕の手握られた、割れ目がギザギザになったその凶器に、彼は動きを止

めた。

「落ち着いて聞いて」

僕は、できるかぎり冷静な声で言った。

「あんたが、屈辱的だと感じて、傷ついているのはよくわかるさ。信じてた人に裏切られたわけだしね。でも、それは僕だっておんなじだろ。それに、僕はオカマでもホモでもない。もちろん、あんたの花嫁の役なんてやりたくなかった。あんたはひどい目にあったかもしれないけど、僕は、その2倍もひどい目にあってるんだ」

デュークは、床にひざまずいて、鼻血が流れはじめた鼻を押さえていた。

彼はなにか言い返そうとしたが、僕はそれに重ねるようにつぶけた。

「ああ、あんたが有名人だってことは、わかってるよ。四六時中、世界中から見られてることもね。トイレの中にだ

って、マスコミが追かけてくるんだろ。だから、今夜ここで起こったことが世間に知れたら、どんなことになるか、だいたいの想像はつくよ。でも、僕だって、こんなことは、あんた以外の人に知られたくないんだ。だから、こうしないか……」

デュークが僕の言葉を聞いているのを見て、僕も警戒を解いた。

「まず、僕のために、着替えの服を用意してほしいんだ。あんたが使うって持ってこさせればいいだろ。僕にはちょっと大きいかもしれないけど、がまんするよ。今夜はここに身を潜めてるつもりだ。あっちのソファで寝るから心配はいらない。朝になったら、ニッキか誰かに頼んで、こっそり船から降ろしてほしい。マスコミには、結婚を取り消したって発表すればいいだろ。アンドレアは、あんたの金を狙った詐

欺師だったって言えばいい。ほんとのことだからね。もちろん、僕は誰にもなにもしゃべりはしない。住む世界が違うあんたなんかとは、一度も会ったことはない……それで、いいだろ？」

デュークは、かなり長い時間、なにも言わずに考えていた。

そして、立ち上がった。

「ちょっと、ここで待っててくれ」

そう言うと、彼は部屋を出た。

デュークがいなくなると、僕はすぐに、ウエディングドレスを脱ぎ捨てた。

ブラジャーやガフ、それにつけ爪も、すべてはずした。

クローゼットを探すと、「DG」とイニシャルが刺繍されたバスローブがあった。完璧だ。

僕は、単に男姿に戻りたかっただけじゃはない。僕を見たデュークが、僕

の花嫁姿を二度と思い出さないようにしたかった。

それは、僕らふたりにとって、なんだか危険なことだという気がした。

バスルームを見つけ、その鏡に自分の姿を映してみた。

メイクはちょっと崩れていたし、髪の毛は、ヘアスプレイのせいで、かえってぐしゃぐしゃになっていた。それに、デュークに殴られたアザが、目の下に広がりはじめていた。

その姿はもう、花嫁ではなかった。せいぜい、バーでけんかした女装者というところだ。

シンクにお湯をため、そこに頭全体を突っ込んだ僕は、メイクを落とし、髪の毛を元に戻そうとした。

でも、それだけでは、化粧品やヘアスプレーが完全には落ちきらなかった。本来なら、クレンジングクリーム

とか、石けんやシャンプーを使わなければならないのだろう。

けれども、それをしている時間はなかった。

デュークが戻ってきた時、シャワーを浴びているなどという図は、避けたかったのだ。

やはりデュークは、ほどなく戻ってきた。

ただ、一人ではなかった。ニッキがいっしょだったのだ。その手には布製の袋を持っている。

彼女が目を腫らし、落ち込んだ表情をしているのに、僕はちょっと救われた思いがした。彼女は、泣いていたにちがいない。

僕がこんなひどい目にあったのには、彼女にも責任がある。

もちろん、彼女に悪気がなかったの

はわかっている。

でも、あの時、僕の言うことをもう少しちゃんと聞いてくれていたなら、こんなことにはならずすんだのだ。

見ると、デュークは、打ち砕かれたハネムーンの残骸に目を走らせていた。

破れて脱ぎ捨てられたウエディングドレス、割れたグラスやボトル、そして、震え立ちすくんでいる花嫁……だった男。

僕を見つめたデュークの体がちょっと緊張したので、僕も身構える準備をした。しかし……

「座ってくれ」

彼は、ニッキと僕に、そこに並んだアームチェアを示した。

「話さなければならぬことが、山ほどある。まず第一に、君は誰なのか、どうしてここに来たのか、すべて正直

に話してくれ」

それは、さほどの時間を要しなかった。

施設で育ったいきさつと脱走のこと、アンドレアを訪ねてサバンナへ来たこと、彼女にクスリを盛られたこと……。

話しているうちに、僕は、自分のことながら、なんだか馬鹿馬鹿しいような気分になった。

途中、ニッキが、持ってきた袋を渡してくれた。ちらりと中をのぞくと、靴と肌着、そしてジーンズと男物のシャツが入っていた。

「ニッキ、君の意見を聞かせてくれ。かの……彼の言ったことは、信用できると思うか？」

話がすべて終わったところで、デュークがきいた。

と、ニッキは、僕の方を見ることも

なく、すぐにうなずいた。

「彼は、準備の人々が入り出るさなか
かにやって来て、みんなに目撃されて
います。その上、警備員とひと悶着起
こしていました。もし、なにかをたく
らんでいたなら、もっと警戒して、そ
んな馬鹿なことはしなかったはずで
す」

「なるほど」

デュークはそう言って立ち上がると、
僕らのまわりをゆっくりと歩き始
めた。

「まずは、僕のもとフィアンセである
あの詐欺女に感謝しよう。僕は、彼女
を告発したりせず、彼女の仕掛けにま
んまと引っかかることにする」

「引っかかる？ どういう……ことで
すか？」

わけがわからず、僕は聞き返した。

「彼女のたくらみを暴いて、結婚を取

り消す。それでいいんじゃないですか？」

と、デュークは首を振った。

「君は、それがどれほど世間の注目を集めるか、わかってないんだ。もし僕が、結婚の翌日にそれを取り消したとなれば、マスコミは必ずその裏に何かあると思う。彼女が財産を狙っていたというだけじゃ納得はしない。そして、根掘り葉掘り調べる。今日の結婚式のことを嗅ぎまわり、彼女が警察につかまるか否かにかかわらず、彼女の証言をとるだろう。来週のダブロイド紙の見出しには、あの花嫁の正体も含めて、今夜のことが書き連ねられるんだ。君は、それでいいのか？」

その言葉に、僕はいっぺんに憂鬱になった。

最悪の一日はすべて終わったと思ったのに、デュークは、それがまだつづ

くという。そして、それは、まちがないことに思えた。

セレブのゴシップをさぐって、パパラッチたちがどれほどしつこく嗅ぎまわるか、僕だって知っている。

このネタは、まちがいなく、彼らに愛されるだろう。

「……で、どうしようっていうんですか？」

「アンド…リュウ」

僕の男名前を呼ぶ彼は、つらそうに見えた。

「とるべき手はひとつしかない。僕は気が進まないし、君もいやだと思う。でも、これが、問題を乗り越える唯一の方法だ」

僕の胃が、またぐるぐると鳴った。

「どういう……ことでしょう？」

僕は、つぶやくようにきいた。

「アンドレアと僕が、世界一周のハネ

ムーンに行く計画だったのは知ってるね。そのほとんどの時間は船の中だ。世間の目に触れるのは、途中、寄港地に上陸する時だけ」

僕はそこで、彼の言いたいことの見当がついた。でも、僕が異議を差しはさむ前に、彼はつぶけた。

「船内にいる間、君は、君のままで過ごせばいい。でも、寄港して観光地をめぐったりする旅では、僕の妻になってほしい」

「そ、そんな……」

「ひと月に何回かだ。ハネムーンクルーズはおよそ1年を予定してる。それから帰ったところで、僕は離婚を申し立てる」

「む、無理です」

「それなら、マスコミもよぶんな詮索はしないはずだ。1年で離婚するカップルはいくらだっている。それに、1

年も経てば、僕らの結婚式のこと、世間は忘れてはいるはずだ」

僕は、思わず立ち上がっていた。

「じょ、冗談じゃありません。女になるなんて、1日だけでもうんざりです。それをあなたは、丸一年も……。もう、こんな話は終わりにしましょう。僕は、今すぐ帰ります」

例の服の袋をつかみ、僕はその場を離れようとした。

「君は、どこにも行けないよ」

デュークは、確信に満ちた口調で言った。

「そ、それは、脅迫ですか？」

「いや、事実だ。この船は、もう出航している。次の寄港地はマイアミ。到着予定は明日の夜だ。その時まで、よく考えてほしい」

僕は、ふたたび座らざるを得なかった。

「それに、君が出て行けない理由はもっとある」

デュークはそうつぶけた。

「もし君が、フロリダでこの船を下りたとすれば、君は必ず見つけ出される。マスコミは、君を質問攻めにするだろう。パパラッチたちが、大金持ちをだました詐欺女の双子の兄で、はからずも共犯者になった男を、黙って見過ごすとも思うのか？ 結果はどうなる？ 君は一生、『女装の花嫁』とか呼ばれるわけだ、アンドリュー」

さらに、彼は言った。

「この船は、彼らから逃れる絶好の隠れ家になる。君はここで、そんなに多くのことを要求されるわけじゃない。人前に入る時だけ、僕の妻としていっしょにいてくれればいい。僕に甘えたり媚びたりする必要はまったくない。君が冷たい態度をとれば、それは1年

後の離婚への布石にもなるはずだ。あとは、カメラマンたちの要求に応じて、ちょっとポーズをとるくらいのことだ」

そして、こう締めくくった。

「もうひとつ、君が出て行かない理由がある。もし君がこれに協力してくれたなら、僕は君に、百万ドル出すつもりだ」

僕はしばらく呆然としていた。

その間、デュークはニッキに、このエリアに人を寄せつけないよう頼んでいた。彼が今夜、この船室で過ごさないことを、他の乗組員たちに気づかせないためらしい。

そして、ふと気づくと、僕はひとりになっていた。

……えっ、百万ドル？

信じられないことが次々に起こるシュールな夢から目覚めたあと、しばらくの間、僕は自分がどこにいるのかわからなかった。

ベッドサイドに立つニッキの姿を目にしたところで、やっと昨日の出来事を思い出した。

「なに……してるんですか？」

僕は混乱しながらきいた。

ニッキは、なぜかうつむいたままで答えた。

「朝食を持ってきたのよ」

彼女が示した方を見ると、そこにワゴンが運び込まれていた。その上には、丸い覆いのかぶされた皿と、オレンジジュースの入ったガラスポット、それに、フルーツの盛り合わせが置かれていた。

僕は、自分が履いているのがボクサーパンツのままであることを確認してから、ベッドを出て、ワゴンに近づいた。

皿の覆いがとられると、中から出てきたのは、焼きたてのステーキと卵だった。それは、ハーデーズ(※)で一番高いメニューと、同等の量と質といったところだ。かたわらには、バラの一輪ざしまで置かれていた。

(※訳注 ‘Hardee’s’ アメリカのファミリーレストランチェーン)

僕がオレンジジュースを3分の1ほど注いだところで、ニッキが、後ろから僕の肩に手をかけてきた。

「すべて、私のせいね」

昨日のことを、ひとことで言ったのだろう。

ゆうべだったら、僕はそれに同調して文句を言い、彼女の手を払いのけて

いたかもしれない。

でも今日は、そのまま座っていた。裸の肩をやさしくなでるすべすべの彼女の手は、心地よかった。

「アンドリュー……本当に、ごめんなさい」

僕は、彼女を振り向きながら答えた。「ニッキ、べつに、あなたが悪いってわけじゃないだろ。本当に悪いやつは、他にいるんだし」

そこでニッキは、僕の肩を揉むようにした。

「でも、私だって、あなたをだましたわけだし。あの時は、あなたが、式に出るのを恐がってるんだと思ったから」

「だました」は言い過ぎだろうと思い、僕は笑いながら言った。

「それは、自分を責めすぎだと思うよ」と、彼女は、僕の肩から手を離し、

ブロンドのロングヘアを掻き上げるようにした。

「で、あなたの方は、答えは出た？」
「デュークの奥さんになれ……って？」
「アンドリュー」

彼女は、フルーツの中から、オレンジを一房とると、それを口に含んだ。

「あなたが、どう思ってるのかは、わかってるわ。でも、聞いて。あなたは、けっして満足とは言えない生活をしてるんでしょ。もっといい暮らしをしたいって、思わない？ たとえば、自分の家を持つとか。それも、大邸宅。叶わないことだって思いながら、いつもそんな夢を見てたんじゃないの？ それとも、誰かすてきな人と幸せな毎日を送るとか？」

「つまり、デュークの奥さんとして？」

「ちがうわよ。そんなこと言ってるんじゃないの。私が言いたいのは、1年

後の話。あなたが百万ドルを手にしたあとのこと。これまでのあなたには、手に入らなかった充実した生活。それが、自分のものになるのよ」

彼女は、今度は僕の頬に手を添えた。頬をなでる年上の女性の優しい感触……べつに、彼女にそんなことを期待していたわけではないのに、当然の結果として、僕の体の一部が反応した。

僕はあわてて、身を引いた。

と、ニッキがつづけた。

「百万ドルあれば、あなたは自分の家を持てる。なにかの商売だってはじめられる。教育だって受けられる。ほしいものはたいてい手に入るわ」

「ああ、1年間、ドレスでの生活をいけにえにしてね」

「アンドリュー」

ニッキのグレーの瞳が、あきれたとでもいうように僕を見た。

「あなたはこれまで、生きるためなら、どんな恥ずかしいことだってしてきたんじゃないの？」

「ほっといてくれ」

「どうやって食べてきたの？」

「食べる金くらいあったさ。なけりゃあ、教会の慈善鍋だって……」

「ゴミ箱をあさったことだって、あるんでしょ？」

僕は思わずうなだれていた。多くはないが、何回かはそんな覚えがあるからだ。

「服はどこで手に入れるの？ やっぱり、教会？ ベッドで寝られてる？ それとも路地？」

立ち上がった僕は、逃げるように歩きながら言っていた。

「ああ、そうさ。僕は怠け者だ。あんたは立派だよ。僕は、生きる価値のない、誰の役にも立たない、薄汚れた、

怠け者さ」

ニッキは、そんな僕の後を追ってきた。

「そんなことを言いたかったんじゃないの。これからの1年間だって、これまでのあなたの暮らしにくらべれば捨てたもんじゃないわ。毎日、栄養のあるおいしくて高価な食事ができる。最高の娯楽や高級リゾートだって楽しめる。世界中の有名人たちにも会える。1年間、そんなすてきな休暇が過ごせるのよ」

「休暇？ でも、そこで着るのは……」

「最高級ブランド、最新流行の……」

「ワンピースやスカート……ってか？」

「じゃあ、すり切れたボロの方がましだっていうの？」

「そりゃあ……」

「そりゃあ……なに？ いい？ これからの1年間、あなたに約束されてる

のは、超セレブな生活なのよ。どこへ行っても手厚くもてなされて、お金の心配なく面白い経験がたくさんできる。あなたがこれまで耐えてきたことにくらべれば、ほんのちよつとがまんするだけでしょ。それで、楽しい毎日が送れるのよ」

「たぶん、あんたなら楽しめるだろうね。あんたなら、まちがいなくすてきな奥さんになれるだろうから」

その言葉に、ニッキは一瞬動きを止め、顔を赤らめた。

「え、ええ、きっと、いつかは……。だけど、アンドリュー。試してみるだけの価値はあると思うの。ねえ、こういうのはどう？ デュークとアンドレアは、マイアミで、あるパーティに招待されてるの。とりあえず一晩だけ、やれそうかどうか、試してみるのよ」

僕は、即座にノーと言おうと思った。

でも、そこでためらった。

なにをどう考えたらいいいのか、正直、自分の気持ちも揺れていた。返事を少しでも先のぼしできるなら、それもいいかもしれないと思った。

「だけど、パーティで、ぼれずにすむなんて、とても思えないよ」

「昨日のパーティは、うまくやってたじゃない」

「あれは……。そう、昨日は、他の人とほとんど話してないからさ。ふつうのパーティじゃ、そうはいかないだろ。女として、他の人とおしゃべりするなんて、どう考えてもできるわけがない」

「私が教えるわ。上品でおしゃれな女性に見せるには、どうしたらいいかをね。一度やってみて、どうしても無理だと思うなら、やめればいい」

そこで僕は、もう一度席に着き、卵料理をつついた。

「ねえ、ニッキ。あんた……あなたは、どうして、そんなに熱心に勧めるわけ？」

ニッキは、ちょっとの間考えていたが、やがて言った。

「そうね、私は、ずいぶん長い間、デュークのために働いてきたわ。仕事はもちろんだけど、それ以外でも、ずいぶんよくしてもらってるの。大金持ちだとかいう偏見を捨てて、人間としての彼を見れば、あなたもきっと好きになるわ。彼は、私を混乱から救ってくれて、私らしい生き方をできるようにしてくれたのよ。だから、私は、彼に借りがあるの」

「あなたは、僕にも、借りがあるよね」

ニッキは、また僕の肩に手をかけた。

「ええ、だから、もしあなたがそのつもりなら、つきっきりで世話するつもりよ。あなたが傷ついたりしないよう

に、できるかぎり守るわ。ゆっくり食べて。その間に、あなたに似合いそうなドレスを、いろいろ見つくりってくるから。1時間で戻るわ」

僕が反論しようとしたときには、彼女はもう、ドアの外に出ていた。

言葉どおり、1時間後、ドアがノックされた。

入ってきたニッキは、大きなハンガーラックを引きずっていた。衣装袋に入った衣類が、ずらりと吊されている。「そんなにたくさん、着てみなきゃだめなのか？」

僕は、口をとがらせながら言った。

ニッキは、大きく息をはくようにして、ベッドに腰を下ろした。

「あなたが実際以上に女っぽく見える

服を探さなきゃいけないのよ。あるものはあなたの魅力を最大限に引き出すでしょうし、あるものはあなたの弱点を隠してくれる。そんなのを選んできたわ。その中から、いちばんいいものを見つけましょ」

僕は、ため息をついた。

「わかったよ。で、どうすればいい？」

「着ているものを脱いで、これを着てきて」

そう言って彼女が差し出したのは、無地のコットンパンティだった。

でも、それを受け取って、僕は、もじもじしながら言った。

「ニッキ、こんなに生地が小さいと…その…はみだしちゃうよ」

「それほどなのは、持ってない気がするけど……。でも、もし気になるなら、そのパンティの下に、あなたの妹おすすめのゴム下着を使ってみたら」

バスルームに入った僕は、例のセックス隠蔽装置と戦い、なんとかその中にことを収めた。それはやはり苦しいものだったが、そのパーティとやらのためにも、慣れておいた方がいいと思ったのだ。

「……ふむ」

バスルームから出てきた僕を、品定めするという視線で、ニッキは見てきた。

「へえ、アンドリュー、あなたってやせっぽちね。あっ、やせっぽちっていうより、すらっとしてるって言った方がいいわね。でも、どうやったらそんなにシェープアップできるの？」

「栄養失調」

僕が言うと、ニッキは、ちょっと目を泳がせた。

「ごめん。失礼なこと、きいちゃったわね」

「気にしなくていいよ。ほんとのこと
なんだから」

「ま、まあ、理由はなんであれ、あなた
が最適な体つきをしてることはたしか
よ。その上、毛深くないしね。じゃあ、
ちょっと座って楽にしててくれる？
服を着る前に、やっときたいこと
があるから」

それから30分ほど、ニッキは、まる
で生まれたての赤ん坊の世話でもする
ように、僕の体のあちこちをケアした。

最初は、発毛抑制剤とやらを腋の下
と顔に塗った。

「これは、何日間か効果が持続するの。
ひげの影とかも目立たないわ」

次に、彼女は、毛抜きを持ち、眉毛
を抜きはじめた。もちろん、僕は抗議
したのだが、ニッキは、たとえマイア
ミ1回だけで終わるにしても、船を下
りた僕には、眉毛が元どおり生えそろ

うのを待つ時間は、じゅうぶんにあるだろうと主張した。

その作業が終わると、僕の目の上には、繊細な感じのふたつのアーチができあがっていた。

「アンドリュー、私は今夜、あなたをエレガントで女らしく見せるために、できるかぎりのことをするつもりよ。もちろんあなたが、そんな言葉は聞きたくないと思ってるのはわかってるわ。それに、男どうしでカップルを演るなんて気味が悪いと感じるのもわかるわ。でも、それは、デュークもおんなじよ。今夜のところは、とりあえず、男としてのプライドを呑み込んであなたにも努力してほしいの。すべてがうまくいった時には、こんなこと自体、なかったことになるわけだしね」

ニッキは、そう言いながら、身長やバスト、ウエスト、ヒップ、腕の丈な

どを測っていった。

「ここにあるドレスは、ほとんど私のものなの」

ニッキは、そうつぶけた。

「ふたりとも金髪だし、色目は合うと思うのね。あなたは私より背が高くてほっそりしてるから、多少、寸法直しが必要なものもあるでしょうけど。さあ、じゃあ、始めましょうか。まず、こんなかわいくてすてきなものは、どう？」

その「かわいくてすてきなもの」は、ノースリーブでバックレス、つまりホルターネックの黒のパーティドレスだった。

「こんなの、ぜったい無理だよ」

僕はあとずさりした。

「勇気を出して。ものは試しよ。さあ、脚を通してみて」

「裾がこんなに短いなんて……太腿が

半分くらいまで出ちゃうよ」

「脚の形もいいし、すごくかわいいわよ」

「かわいいなんて、言われたくないよ」

と、ニッキは笑いながら言った。

「それはわかってるって、さっき言ったでしょ」

「いや、まあ……わかったよ」

ニッキは、クリーム状のものが入った小さな容器を手早くかきまわしていた。

「前をかぶせる前に、これを塗らせて」

彼女は、それを、僕のふたつの乳首のまわりにのぼしながら塗っていった。

僕は、それがくすぐったくて笑ってしまった。

「ふふ……なに、これ？」

「まあ、セメントみたいなものね。心配しないで、アルコールでとれるから」

「なにをくっつけようとしてるのか、
だいたいわかるけど……」

僕の言葉にニッキは笑い返し、2つ
のラバーフォームを取り出した。

「さあ、これであなたは、Cカップの
女の子よ」

そのフォームを僕の胸の前に掲げ、
慎重に位置を決めると、彼女はそれを
押しつけた。

「ほんとに、こんなのでごまかせるの
か？」

僕は、ちょっと信じられない思いで
きいた。

「だいじょぶよ。この接着剤は強力だ
から、アルコールなしではがそうとす
ると、この子たちより先に、実際の皮
膚がはがれるわ。さあ、それを結びま
しょ」

彼女は、そう言って、ドレスの前の
部分を胸を覆うように持ち上げ、ふた

つの端を首の後ろで結んだ。

やわらかな布につつまれたふたつの胸のふくらみは、女らしいカーブを描き出していた。一方、まったくむき出しの腕や肩、背中は、ドレスの黒い生地映え、白く見えた。

ニッキは、中古車を値踏みでもするように僕の全身を点検した。

「うーん……やっぱりだめね。これはうまく着こなせないわ (can't pull it off)」

「ん？ それは今聞いただろ。はがせない (can't pull it off) って」

「そうじゃないわよ。あなたにはやっぱり、パッド入りのガードルが必要だなと思って。でも、ドレスの背中がこれだけ開いてると、見えちゃうでしょ」

「神様、感謝します」

僕は、救われた思いで言った。

「願わくば、もっと肌の露出の少ない

服を！」

と、ニッキは、指を立てて横に振ってみせた。

「それはちがうわよ、お嬢さん。あなたの腕や肩は、ほんとにきれいよ。きれいなものは見せなきゃソンでしょ」

僕は、ちょっと腹が立ってきた。

「ニッキ、そんな言い方、面白くもなるともないよ」

「だからあ、私はべつに、面白さなんて求めてないの。あなたのことを女らしく見せようとしてるだけ。きれいって言われることに怯えないで、もっと慣れなさい。だって、あなたは、本当にきれいなんだもん」

その服を脱いでいる間、僕はずっと黙り込んでいた。

ニッキは、次の服を選ぶのに夢中になっていた。

「あっ、そうだ！ これなら完璧ね」

リムジンのエアコンでも、マイアミの夜の蒸し暑さはシャットアウトできないようだ。

ミネラルウォーターのボトルをとってひと口ふくんだ僕は、汗をかくのはまずいと思い、それだけでやめた。

隣に座ったニッキは、先刻から携帯電話で話している。

グレーのスカートに白いブラウスという保守的なスタイルなのに、美人であることが、それをかえってセクシーに見せてしまう。長いブロンドの髪はポニーテールに結われ、べっ甲フレームのめがねをかけている。

フロントシートとの間にはセキユリティーパーテーションが設けられていた。デュークは、僕を避け、わざわざ

そちらに座っているようだ。

昨日の夜以来、僕は彼と顔を合わせていない。フロリダに着き、先刻、上陸した時にはちらりと見かけたのだが、すぐにリムジンに乗ってしまった。

今、僕は、社交界へのデビューを果そうとしていた。

いちおう、覚悟はできているつもりだったが、会場が近づくにつれ、動悸と不安が募っていく。

「……じゃあ、また。なにかあったら電話して」

携帯電話を切ったニッキが、そんな僕を見て言った。

「アンディ、もっとリラックスして。そんなに変なところに行くわけじゃないんだし」

「そんなに変……じゃない？ ……うん、僕のこと」

ニッキが選んでくれた僕の服は、体

にぴったりしたドレスだった。肩から膝上までをカバーしているが、そこから出た腕と脚は、人の目を引きそうだ。誰も、ガードルとコルセットとパッド入りブラが、この体型をつくり出しているとは思わないだろうが。

「だいじょうぶ。あなたは、ほんとにすてきに見えるわよ。私も、あなたくらいきれいだったら、どんなにいいかと思うわ」

「そんな……、ニッキは僕よりずっときれいだよ。今夜は、あなたが、デュークのお相手をつとめたらどうかな？

僕は、病気だって伝えといてくれればいいから」

と、ニッキは笑いながら答えた。

「私は、デュークより15歳も年上よ」

「だけど、僕より、ずっときれいだし……」

ニッキは、僕の腿のあたりを軽くト

ントンと叩いた。

「ねえ、アンディ、あなたが気が進まないのはわかってるわ。でも、だいじょうぶだから。きつとうまくいくわよ。いい？ 恥ずかしいとかみじめだとかいう気持ちを捨てるの。そうすれば、あなただって、きっと楽しめるはずよ」

僕は、それでも落ち着かず、目を泳がしていた。

と、そこで、インターフォンから、お抱え運転手の声がした。

「間もなく、到着します、奥様」

僕は、スモークガラスを通して窓外を見た。

そのパーティは、あるカントリークラブ(※)で開かれることになっていた。きつと、金持ちの男が、もう一人の金持ちの馬鹿に向かってお世辞を言っているようなところだ。

(※訳注 日本でカントリークラブといえばゴ

ルフ場ということになるが、本来は、郊外の会員制スポーツクラブ ゴルフコース以外にも、アウトドアスポーツの施設をさまざまに備えている 立派なクラブハウスは、セレブの社交場という色彩が強く、パーティなども頻繁に開かれる)

僕は以前、似たようなところで皿洗いとして働いていたことがある。こんな場所であんな仕事をやるのは二度とごめんだが、こんな場所で新婚ほやほやの新妻をやるのは、もっと気が滅入る。

車は、ロータリーをまわり、巨大な建物の玄関ポーチへと横づけされた。

すぐさま、若い白服が駆け寄り、ドアを開けた。彼は慎重にニッキの手をとり、車から降りるのを手伝った。次には、うやうやしく僕を出迎えるつもりだったのだろうが、僕はそんな彼を無視し、反対側のドアからさっさと降

りてしまった。

フロリダのむっとする夜気の中、走り去るリズムジンを見送っていると、すかさずデュークが横に並び、僕の前に腕を差し出した。

「こうするべきだろ？」

彼は、まるで友人の妻をエスコートするとでもいうようによそよそしかった。いや、まあ、男をエスコートしているわけだから……。

もちろん僕も、男の腕につかまって歩くなんて気が進まなかった。ただ一方で、ニッキに強引に履かされたハイヒールにも慣れていなかった。足取りのおぼつかない僕は、「夫」の体にもたれかかるようにして、その大きな両開きのドアを入った。

ニッキは、そんな僕らのあとを、ぴったりとついてきていた。

前にカントリークラブの雑用係をやっていた時、僕は、厨房だとか従業員入口だとかの限られたエリアにしか立ち入りを許されなかった。だから、実際の中身を知っているわけではない。

場の雰囲気には負けないで平然としていようと決意していたにもかかわらず、一步入ったとたん、僕は息をのんだ。

ダンスホールは、航空機の格納庫より大きかった（いや、それも見たことないけど……）。

片側の壁に沿ってバイキングテーブルが連なり、あらゆる種類の料理がずらりと、でも上品に盛られて並んでいた。その端では、バーテンダー姿の男が、シャンパンのサービスをしている。

ステージでは、ピアノ奏者とハープ奏者が、優雅な仕草とともに場の雰囲気を盛り立てていた。

すべての男たちは、デュークと同じ白いタキシード姿だ。

女たちは、僕にはただ「高価なドレス」としか表現しようのないさまざまなデザインのドレスをまとっていた。

どこを見ても醜い人などいない。いったい、総額どれくらいの整形料金が支払われたのだろうか？

僕は突然、表に出て、深呼吸したいような気分になった。

いや、女装していることに怯えたのではない。ニッキーが、すてきな女性に見えるると何度も言ってくれたから、多少、その気にもなっている。

でも、上流階級としての身の処し方なんてなにも知らない。

ニッキーは、どうしたら女らしく見えるかは教えてくれたが、どうやったら金持ちらしく見えるかは教えてくれなかった！

まあ、幸い、彼女はずっとそばにいてくれるようだから、いざとなったら、金持ち集団の中から救い出してくれるだろう。

中に入って間もなく、50年配の魅力的なカップルが歩み寄ってきた。

「やあ、デューク、久しぶりだね。うまく君を見つけられてよかったよ」

男性の方がうれしそうに言った。グレーの髪、しまった体躯、ほほ笑みを絶やさないう表情、修理が行き届いているらしく白い歯も完璧だ。

デュークはすぐに、彼の手をとり握手した。

「会えてうれしいです、スティーブ。それに、ジェシカも。ニッキーはもうご存じですよ。じゃあ、僕の妻を紹介させてください。アンドレア・グレイソンです。アンドレア、こちらは、マ

ルドゥーンご夫妻。ミスター・スティーブとミセス・ジェシカだ。昔から、家族ぐるみのおつきあいなんだ」

「すてき……ですわ」

テレビドラマならいざ知らず、現実に生きている人間がこんな言葉を使うのかと思いつながらも、つぶやいてみた。

スティーブは、いかにも紳士という感じで僕の手をとり、その甲に唇を寄せた。でも、実際には触れるか触れないかという程度にとどめ、僕を安心させた。

ジェシカは、片頬を僕の頬に寄せ、そこで軽くキスの音を立てた。

僕は、彼女のことをちょっと意地悪く観察していた。彼女が50代であることはまちがいないだろう。でも、形よく張った胸や、しわのない肌や、漆黒の髪は、あたかも30代であるかのように主張している。

お金さえあれば、美しさだって買えるのだ。

「ねえ、デューク」

そのジェシカが言った。

「ついに、あなたのミステリアスな奥様にお会いできたのね。うれしいわ。お噂だけは、いろいろお聞きしてたのよ」

と、そこで、スティーブが、デュークの背中を軽く叩き、耳打ちするように言った。

「デューク、おそらく君にも興味がありそうな投資情報を手に入れたんだ。よかったら、バーで話さないか」

僕はそれを止めたかったのだが、ニッキが横から口をはさんだ。

「よろしいんじゃないかしら。アンドレアのお披露目は、ジェシカと私でひきうけますから」

それにうなずいたデュークが僕の頬

にキスしてきたので、僕は顔をしかめないよう努力した。

スティーブとデュークは、二人でどこかに歩き去った。

すると、ジェシカはさっそく僕の手をとり、女性たちが集まっている場所へと引っ張っていった。

そこにいた女性のほとんどは、ジェシカより若い20代か30代という感じだった。

ちょうどそのグループの輪に加わろうとした時、ボーイが一人近づいてきて、ニッキになにか耳打ちした。

それにうなずきながらも、彼女は眉をひそめた。

「ねえ、アンドレア、緊急の電話が入ってるらしいの。どうしても、出ないとまずいみたい」

「折り返しを頼めないの？」

僕は、必死で止めようとした。

「ごめんなさい。すぐ戻るから」

と、ジェシカが、僕の手を引いた。

「なに、びくびくしてるの？ 子供じゃないんだから。みなさんへのご紹介くらい、私にまかせて」

彼女は、その若い女性たちの輪の中に、僕を押し出すようにした。

「みなさん」

ジェシカは、めんどりじみた声で呼びかけた。

「お会いしたかったですよ。アンドレアよ。デュークの新婚ほやほやの奥様。アンドレア、彼女は……」

ジェシカはそこで、1 ダースにおよぶ女性たちの名を、次々に並べ立てた。ブリタニー、マーゴット、セシリア……。

僕はただ「こんばんは」を繰り返していた。

その紹介が終わると、彼女たちは、

僕がなにか言うのを期待するまなざしで、注目してきた。

僕は、その視線に動揺し、ただおろおろした。

お天気についてのコメントすら思いつけず、立ちつくしていた。

ついには、ジェシカが助け船を出すともいうように声をかけてきた。

「ねえ、アンドレア、パームスへ来るのは、これが初めてなの？」

……ん？ パームス？

「あ、あの……」

ジェシカは、寛大な微笑を浮かべ、言い直した。

「パームスよ、アンドレア。これまで、ここへ来たことはないの？」

……ああ、このカントリークラブの名前か。

「え、ええ、初めてです……わ」

そう、僕にとっては、すべてが初め

てだ。ハイヒールを履いて、女性たちに囲まれて、女言葉で……。

ジェシカはさらに、どこか媚びるような笑顔できいてきた。

「へえ、そうなの。じゃあ、マイアミも初めて？」

「あっ、いえ」

言うてから、しまったと思った。

デュークの新妻が、この街の港で、貨物船の荷役作業をやっていたなんて、まさか言えないだろう。

「ほんとに？」

彼女の微笑に、まるで僕がウソをついているとでも言うような疑いのまなざしが混じった。

「じゃあ、こちらにいらした時は、いつもどこに泊まってらっしゃるの？私は、リッツがお気に入りなんだけど」

「ぼ……あ……あたしは、いつも、お友だちの家に……」

ジェシカには、僕がどれだけ居心地が悪いか、わかっているんだろうか？

これじゃあ、まるで拷問じゃないか。ジェシカはうなずいた。

気のせいかも知れないが、その時、彼女は、メンバーの誰かにウインクしたように見えた。

「他には、どんなところに旅行なされたの？ パリは行かれた？ ギリシャは？ そうそう、コートニー(※)に行くなら1年のうちでも今がいちばんいい季節だって、さっきまでお話ししてたのよ」

(※訳注 ‘Courtney’ カナダ バンクーバー島の避暑地)

今やはっきりしたのは、このプラチナブロンドが、会話の機微を楽しむ気などさらさらないということだ。

「あ、あたしは、そんなにいろんなところには、行ってないです」

僕は、ぼそぼそと言った。

「そうなの？　きっとあなたは、これまで、私たちの知らないような面白い経験をたくさんなされたんだと思うけど。デュークは、あなたのことを、あんまり教えてくれなかったのよ。だから、ぜひ知りたいわ。あなたの学歴とか、あなたの家柄とか、それから、あなたの……なんというか……職歴？」

女性たちの何人かが、くすくすと笑った。

僕は、あきらかに標的になっていた。

彼女たちは、アンドレア自身になど興味はないのだ。

興味があるのは、アンドレアに恥をかかせること……。

デュークの初々しい……ゴミ花嫁。かわいい……あばずれ売春婦。

「ねえ、アンドレア」

ジェシカはさらにきいてきた。

「あなたのお年だと、大学へ行かれてるんでしょ。ハネムーンの間は、休学なさるの？ で、どこの大学？」

僕は、赤ん坊の頃から一度もしなかったことを、初めてしたくなった。

泣きたくなったのだ。

施設では誰も泣かなかった。泣いてもしかたないからだ。

それは、街でも同じだった。

それなのに、にせ物のおっぱいと女物の服を身につけ、ここに立っている僕は、大声で泣きたくなっていた。

この人たちは、僕を落とし込めることしか考えていない。

なのに、僕には、それを止めることさえできない。

目の中に、涙がたまり始めていた。

「あたし、学校なんて、行ってません」

僕は目を泳がせ、ニッキの姿を探した。でもまだ、彼女は戻ってきそうに

なかった。

と、ジェシカは、小首をかしげてみせた。

「あら、ダーリン。ご気分でもお悪いの？ 私、なにかいけないことを言ったかしら？」

涙のダムが決壊する寸前に、すすり上げながら逃げ去る寸前に、僕の奥底にあるなにかが声を上げた。

僕は、何年もの間、路上で生き残ってきたのだ。

ナイフ1本と、バンドエイド1箱と、ブレンダー1ビンだけで、大けがを治したことだってある。

何日も食べずに過ごしたことは、一度ばかりではない。

そんな地獄のような場所でも泣かなかった僕を、泣かそうとするこのリッチな魔女は、地獄に堕ちてしかるべきだ。

僕は鼻をすすり、そして、ジェシカ
の目……その美容整形の目を見すえ
た。

「そう、平気……よ。問題なんてなに
もない……わ。聞かせてあげるわ。ぼ
……あたしの過去を、聞きたいって言
ったわよね」

ちょうどそこに通りかかったウェイ
ターのトレイから、シャンパンをひと
つとり、一気にあおって、僕はつづけ
た。

「そうよ。あたしは孤児よ。孤児とし
て生まれて、施設で育った。毎日が裏
切りの連続だったわ。12歳の時までは
そこにいた。16の時までは、里親のと
ころにやられては戻されての繰り返し
……」

僕は、僕のような環境で育った女の
子の、平均的な姿を描き出そうとして
いた。ニッコリと、不敵な笑いを浮か

べて。

ジェシカの方は、もう笑ってはいなかった。

「ええ、仕事もいろいろしたわ。ウェイトレス、事務員、店員、それに……、ふふ、借金の取り立て？」

ジェシカは笑おうとした。でも、その笑いが引きつった。

何人かの女性が、逃げるように輪を離れていった。

僕は、さらに反対尋問をつづけた。

「学校なんて、行ってないわ。高校にさえね。あたしは、あなたなんかとちがって貧乏な人間として生まれたから。でも、あなたにだって、これくらいはわかるでしょ。世界中のお金を全部集めたって、あたしを買うことなんてできないってこと。あなたのお仲間に引き入れることなんて、ぜったいにできないのよ。だけど……」

僕は、ジェシカに顔を近づけ、ささやくように言った。

「あたしは、デュークを愛してるわ。そして、どうやら、あなたはデュークのお友だちらしい。だから忠告するんだけど、そのくそったれの、中学生の女の子みたいな遊びは、いい加減にやめた方がいいわよ。だって、もうあなたは、中年の……しわくちゃの……化け物なんだから」

ジェシカは、その手を心臓のところに当て、唇をわなわなと震わせていた。そして、そんな怒りの形相のままくりと振り向くと、足早に立ち去った。何人かの女性たちが、あわててあとを追った。

そう、僕は、すべてをぶち壊した。

30分もたたないうちに、僕の初めてのお祭りは終わり、僕は、ゴミで満た

されたトレーラーの荷台に逆戻りするのだ。

僕をレディにするというデュークの計画にとって、これは回復不可能な痛手だろう。

僕は、手にした飲み物の残りをぐいと飲み干すと、この被害状況を報告すべく、ニッキの姿を探した。

「あなたって、すごいわ！」

声に見まわし、そこにまだ2人の女性……というより女の子が残っていたことに、僕は驚いた。

声をかけてきた方は、おおよそ20歳くらいの黒人の女の子。整った顔立ちが、驚くほど魅力的だ。

彼女は、ニッコリと僕を見つめていた。

「みんな、何年も、あんなふうに言ってやりたかったのよ。あのおしゃべりばあさんに。こんなに勇気ある人を差

し向けてくださった神様に、感謝したいわ」

「だけど……」

僕は困惑して、首をすくめた。

「とても品がいいとは、言えなかったわね」

「そんなことないわ。もし、あの人が、あれ以上あなたを侮辱してたら、私が……あのババアの尻の穴にヒールをぶち込んでた……あっ、ごめんなさい。フランス語なんか使ったりして。……ふふ、私、ミンディよ」

「私は、ジェイミー」

もう一人の女の子が言った。

ジェイミーは、まだティーンエイジャーのようだ。

見かけはけっして悪くないのだが、ちょっと太り気味だ。いや、デブというほどでもない。ただ、この拒食症集団の中にいると、それが目立つのだ。

「アンドレアよ」

僕は、もう一度あらためて自己紹介した。

「ねえ、アンドレア」

ミンディが、手をかけたヒップをまわし、まるで僕を誘惑するとでもいうように言った。

「外に出て、飲み直すなんてのは、どうだい？」

僕は、会場内を見まわした。

ダンスの時間が始まり、カップルがフロアに出てきていた。

「いいわね。連れてって」

30分後、僕ら3人は、カントリークラブの誰もいないプールのへりに腰かけ、足先を水に浸していた。

会場から盗んできたワインのボトル

をまわし飲みしながら、それぞれのライフストーリーを語り合った。

ミンディとジェイミーは、僕の間を開かせ、感銘を与えさせた。

彼女たちが、名門の家柄に生まれたことはまちがいない。

でも、彼女たちは、ボランティア活動に進んで参加し、労働者階級の息子たちとデートし、ベガスまでヒッチハイク旅行さえしていた。

たぶんそれは、彼女たち自身が、自分の所属する「上流社会」に違和感を感じているからだ。

ミンディは、美人だが黒人だ。ジェイミーは、「美しい人々」から仲間はずれにされているにちがいない。

「みんなからどう見られているかは、よくわかってるわ」

僕は、ほろ酔いを多少通り越していた。

「あたし自身だって、結婚式からずっと、ウソの生活をしてるって気がしてるんだもん。本当のあたしじゃない誰かを演じてるような」

と、ミンディが、僕の肩に触れてきた。

「そんなふうに思っちゃダメよ。あなたはデュークを愛してる。それがすべてでしょ。その気持ちさえしっかり持っていれば、他のことはいくらだってごまかせるわよ」

「そうね、デュークを……」

「デュークと結婚できたなんて、ほんとに幸せだと思うわ」

ジェイミーが言った。

「最高の男性だもの。彼みたいにすてきな人なんて、他には、どこを探したっていないもの……」

ジェイミーは、プールの水を見つめていた。

その顔が、どこか悲しげに見えた。

どうやら、彼女の初恋が成就しなかったのは、たしかなようだ。

「あなたたち、何してるの？」

振り向くと、ほっそりしたドレス姿の中年女性が立っていた。

「かわいい女の子たちが3人も、こんなところで話してる場合じゃないでしょ。ダンスは始まっているのよ。さあ……」

その言葉に笑い返し、僕の新しい友人たちは立ち上がった。

「あたしも、行かなきゃだめかな？」

僕は、ミンディにささやいた。

「気が進まないのはわかるわ。でも、彼のためにも、そうした方がいいと思う」

つかの間の休息はここまで。

僕はふたたび、ライオンの檻へと向かった。

ホールに戻ると、たくさんの人が、ダンスフロアをぐるぐる回っていた。

と、すかさず、青い軍服姿のハンサムな男がミンディに近づき、その手をとった。

それを見たジェイミは、悲しげなほほ笑みとともに、料理の並ぶ壁の近くに歩いていった。

「踊っていただけますか？」

振り向くと、デュークだった。そして、その手が伸びてきた。

「ダンスなんて無理です。それも、この靴でなんて……」

「僕がリードするよ。なんとかなるさ」

デュークは、僕の手をとり、もう一方の手を僕のウエストにまわした。

彼に引き寄せられた時、僕は、動揺

していた気持ちがすっと落ち着いていくような気がした。

男に対してとは思えないやさしさで、彼は僕を、フロアーの中へと導いた。

1-2-3、ターン、1-2-3、ターン……。

「アンドレア」

ちよっとたったところで、デュークがささやいた。

「君がジェシカになにを言ったか、聞いたよ」

2週間前なら、僕は、大笑いしながら、気取った女をからかってやったことを自慢していただろう。でも、今は、デュークの胸に向かい首をうなだれた。

「ごめんなさい、デューク。彼女にひどいことを言ってしまって……」

「謝らなくたっていいさ。僕もずっと、

同じことを言う機会をうかがってたんだ。じつは、みんなそうさ。ところがみんな、あの女王蜂に飼い慣らされて、フンの世話までさせられてた。部外者の力を借りなきやならなかったのは、ほんとに情けないよ」

僕は、やっと顔を上げ、笑いかけた。

「ほんとに？」

するとデュークは、そばに聞き耳を立てている人がいないか確かめてから、耳打ちしてきた。

「君が、これほどうまくやれるとは思わなかったよ」

「んなことないよ。さっきから、ちんちんかゆくて、死にそうさ」

その言葉に、デュークは、かすかに身を引いた。

「ふふ、ごめんなさい、デューク。でも、あなたは、なにを期待してるわけ？

ホームレスの男から上品な奥様をつ

くろうって？ まるで、できの悪い映画じゃない」

「いや、映画賞ものだよ。みんな、君に感心してる」

「そんなこと、あるわけないでしょ」

「いや、ほんとさ。僕も驚いてる。なんせ……、彼らが君のこと、なんて言ったと思う？ 『色っほい奥様』だつてさ」

「デューク、もし1カ月前に、僕を『色っほい』なんて言っていたら、きっと、鼻を骨折してたよ」

「それはつまり、今は、まんざらでもないってこと？」

僕はそれに黙り込み、しばらく、なにも言わずに踊った。

「デューク」

数分たったところで、僕はささやいた。

「よかったら、お願いをきいてくれる？」

「なに？」

「次の曲は、ジェイミーを誘ってあげて」

踊りながら見たのだが、ジェイミーは壁にもたれ、さみしげにバイキングテーブルのサンドイッチをつまんでいた。

「でも、なぜ？」

「ずっと相手がいなみたいだから。このまま今夜が終わってしまうなんて、ちょっと悲しすぎるでしょ」

デュークはどこか不満げな顔をした。

「そりゃ、彼女もすごくすてきな女性さ。でも……」

僕はそこで、わざと、彼の足をヒールで踏んづけた。

「太りすぎ……って？ デューク、彼

女だって、女の子……よ。そうしてあげて」

と、彼は、リードの歩調を大股にして僕を振りまわしながら、一人でいた男に近づいた。そして、どうやら大学の先輩らしいその男に、僕を託した。

その男に手をとられながら、僕は思わず舌打ちしていた。

デュークがジェイミーと踊っている間に、足を休めようと思っていたからだ。

僕の新しいパートナーはジェントルマンらしく、僕の体との間に一定の距離を保っていた。ただ、ジェシカほどひどくはないものの、僕の経歴に関心が隠せないようで、踊っているうちにあれこれきかれた。

それに答えながら、僕は、今後、しゃべることに矛盾が起きないように、「アンドレア」の履歴書のようなものをつ

くる必要があると感じていた。

ダンスフロアの反対側では、踊っているデュークとジェイミーのところに、男が一人近づき、替わってくれと申し出ていた。ジェイミーは、その男にうれしそうに笑いかけていた。

さらに見ていると、数分後には、もっと若い男が割って入った。

どうやら、今夜はもう、ジェイミーが席に着くことはなさそうだ。

僕自身も、次のパートナーに手渡されていた。トッドという名のこの若者は、自分がやっているボート競技のこと（それが別のものだとしても、たぶん、こいつはこうだ）ばかりを自慢げに語り、僕は退屈した。

気がつくやうに、すぐ近くで、ニッキも踊っていた。

曲が終わったところで、彼女は僕の手をとり、女性用トイレへと連れ込ん

だ。

男性より女性の方がきれい好きなのか、それとも、貧乏人より金持ちの方がきれい好きなのか、それはよくわからないが、とにかくそこは、これまで僕が入ったうちで最も清潔なトイレだった。

二人とも室内をきょろきょろと見まわし、誰もいないことを確認してから、口を開いた。

「それで、うまくいってる？」

ニッキがきいた。

「まあね。見捨ててくれて、どうもありがとう」

「ちょっと待ってよ。私は電話を2分で切り上げて、急いで戻ったわ。そしたら、あなたの方がいなくなってたんじゃない」

彼女はバッグからコンパクトを取り

出すと、僕の顔のメイク直しを始めた。

「で、気がついたら、あなたはホール中の話題の的になってたわ」

「イジメの首謀者だって？」

「みんなの評価はちがったわよ。美人で、しかも勇敢……って」

「デュークの言ってた『色っぽい』よりは、ましかな」

「アンドレア……」

「アンディ！」

「アンディ、あなた、本当にうまくやってるわ。もう少し練習すれば……」

「ストップ！ ニッキ、それ以上言うのはやめて。無理強いしてくれば、あたしは……僕は、おりるよ」

彼女はうなずき、僕のメイク直しを終えた。

「アンディ、アンディ、起きて。着いたわよ」

目を覚ました瞬間、僕はまた、自分がどこにいるかを見失った。

……あ、そうだ。リムジンだ。

そのリアシートで、ニッキの肩に頭を預けて寝ていたことに気づき、あわてて身を起こした。

先に降りたニッキがまわり込んでドアを開け、僕が降りるのを助けてくれた。

そこは港のドックだった。

目の前のデュークの船から、タラップが降りていた。

見まわしたが、デューク本人の姿は見あたらない。

眠い目をこすりながら船に乗り込む時、僕は、今夜の出来事を思い出していた。

ジェシカを言い負かしたこと。

ミンディやジェイミーと楽しく話したこと。

食べ物、音楽、ダンス。

3時までもつづいた、ジャンパンをすすりながらの馬鹿笑い。

……あれはいったい、誰のためにやっているんだろう？

僕は、そう思わざるを得なかった。

腐った金持ちたちが、にせ物の友情や服の高さを称え合うことが、誰かのためになっているのか？

少なくとも、それは、僕ではない。

ニッキにおやすみの挨拶をした僕は、僕の船室……例のハネムーンスイートへと戻った。

ハイヒールを脱ぎ、コルセットをとり、あのセックス隠蔽装置をはずした僕は、そのたびに神に感謝を捧げた。パッド入りのブラをはずす時は、少量

の酒の力を借りた。

バスルームで顔を洗い、やっと僕は、男に戻った。

ベッドの中にすべり込んだ時、僕は、奇妙な考えにとりつかれているのに気がついた。

今夜が、これからつづく長い日々の最初の夜だと感じていたのだ。

食事や、寝る場所や、身の安全に心をわずらわせずに過ごせる日々……。

もちろん、女の子のように行動することは気が進まなかったが……。

でも僕は、心密かに、そんな日々をすてきだと思った。

翌朝、僕は、ベッドに腰掛けてこちらを見つめるニッキの視線に気づいて目を覚ました。

僕はあわてて、毛布を引き上げ、裸の体を隠していた。

「なんで、ノックしないの？」

「だって、女どうしじゃない」

「やめてよ。まだ早いよ」

「ごめんなさい。でも、ゆうべは、本当にうまくやってたわよ」

僕は、身を起こし、ローブを羽織りながら、とりあえず礼を言った。

「ありがとう。で、その……、デュークはなんか言ってた？」

「ええ、『あれなら、耐えられる』って。状況を考えれば、それは絶賛ってことでしょ」

そこで、僕はバスルームに走って用を足し、歯を磨いた。

「で、今朝はなんの用？」

「アンドリュー、決断の時間よ」

その言葉に、僕は、つばを飲み込んでいた。

「今日じゃなきや、だめ？」

すると、ニッキもバスルームに入ってきた。

「そうよ。そんなに時間はないわ。正午に、スペインに向けて出航するの。デュークは、すぐにも答えを聞いたがってる」

「もう一度、僕の選択肢を説明してくれない？」

「ええ、簡単よ。選択1……あなたは、男物の服と多少のお金をもらい、マイアミで船を下りる。マスコミは、デュークのフィアンセが新婚旅行に同行していないことを知る。取材合戦が始まり、いくつかの事実が総合されて、あなたは、タブロイド紙の新しいスターになる——『女装の花嫁』。選択2……あなたは豪華な世界一周旅行をする。そして、百万長者になる。……悩む必要はないでしょ」

僕は、髪をとかしながら答えた。

「もし、あなたが、それを、必要以上に簡単そうに言わなきゃ、たぶん僕は、もう少しまじめに考えてるけどな」

「もし、あなたが、それを、必要以上にみじめだにとらえなければ、たぶん、答えは簡単だと思うけどな。……なにが、チャンスをつかむのをじゃましてるわけ？ 自尊心？」

「そんなもの、とうの昔にないよ。忘れたの？ 僕はホームレスなんだよ」

「ううん、ちがうわ。あなたって、私が知ってる人の中でも一番くらいに、自尊心の高い人よ。アンドリュー、イエスと言ってよ」

「やっぱり……できないよ。ごめん」

「そう……。じゃあ、新しい提案をさせて。大西洋を渡るのに、おおよそ半月くらいはかかるわ。その間、私がコーチしてトレーニングする。スペイン

に着いた時、もし、アンドレアとしての自分にまだ違和感を感じるというなら、その時は、すべて終了。アメリカへの帰りの航空券は、ちゃんと出すわ」

僕は、彼女の思惑を知りたくてきいた。

「向こうに着いたとたんに僕がいなくなっちゃうんじゃないあ、そっちにとってはなんのメリットもないだろ。ねらいは、なに？」

「条件があるの。その半月間、あなたは、フルタイムでアンドレアとして生活する。文句は言わない。怠けない。どう？ あなたを、思いっきりかわいい女の子にしてあげるわ」

彼女の言葉には、僕を惹きつけるなにかがあった。彼女なら……と感じるなにかがあった。

「……わかった。その大西洋航路に乗ってみるよ。でも、僕の方も条件があ

る。大きな条件が」

「なに？」

「コーチなんかじゃなく……友だちになってほしい」

「えっ？ もちろんよ。今でも友だちのつもりよ。でも、どうしてそれが大きな条件なの？」

僕は、シンクに目を落としながら言った。

「だって……、僕はこれまで、そんな人をひとりも持ったことがないんだ……」

ニッキが使った「フルタイム」という言葉は、けっして冗談ではなかった。毎朝8時。軽い朝食を持って、彼女は僕を起こしに来る。

朝食のあと、シャワーを浴び、さっ

ぱりした僕は、1・2時間、ニッキからメイクとヘアのコーチを受ける。

「ほんの少しのことが、大きなちがいをつくるのよ」

その間、彼女は、僕に語りかけつづける。

「あなたは、ただ女に見えればいいと思ってるかもしれないけど、口紅やアイラインのほんのちょっとした工夫で、あなたはパーティのクイーンにだってなれるの」

「主よ、感謝します」

僕は、不平を皮肉に込めるしかない。「そういうのもなしよ。あなたは、これから2週間と少し、女でいることに同意した。本物の女は、自分がきれいになることに文句を言ったりしないわ」

僕の髪は、多くの時間を費やすには短すぎた。でも、ニッキは、この2週

間が終わったあとのことを想定して、あれこれを語った。

メイクとヘアが終わると、ニッキは、その日、僕が着るべき衣装を選んだ。

そう、僕は今、「服」でなく「衣装」と言った。なぜなら、社交界の女性たちは、1日を1着の服で通すようなことはないからだ。くつろぐためにはくつろぐ時用の衣装がある。同じように、エキササイズ用、カクテル用、ディナー用、ダンス用……と、場面に応じて、1日何着もの衣装を着替えるのだ。

僕はこれまで、服をたくさん持つという経験がなかったので、これは気の重いことだった。でも、ニッキは、僕が、その場に合わせた衣装を自発的に選べるようになるまで、そんな僕に同情するつもりはないようだ。

次は昼食の時間だ。これも、気楽にサンドイッチをつまむというようなも

のではなかった。

ニッキは、正式なランチョンを給仕し、さまざまなテーブルマナーを伝授した。スプーンの使い方、座り方、食べ物の噛み方、会話のしかた……。

一度、僕は、これだけ正式に昼食をとるのに、どうして乗組員に給仕させないかと聞いたことがある。

「それはね、ハニー、私たちのやってることを知られないためよ。デュークと私を除いて、正確なことは誰も知らないの。もし、中に悪い人がいたら……ね、最悪なことになるでしょ」

午後は、立ち居振る舞いのレッスンに費やされた。歩き方（ヨーロッパに着くまでに、僕は外周デッキを1000回はまわったと思う。）、話し方（もともとハスキーで声質も似ているアンドレアの声を真似るのは、そんなに大変ではなかった。ニッキから女性らしい言

葉づかいを習い始めて3日目には、僕のしゃべりは女にしか聞こえなくなった。)、そしてダンス(ニッキが男役になってリードしてくれたのだが、どういふわけか、彼女はそれに熟練していた。)……。

これまで僕の習慣にはなかった1日3食の規則正しい食事が、肥満につながらないように、エキササイズ(レオタードが恥ずかしい)の時間もあつた。ただし、筋肉が発達しないように、メニューは、有酸素運動だけに限られた。

夜は、女としてのペルソナさえ維持していれば、なにをやってもよかつた。僕は、DVDを見たり、本を読んだり、海を見たりして時間を過ごした。

そんな大西洋上での暮らしが過ぎていったある日、ニッキが、なんだか興奮気味に言った。

「明日、トレントが飛んでくるんですけど」

「……誰？」

「デュークの専用ヘリコプターのパイロット」

「……あ、ああ」

その言葉に、あの結婚式の日ニッキと話していた男の姿を思い出した。

「食材とか、足りなくなっただものの補給よ。ヨーロッパに着くまでの最後の補給。もし、ほしい物があったら、いっしょに持ってきてもらうから、言って」

「たとえば？」

「なんでもいいわよ。好きな食べ物、見たい映画、着たい服……」

僕には、前々から夢想していた物があつた。

「笑わないって、約束してくれる？」

「もちろんよ、ハニー」

「あたし、教科書がほしい。高校の基礎的な……歴史とか、数学とか、化学や物理とか」

ニッキは、あえて口には出さなかったが、その顔がある質問をしていた。だから僕は、それに自分から答えた。

「あたしが施設で受けた教育は5年生までよ。もし、デュークの奥さん役をやるなら、それじゃあ足りないって気がするの。基礎的な知識だけでもつけておきたいと思って……」

「勉強したいって気持ちは、すばらしいものよ。私も、進んで手伝うわ」

そのヨーロッパ到着前の最後のコンタクトとなるヘリコプターがやってきたとき、僕はむしろ、初めて見る着陸の様子に興奮した。

降りてきたパイロットのトレントは、個人的な荷物として、僕が頼んだ

教科書を手渡してくれた。その茶色い包みの中に、それ以外に、女装者向けの本があるのに気がつき、僕は顔を赤くした。できれば、トレントが自分で買ってきたのでなければよいかと、僕は思った。

彼は本当にすてきな人で、僕はパイロットとしての彼の経験をいろいろ聞きたかったのだが、ニッキを見つめるその目を見て、遠慮しなければいけないことを悟った。

ニッキは、2通の受け取りにサインしたあと、数時間、トレントとともに姿を消した。その間、彼女がなにをしていたのかは、言わずもがなだろう。

そして、トレントは天に昇った。

航海が同じ毎日の繰り返しと感じるようになる頃には、僕は、服のことやメイクやヘアスタイリングについて、

かなり専門的なことまで身につけていた。

ニッキが手を出さなければいけないことは、次第に少なくなっていくた。

海の上での暮らしが10日を過ぎたとき、ニッキは、朝、僕の部屋に来るのをやめた。朝の身支度くらいは、もう僕ひとりでできると判断したからだ。

ただ、女の子のように見えることはそれなりにうまくできたとしても、女の子のように行動することは、また別のことだ。ニッキは、僕の進歩は著しいとほめてくれたが、僕にはまだ自信がなかった。

一方、新たに始めた歴史や数学の勉強の方は、僕は本当に面白いと感じていた。

これからもつづけて、帰国したら、大学入試検定を受けるつもりだ。それだけでなく、大学進学も、僕は本気で

考えていた。

その日、ニッキと僕は、デッキのコートでテニスをした。

僕は、ボールを3つも海に落としたが、それでも、それを楽しいと感じた。白いテニスセーターとスコートがニッキとおそろいだったことも、その理由だったかも知れない。

「それで、どうするの、アンドレア？」

ゲームが終わったところで、ニッキがきいた。

僕は、ラケットを担ぐようにして聞き返した。

「いよいよ、決断の時？」

彼女はうなずいた。

「スペインでのスケジュールは、どんなふうなの？」

「まず、地元の名士たちとのフォーマルなディナーがあって、それから、10

日ほどかけて、田舎を旅行するの」

「そのあとは？」

「次はギリシャ。ここは、レジャーよ。1ヵ月ぐらい、のんびりと島めぐり」

「スペインは、つき合ってもいいかな」

「とりあえず？ ねえ、アンドレア、話しておきたいことがあるんだけど」

「なに？」

「私ね、あなたといるのが好きよ。あなたの妹といるより、はるかにね。あなたといっしょになにかをするのが、楽しいの」

僕は、ちょっと照れ笑いしながら言った。

「あたしも」

「ねえ、上陸したら、いっしょに夜のショッピングに出かけない？」

ニッキになにか提案されたとき、これまで僕は、皮肉な答えばかりしてきたが、とてもそんな気にはならなかつ

た。

「あたし、行きたい」

その日の夜、だぶっとしたセーターとジーンズを着た僕は、デッキの手すりにもたれ、ひとりで海を見ていた。

冷静に考えてみれば、かなり気味悪い日々だった。

1ヵ月もたたないうちに、僕は、ホームレスの若者からリッチな新妻に変わってしまったのだ。

まるで、「プリティ・ウーマン」の質の悪いパロディのようだ。

「やあ」

声に振り向くと、デュークだった。

彼の顔を見るのは、1週間ぶり以上だ。

「こんばんは」

「アンドレア、元気にやってるようだね」

「ええ、まあ。あなたも」

これはウソだった。

デュークの顔は、生彩なく見えた。いつもならきれいにプレスされているはずの服も、ちょっとだらしなくしわが寄っていた。

「ニッキから聞いたよ。スペインで同行してくれるんだって？」

「ええ、デューク。あたし……」

「なに？」

「い、いえ、なにも……」

「アンドレア」

デュークが真正面から見つめてきたのは、僕が男だと知って以来、初めてのことだった。

「ありがとう。……まだ、それを言っていなかったと思って。感謝してるよ。君のおかげで救われた」

「そんな……。あたしは、お金のために……。そう、お金のため。それだけよ、

デューク」

「ああ、わかってる。でも僕は、君と僕が、こんなふうでなければよかったのにとと思うよ。お互い……」

「ええ、そうね。お互い、最善をつくすしかないってことなんだと思うわ。ニッキが言ってたように」

と、デュークが、僕の頬に手を触れた。僕は、キスされるのではないかと感じ、それを恐れた。

でも、彼は、ただ僕を見ていた。

「君は本当に……、妹にそっくりだ」

そして、きびすを返し、立ち去った。

2週間後。

僕は、ギリシャの、ある島のプライベートビーチで日光浴していた。

地中海の太陽は、僕の体をブロンズ

色に変え、肩のそばかすの数を増やしていた。この2時間で僕がしたことといたら、体の両面を均等に焼くための寝返りだけだ。

僕のシックなワンピース水着は、僕の体の男性的特徴をうまく隠してくれていた（水着の上から、女性用のビーチパンツを履いていることも大きいが）。

それにしても、これまで生きてきて、こんなにリラックスしたことなんてなかった。

最初に上陸したスペインも、楽しみをつまった土地だった。

ジブラルタルに入港したあと、船を下りた僕らは、陸路スペインを縦断した。その間に、船に残ったメンバーがバルセロナまで航行し、そこで落ち合うという計画だ。

正直言って僕は、上陸がうれしかった。もちろんそれは、アンドレアでいつづけることを意味するわけだが、それまでの航海の単調さにうんざりしていたからだ。

スペインでの最初の晩、僕たちは、ある地方の「hidalgo」（イギリスの「lord」と同じようなものらしい）（※）の催すパーティに招かれた。

（※訳注 ともに、中世封建領主からつづく家柄の貴族）

このパーティは、例のマイアミでのパーティよりずっと神経を使わずにすんだ。英語を母国語としない人たちとなら、決まり切った紹介の挨拶や世間話以上の、ややこしい会話はしなくてすむからだ。

僕は、何人かの現地の男とダンスしたが、彼らも、フロリダの連中より、ずっと紳士的だった。

ちなみに僕は、ニッキの助言で、エスニックダンサー——才能はともかく——のようなドレスを着た。

次の1週間半は、スペインの田舎の観光を楽しんだ。

デュークは、ガイドとしても一流だった。僕らの事情に合わせ、大きな街には近づかないコースを選んでくれたからだ。

驚いたことに、それでも僕らのまわりには、つねにカメラマンの影がちらついていた。

あのウエディングのあと、もし船から逃げていたなら、僕はまちがいなく、2日でマスコミの餌食になっていただろう。

このスペイン旅行中、デュークと僕の間で、予想外のことが起こっていた。

僕らは、仲のよい友だちになったのだ。

最初の頃こそ、ふたりとも、事実上の同性愛結婚という状態に警戒感を抱き、必要以上に親密にならないようにしていた。

しかし、長い時間、二人だけでいた（新婚カップルの間に割り込んでくるようなやつなんてそうはいない）ことで、僕らは話さざるを得なかった。

その結果、僕は、自分の「夫」が、本当にいいやつだと気がついたのだ。

デュークは、もちろん、親の代からの金持ちだ。でも、思ったほど親がかりではなかった。

彼の資産の大部分は、彼自身の事業から得たものだ。投資ファンドを使い、一見、投機的な金の運用で儲けているように見えるが、その元手となっているのは、彼が最初につくった会社で開発した、シンプルだけれどいまだに人

気のある何本かのコンピューターソフトなのだ。

自分の道を自分で切り開いてきた男を、僕は無条件で尊敬した。

デュークはまた、人間的魅力にも満ちた男だった。

彼は、世界中さまさまなところに旅し、冒険していた。そして、そんな話を楽しく語るのだ。

彼の物語を聞いているだけで、僕は、時間のたつのを忘れた。

一方で彼は、僕の物語については、きいてこなかった。そして、僕も、あえて語ろうとはしなかった。

誰だって、自分の「妻」が男だった頃の話など、聞きたくはないだろう。

ギリシャに着いた頃には、デュークと僕の間、よそよそしい雰囲気はいっさいなくなっていた。

もちろん、夜になれば、僕は、なご

り惜しい気持ちを抱きながらひとりの部屋に戻った。

僕たちは、ニセ夫婦だ。

そして、1年もたたないうちに、いっさいの関わりを断つのだ。

それが、最善の道なのだ。

スペイン滞在中に、もうひとつ、面白い変化が起こった。海辺の高級リゾートタウンに停泊中のことだった。

ニッキは僕を、近くにある高級デパートへ、ショッピングに連れ出した。

この時、僕はまだ、服のショッピングをさほど楽しいことだとは感じていなかった。デュークのクレジットカードが自由に使えるにもかかわらず、ニッキほど熱くなれないのだ。

そう、ニッキは、気に入った服が見つかり、興奮し、すごくうれしそうに顔をやる。それで僕は、ニッキに服

のプレゼントをすることで、ショッピングの喜びを見いだしていた。

その日、いつも同様、自分の服を買おうとしない僕を、ニッキは強い調子でいさめた。

「アンドレア、私には、あなたがどうして、そんなにかたくななのかわからないわ。あなたは、女物の服を着て暮らすしかないわけでしょ。どうせなら、自分の好きな服を選んで着たいって思わないの？」

「だって、ここには、好きなものなんてないんだもん」

僕は口をとがらせて言った。

ニッキはすでに、僕のための服を何着か選んでくれていたが、僕自身は、気に入ったスーツケースを2つ買っただけだった。

「今日は、あなたが自分の好きなものを買うまで帰らないからね」

僕は、それに文句を言おうとした。

ところがそこで、僕の目がなにかに惹きつけられた。

それは、ウインドーに飾られたマネキンだった。

そのマネキンは、スカーレットで縁取られた黒のドレスを着ていた。いかにもラテンという感じ……カスタネットを鳴らし、バラをくわえているのが似合いそうなドレスだった。

「……ん？　もしかして、気に入った？」

ニッキが、なんだかワクワクするようにきいた。

「う、うん」

思わずうなずいていた。

これまで、自分の着せられているものに対して、どんな場にはどんなものがいいという知識は蓄えてきたが、自分から進んで着ようと思ったわけでは

ない。

でも僕は、そのドレスを着たいと思った。そのドレスを自分のものにしたいと思った。

ニッキは、すかさず、そんな僕の手を引き、店員を見つけると、たどたどしいスペイン語で、試着室の場所をきいた。

その中にいっしょに入った彼女は、僕の着ている服を脱がせ、そのドレスを着るのを手伝ってくれた。

「……どう、思う？」

「ああ、アンドレア、本当にすてきよ。これに合うハイヒールとか、アクセサリとかも、買わなきゃね。それから、この服を着るなら、ピアスもあけた方が……」

「ちょ、ちょっと待ってよ。べ、べつに、そこまで気に入ってるわけじゃないし……」

と、ニッキはにらむように僕の顔を見た。

「もうッ！ 私の前で、今さらマッチョぶったってしょうがないでしょ。見え見えなんだから、もっと素直になりなさいよ」

僕は、もう一度、鏡の中の自分の姿を見つめた。

なよやかな袖、大きく開いた背中、ひらひらのスカート……。

「あたしのブロンドだと、スペイン娘には見えないかも知れないけど……、でも、悪くないわね」

ニッキも、女どうしの友人として、これ以上のお世辞は必要ないと判断したようだ。

「そうね。もう少し髪が伸びれば、アップにできるわ。きっと、その方が似合うわね」

僕はそのドレスを着、それに合わせて買ったハイヒールや、さまざまなアクセサリーを身につけて船に戻った。

そんな僕を見て、デュークはなにも言わなかったが、部屋に向かう僕の後ろ姿をずっと見つづけていたことに、僕は気づいていた。

そんなこんなで、さらに数週間後。僕は今度は、エーゲ海で日光浴していた。

デュークは、このプライベートビーチに、おしゃれな貸別荘を借りた。それは、二人で暮らすにはちょうどいいくらいの広さで、事実、僕らは、二人だけで暮らしていた（食事のデリバリーの人や、プール掃除の男性や、週2回の部屋掃除のおばさんは訪ねてきた

が)。

デュークは、自分の方が狭いゲストルームのベッドで寝ることを、いやだとは言わなかった。

ニッキは、海岸から少し離れた場所に部屋を借りていた。といっても、多くの時間を僕らとともに過ごした。

僕たち3人は、泳いだり、ビーチバレーをしたり、砂で遊んだりして、ビーチライフをめいっぱい楽しんだ。

毎日、波とたわむれているうちに、自分の肌に女性水着の日焼けあとが残ることへの抵抗感も、どんどん薄れていった。

プライベートビーチという環境は、僕の心を開放的にしたが、だからといって、この水着を脱いで、男姿に戻るといふわけにはいかないのだ。

ある晩、デュークとニッキと僕は、

遅くまで、わいわいとゲームをして遊んだ。キッチンテーブルでポップコーンをつまみながら、モノポリーをしたのだ。

ニッキの話に笑い転げている時だった。

ふいに、なにかがこみ上げてきた。

僕自身もあわて、それを抑えようとした。そう、一生懸命抑えようとしたのだ。

それなのに、僕の中から涙があふれ出し、とまらなくなっていた。

「えっ？ どうしたの、アンドレア？」

ニッキが驚いたようにきいた。

「……ごめんなさい。自分でも……よくわからないの。でも、あたし……、あたし、友だちと……。初めてできたふたりの友だちと……。こんなふうに……まるで……家族みたいに……。あたし……それも、持ったことないから……」

…」

と、ニッキも声を出して泣き出し、僕をきつく抱きしめてくれた。

一方、デュークの方は、無言で席を立ち、ドアへと向かった。

それで僕は、このあまりにも情緒的な雰囲気嫌気がさしたのだと思い、彼に申し訳ない気がした。

ところが、ドアに向かって立ち止まったデュークの背中越しに、鼻をすすり上げる音が聞こえてきた。

涙を見られるのが恥ずかしかったようだ。

僕は、この思い出を一生忘れないようにしようと思った。

真昼の太陽は、じりじりと肌を焦がしていた。これ以上ここにいたら、さすがに水ぶくれになってしまうだろう。

そう感じた僕は、別荘に戻ろうと身を起こした。

そこで、なんだか違和感を感じた。

あわてて目を落とすと、なんと、ふたつの胸のふくらみが、両方とも体の右側にあった。

水着の下には、当然、ラバーフォームを入れている。例の接着剤で固定しているのだが、この暑さのせいで、アルコールも使わないのに溶けてしまったようだ。その結果、おっぱいが片側に寄ってしまったということだ。

あわてて見まわしたが、ビーチに人影はない。

それで安心し、僕はその位置を直そうとした。

ところが、片方が、ワンピース水着のさらに奥へ……つまり、お腹の方に滑り落ちてしまった。

けっきょく僕は、肩からストラップ

をはずして水着の上半分を下ろし、いったんラバーフォームをとってから、もう一度、正しい位置に装着し直さなければならなかった。

その2日後、そんな楽しかった日々に、突然、いまわしい出来事が襲いかかった。

朝のひと泳ぎをしてきた僕が、別荘に戻ってくると、デュークとニッキが真剣な顔で新聞を見ていた。

ニッキがこんな朝早くからやって来るのは珍しいことだった。それで、なにか事件でもあったのかと思い、僕もそれをのぞき込んだ。

それは、新聞というより、タブロイド紙の類らしかった。

一面見出しのギリシャ文字は理解不

能だったが、その下の大きな写真に目を移したとたん、すべてがわかった。

僕だった。

場所は、このビーチ。

水着の上半身を下ろし、胸をさらしている。平らな……男の胸を。……世界に、向かって！

全身が凍りつき、唇がわなわなと震えた。

「そ、そ、そんな……！」

叫びに、泣き声が混じった。

「ああっ、デューク。あたし……なにも、気づかなかった」

デュークは、怒りに顔をゆがめ、首を振った。

「ここは、プライベートビーチだぞ。まさか、こんなところまで……。あのハイエナ野郎ども！」

僕は、長くなりはじめている髪を、かきむしっていた。

「いったい、どうしたら……？」

デュークが僕を見た。その表情は、まるで、一度に20歳も老けたように見えた。

「完全に、追いつめられた。おそらく、打つ手はない」

それから4時間あまり、僕は、自室でひとりで過ごした。床に直に座り、膝を抱えて……。

すべてが、破綻した。

奇妙な結婚式、パーティのためのドレス、大西洋横断、アンドレアであった日々……そのすべてが、僕のちょっとしたうかつさのために、無駄になった。ここまでの時間がすべて、意味のないものになってしまった。

いや、僕のことなんて、どうだっていい。

いちばん重大なことは、僕のせいで、

デュークの人生が台無しになったことだ。

アンドリュー・ジョーンズなんて誰も知らない。でも、デュークはちがう。その名声を、僕は傷つけてしまった。僕が、いちばん大事にしたいと思っている男を……。

ドアがノックされ、グラスをふたつ持ったニッキが入ってきた。

そして、それを僕に差し出した。

「ほしくない」

「いいから、飲みなさい。飲まなきゃ聞けない話だから」

僕は、どきりとして、聞き返した。

「そんなに、ひどいことになってるの？」

「あの写真を撮ったのは、シカゴから来たパパラッチらしいわ。通信社は、それを世界中に配信した。たぶん、記

事だけだったら、たいていの人はずち上げだと思ったでしょうね。でも、写真は、無条件に納得させてしまう・・・『デューク・グレイソンの妻は男だった！』

「……くそっ！」

「おそらく今後1週間、やつらは競って暴露記事を書き立てるでしょうね。あなたのことも、あなたの妹のことも、すべてをね。で、ここから先は、べつに真実じゃなくてもいいの。面白ければね。やつらはきっと、新たなストーリーをつくろうとするわ。これはもともと、あなたとデュークが結婚したいがために仕組んだことだった。ふたりは前から恋人だった。デュークは同性愛者のレッテルが貼られ、あなたはタブロイド紙の人気者となる……『ザ・ボーイ・ブライド！』」

涙が、頬を濡らしつづけていた。

自分の分のグラスはすでにカラになり、僕は、ニッキの分も飲み始めていた。

と、ニッキが、僕の涙をやさしく拭いてくれながら言った。

「アンドレア、それを避ける手がないわけじゃないのよ」

僕は、驚いて、ニッキを見返した。

「なに？ どういうこと？」

「みんな写真を信じるけど、じつは写真だって、でっち上げはできるわ。あの写真を、そんな偽造写真だったってことにしてしまえば、これ以上、掲載しようとするメディアは出ない。訴訟だって恐いしね」

僕は、思わず大声を上げていた。

「そうか！ もう一度、あたしの写真を撮ればいいんだ。あとは、フォトショップさえあれば……。こっちが、写真を偽造する。ね、そういうことでし

よ？」

「それはだめよ。こっちから提供する写真じゃ、誰も信用しないわ。その上、偽造がバレれば、逆効果になるだけ。あくまで、やつらに写真を撮らせなきゃいけないのよ」

「でも、それじゃあ、同じことでしょ。あたしに胸がないのがわかるだけで」

「それはそうね。でも、胸が……あれば？」

「えっ？ どういう……こと？」

突然、僕の心に、その図が浮かんだ。

「……えーっ、うそっ」

「イスラエルに、最適な外科医を見つけたわ」

「……そんな！」

「1日で、どうにかできるって」

「ちょ、ちょっと待って。ためよ……だめだよ、そんなの。あたし……僕に、これから一生、おっぱいをつけて生き

ていけっていうこと……だろ。ぜったいに、いやだ！」

「落ち着いて。最後まで聞いてよ。今日の午後には、イスラエルに向けて出航することにしたわ。向こうに着いたら、あなたは、秘密裏に病院に入院する。そしてそこで、豊胸手術を受ける。他にも、お尻へのインプラント挿入とかもすると思うわ。完全回復には時間がかかるにしても、1日で動けるようになるそうよ。術後の腫れや変色もメイクで隠せる程度らしい。翌日、あなたは、その胸がのぞく服を着て街を歩く。やつらに写真を撮らせるためにね。あとは、船で回復を待つ。ことがすべて終われば、入れたものを取り出して、もとどおりにできるって」

「ほんとに、そんなことができるのか？」

「傷はかすかにしか残らないそうよ。」

もし万が一、なにかの後遺症が残ったとしても、デュークは手厚く補償してくれるはずだしね」

僕は、思わず立ち上がっていた。

「そんな！ 金の問題じゃないだろ！

僕の人生の問題だ。男としての。わかってるのか？ 自分の体にそんなものぶら下げて生きるなんて、たとえ1週間だとしても、ぜったいにいやだ」

「1週間じゃないわよ。『ことが終われば』って言ったのは、今回のことだけじゃなく、このハネムーンが終わるまでっていう意味よ。これからだって、私たちのまわりにはカメラマンがうろつきまわる。また、同じことが起こるわ。胸の谷間は、まだ数カ月間必要なのよ」

「じよ、冗談じゃない」

「それだけじゃないわ。急いで入れたインプラントを安定させるためにも、

女性ホルモンを摂ってもらうことになる」

「えっ、ホルモン!? いったい、何考えてるんだ」

「あなたが思ってるほど、悪いものじゃないわ」

「悪いものじゃないって? 気が狂ってるとしか思えない」

「微量でいいのよ。それで、肌もやわらかくてすべすべになるし、髪もしなやかになる。ひげや体毛の伸びも抑えられるわ」

「……あれは、どうなる?」

「小さくなるでしょうね」

その言葉にぎょっとする僕の顔を見たニッキは、あわててつけ加えた。

「でも、一時的によ。摂取中は、胸とかも、もっと大きくなるでしょうけど、それも含めて永久じゃない。摂るのをやめれば、1ヵ月でほぼもとどおりに

なるはず」

「だめだ。ことわる。そんなこと、できるわけがないだろ」

「じゃあ、タブロイド紙に『女装の花嫁』とか書き立てられても平気なの？

やつら、あなたがどこに隠れても、かならず見つけ出すわよ」

「あ、ああ。本物の花嫁になるよりはね」

「本当に……それはあなたの本心？」

「ああ、決まってるだろ」

僕はこんな話を早く切り上げたくて、壁の方に向いた。

と、ニッキは、その後ろに近づき、肩に手をかけてきた。

「デュークを見捨てて、彼の前からいなくなる。……それで、平気？」

「……………」

「ハニー、気がついたかい。すべて終わったよ」

麻酔でぼやけた頭のせいで、自分が今いるはずの場所をたどるのに、時間がかかった。

テルアビブへの高速航行、いったんチェックインし深夜に抜け出したホテル、やさしそうな外科医……そんな記憶が順に戻ってきて……。

デュークは、その特別病室のベッドの脇にひざまずき、僕の顔をのぞき込んでいた。

「……いや、起きなくていいよ。すべてうまくいってるから、今はゆっくり眠って」

「……もう、すんだの？」

僕は、小声でつぶやいた。

デュークは、どこか申し訳なさそうなほほ笑みを浮かべ、毛布から顔をの

ぞかせる僕の胸を指し示した。

包帯が巻かれた僕の胸……その包帯は、ふたつの山なりの輪郭を持っていた。

僕には今、乳房があった。

その日1日を眠って過ごし、翌日、僕は外出の準備のために起き出した。つまり、僕の胸を見せびらかすために。

いっしょにやったウエストの脂肪吸引とヒップのインプラント挿入は、完全に傷が癒えるまでまだ数週が必要だということだが、もちろん、それを待っているわけにはいかない。その間に、僕の乳房の存在を、世界中に配信させる必要があるのだ。

下半身の手術跡については服が隠してくれるだろう。胸のまわりの腫れや変色については、メイクで隠せるということだった。

医者からは、朝になったら包帯をとっていいと言われていたので、僕は、鏡の前に立った。

「変なことになってなければいいけど……」

僕は、ついひとり言を言っていた。「ま、いいさ。いざとなったら、厚い服で隠せばいいんだ。大したことじゃない」

そして、外科用のはさみを手にとり、包帯を切っていた。

僕は、まちがっていた。

それは……大したものだった。

見ながら僕は、思わず首を振っていた。

おっぱい、バスト、乳房、胸、ふくらみ……！

しかも、Cカップ！

もう僕は、ブラなしではいられないだろう。

水着は、当然、ビキニだろう。

この上、ホルモンの影響が出はじめたら、僕が男である証拠は小さな生殖器だけになってしまうのだろう。

僕は、恐る恐る、そのふたつのふくらみに触れてみた。

すべすべで、やわらかく、張りもある。

両手で軽く揺ると、これまで経験のない感触で、乳房どうしがぶつかり合った。

茶色の乳首は小さくて硬かったが、指先で触れていると、立ち上がってきた。

乳房自体はまだ、つかむと痛みがあったが、その乳首の感触は、僕の体の内側からセクシーな気分を引き起こした。

と、そこで、ノックの音がしてニッキの音が聞こえた。

ちょっと迷ったが、僕はそのままで入ってくるように言った。

「……ワオ！　どんな感じ、ベイビー？」

「中東で今いちばん話題のシーメール……ってところかな」

「今日、私が見た中で、いちばんかわいい女の子……ってのはどう？」

もう一度鏡を見て、僕は肩をすくめた。

「まあ、どっちでもいい……わ」

「さあ、メイク用品と着替えを持ってきたわよ。始めてもいい？」

次の日、ゴシップ・ジャーナリズムは一斉に、僕とデュークがテルアビブの街で買い物する写真を掲載した。

僕が着たホルタートップのワンピース

スからは、僕の新しいお友だち二人が、やんちゃな顔をのぞかせていた。

望遠レンズで狙った社は、その部分のアップの写真を載せ、これは本物だと断定した。

ギリシャで例の写真を隠し撮りしたカメラマンは、すでに通信社を解雇されたらしい。デュークの顧問弁護士団が、写真を掲載した全社に対し、訂正記事を出さなければ提訴するという書面を送ったせいだろう。

僕はそれらの情報を、折に触れ、ニッキの口から聞いた。

その3週間のほとんどを、自分の船室から出ることなく、ベッドの上で過ごしたからだ。おかげで、僕の体は順調に回復していった。

そんなふうに、ニッキがつきっきりで面倒を見てくれている間に、船は、

スエズ運河を通過し、紅海を横切り、アラビア半島南端に達していた。

もちろん、その間、デュークも毎日、僕の部屋にやってきた。

僕らは、何時間も座って、話をした。

正直言って最初は、まるで病気のお見舞いのようなその雰囲気は照れくさかった。ことに、その「病気」の中身について考えると、恥ずかしくなるのだ。

でも、デュークは、そのことにはいっさい触れなかった。

その代わり、僕らは、自分の心に浮かんだことをなんでも話した。

そして僕は、デュークという男を、ますます気に入っていった。今やデュークは、単なる友だちではなく、親友と呼んでいい人になった。

サバンナ港を出港してからちょうど

3ヵ月が経った日、船はインド洋に到達した。

そして同じ日、僕の最後の包帯がとれた。

その夜、船室でひとりになった僕は、パンティだけの姿で鏡の前に立っていた。

そして、かつて、こことはまったくの別世界で生きていたひとりの男と、目の前の自分をくらべていた。

ただぼさぼさだった髪は、今やしなやかに揺れ、絹のような輝きをたたえている。

荒れ放題だった肌は、毎日のモイスチャー・トリートメントの味をしめ、生まれたてのように無垢だ。

僕は今、少なくともマスカラと口紅なしでは、けっして外に出ない。

そう、それも奇妙と言えば奇妙だ。当初僕は、自分の正体をさらしたくな

くてメイクしていたはずなのに、今や、自分を人目にさらしたくてメイクしている。

耳にはピアスがあげられ、眉は細く、形よく整えられている。

腕や脚からは、筋肉のごつごつした感じがすっかり消えていた。

手にあったタコも、きれいになくなっている。ただこれについては、上品な女性としてのライフスタイルのせいなのか、それともホルモンの作用なのか、なんとも言えないところだが。

胸ができてすでに1ヵ月近くが経つというのに、僕はまだ、その扱いのやっかいさに慣れていなかった。

靴を履く時には視界をさえぎるし、テニスのスイングのじゃまをする。それに、服のほとんどが、きつくなっていた。ブラを着けないまま動くと、痛かったりもする。

ホルモンのせいで、乳首はすごく敏感になっている。おかげで僕は、シャワーの時にひとりで楽しむいけない遊びを覚えてしまった。

もともと細かった上に脂肪吸引でさらにか細くなったウエストに関して、僕は、誇りとともに、なんだか混乱した感情を抱いている。

かつては想像もできなかったぜいたくな食べ物があふれているというのに、このキュートなウエストを失うのがいやで、僕は、デザートのおかわりさえしないのだ。

せっかく食べないことに慣れているのに、いまさら男みたいな食欲は持ちたくない……そんなふうに思っている。いや、もちろん、今のところはこの話だが。

最後に僕は、パンティも脱いでみた。インプラントを入れたお尻は、ホル

モンの力とも相まって、キュッとかわいく持ち上がっている。もう、量としても、形としても、パッドやガードルは必要なくなっていた。

で、ペニスについては……いや、もちろん、まだそこにある。

毎日飲み続けているエストロゲンが、それを消失させるわけではないのだ。ただ、前より小さく、そして、やわらかくなっていることはたしかだ。

外の空気を吸いたくなった僕は、パンティを上げ、それから、ロングスカートとハイヒールを履いた。

ところが、そのスカートに合ういいトップスが見つからず、僕は、ビキニのブラだけを着けて部屋を出た。

デッキに向かう途中、すれ違った何人かの乗組員は、僕に礼儀正しい笑顔を向けてきた。ただ、その視線が、僕

の胸のあたりをさまようのに、ちょっと困惑した。

デッキに出た僕は、手すりにもたれて、月夜のインド洋を眺めた。

潮の香りを濃厚に運ぶ海風は、生暖かくて湿気も多い。こんな格好をしていても、肌が汗ばんだ。

声もかけずに近づいてきたというのに、僕にはそれが、彼だとわかった。

デュークは、そのままなにも言わずに僕の隣りに立ち、やはり海を眺めはじめた。

そんな時間が10分近くつづいたころだった。

彼は、僕に目を向けた。

「今夜の君は、本当にきれいだ」

じつはこれまでも、デュークからそんな言葉をかけられたことはある。でも、そんな時、彼は、それをまともに受け取られても困るというように、冗

談めかした言い方をしていた。

ところが今のは、まなざしも口調も、ふざけた感じはまるでなかった。

「ありがとう、デューク」

「変な意味にとらないでほしいんだけど……、君は、ほんとにかわいい女になったよ」

「ふふ、ある意味で、あたしも、うなずくしかないわ」

そこで僕は、一呼吸おいてから、きいた。

「デューク、ちょっと個人的な質問をしてもいい？ もし答えたくなかったら、答えなくてもいいけど」

「ああ、君は僕のためにこれだけのことをしてくれたんだ。答えないわけにはいかないだろ。なんでもきいて」

「初めて会った時、正直言ってあたしは、あなたのことを、頭が空っぽで、性根の腐った金持ちのお坊ちゃんだと

思ったわ。きれいな女にしか興味のない、女を外見でしか判断しない、どうしようもないやつだって。でも、あなたと親しくなった今、あなたが本当にすごい人だっていうことが、よくわかった。賢くて、人柄もよくて、その上、品もいい……」

手すりに置いた僕の手の上に、デュークの大きな手が、やさしく重ねられた。僕は、それを拒否しなかった。

そして、質問をつづけた。

「でも、そんなあなたが、どうしてあたしの妹なんかを好きになったのか、それがわからないの。それが、ずっと疑問だった。いったいあなたは、彼女のなにに惹かれたわけ？ あたしには、想像がつかないの」

そこでデュークは、大きくため息をつき、僕の手を離した。

「アンディ、けっきょく、わかってな

かったんだと思うよ。僕はそれまで、いわゆる社交界の女の子や、上流育ちといわれる女の子とばかりつき合ってきた。で、あるパーティで君の妹と会った時、衝撃を受けた。彼女こそ現実だと感じたんだ。今ここに、生きてる女……だってね。彼女は魅力的だったし、僕の世界を広げてくれる気がした。まあ、恋は盲目ってやつかもしれない。いっしょになれば、彼女は僕に、知らない世界をもっと教えてくれるだろう。僕は彼女に、彼女が惹かれているらしい上流社会のことを教えてあげられるはずだ……そんなふうに思ったってことさ。まったく！ 馬鹿みたいだ」

「馬鹿みたいだとは思わないわ」

今度は、僕の方が、彼の手の上に自分の手を置いた。

「言葉をかえれば、ロマンティストってことでしょ」

「ふふ、そうだね。まあ、それこそ、僕の馬鹿なところなんだから。たとえば、今だって……」

「ん？ ……今だって？ なに？」

「……い、いや。それこそほんとに、馬鹿な話さ」

「なに？ 言って、デューク」

「僕は今、君といるのが楽しいと感じてる。だから、君がアンドレアだったらなんて思うんだ。……あ、いや、もちろん彼女のことなんかじゃなくて……つまり、その……、君が、本当に女だったらなんて……。だから、つまり……」

僕は思わず、デュークの手をぎゅっと握っていた。

「つまり……、あたしたちが本物らしく見せるには、いっそのこと、本物になってしまえばいいってこと？」

デュークの手が、僕の手を握り返し

てきた。

そして、もう一方の手は、僕の頬に重ねられた。

僕たちは、そのまま長い時間、見つめ合っていた。

やがて、彼がキスしてきた時、僕はそれを、受け入れていた。

「ニッキ！ ニッキ！ 起きて！」

僕は、彼女の船室のドアを何度もノックしていた。

どうしても、彼女と話したかった。

「いったい、なに？」

ドアを開けたニッキが、眠そうな目で言った。ルーズにはおられたバスローブが、あわてて出てきたことを語っていた。

「聞いて欲しいことがあるの」

彼女が入ってこいというジェスチュアをしたので、僕はヒールにつまずきながら中に入った。

「ニッキ、ねえ、聞いて！ デュークがね、あたしに、キスしたの」

ニッキは目をこすりながら、わけがわからないという顔をした。

「べつに初めてじゃないでしょ。夫婦に見せなきゃいけない時は、いつもしてるじゃない」

「そうじゃないの。あたしたち、二人きりだったのよ。それなのに、あたしはそれを許してた」

「ん？ デュークが突然してきて、あなたが驚いたってこと？」

僕は、ため息をついた。

そして、肌の大部分が露出した上半身に、そこにかかっていたニッキのトップスのひとつを羽織った。

「だからね、あたしも、キスし返した

ってことよ。あたしたち、ふたりでキスし合ったの」

その言葉に一瞬にやりとしたニッキは、すぐにそれを隠してキャリアウーマンらしいまとめ方をした。

「つまり、この四半期、新婚カップルをめざしてきたあなた方ふたりは、ついにその目標を達成した……ってことね」

「ええ、そのとおりよ。ご指導ご鞭撻、どうもありがとう」

僕は、きびすを返し、出て行こうとした。

「で、それがなにか？ アンディ」

「もうッ！ だからね、これは、あたしのファーストキスだってこと。笑わないでよ」

「男とキスしたのは、初めてってことでしょ」

「ちがうの。誰かとちゃんとキスした

のは、これが初めてなの。まあ、ほんとはずっと、女の子としたいと思ってたけど……」

僕の言いたかったことがやっと伝わったらしく、ニッキはしばらく、おかしな表情で僕を見つめていた。

そして、かたわらの電話を取った。「……あの、申し訳ないけど、紅茶を持ってきてくれる？ ……ええ、ありがとう」

その受話器を置いたところで、また僕に向き直った。

「アンディ、あなた、いくつ？」

「19」

「で、これまで、誰ともキスしたことがないっていうの？」

「あたしはずっと、ホームレスだったのよ。そんなチャンスなんて……」

そこまで言ったところで、僕は口ごもっていた。

果たして本当にそうだろうか？

路上生活には、恋愛のチャンスがなかっただろうか？

よく考えてみれば、ホームレスどうしで結婚しているカップルさえいた。愛の交歓は、裏路地や放置自動車の中でやっていた。

かつての僕のまわりにだって、女はいた。墜ちてきた女たちが。

家出娘、あばずれ、精神病予備軍……そんな女たちが、僕の目の前においしそうな果実を差し出していた気がする。

ごくふつうの主婦が近づいてきて、それとなく、いつときのベッドを誘ってきたことだってある。

それなのに、なぜか僕は、それらを受け入れようとはしなかった。

「アンディ？ なに考えてるの？」

「いちばん最近、女の人にそういう感

情を抱いたのは、いつだったかと思って……」

たとえば市民公園。

そこには、アスレチック・ブラからしまった腹筋をのぞかせてジョギングする女性たちが何人もいた。夏には、ビキニで日光浴している女子学生だった。

でも、僕は、彼女たちをじろじろ見たりはしなかった。そこに、ロマンスの可能性を探そうなどとは思ったことがない。

ということは……別の可能性だってあるということだ。

僕は、かつていっしょに働いていた男たちのことを思い出していた。時として僕は、彼らの屈強な裸の背中を見つめていたりしなかっただろうか？

ホームレス収容所のむんむんする男臭さに、ぼーっとなるようなことはな

かっただろうか？

それとはまったく逆だが、あのダンスで、デュークの太い腕に抱き寄せられたときにも……！

「ニッキ……」

僕は、唇を震わせながら叫んでいた。「そんな変な目で見ないで。あたしは……僕は、そんな人間じゃあ……」

「そこまで！ 私は変な目でなんか見てないわよ。だって、そんなことは大した問題じゃないと思ってるんだもん。たとえばあなたが、あなたの言う『そんな人間』だったとしても、それは、寝られなくなるほど悩むことじゃないわ。もう、そういう時代じゃないでしょ。恥ずべきことなんて、なんにもないのよ」

そこで、ノックの音がした。

そして、ステュワードが、紅茶を持って入ってきた。

僕はなににより、自分の頭に浮かんだ言葉が恥ずかしくなり、バスルームに逃げ込んでいた。

僕は……！　僕は……ホモ？

そう考えれば、いくつかのことには、確実に説明がついた。

船室のドアが閉まる音がしたところで、僕は、バスルームを出た。

「だけど、もしあたしが……そういうことだとしても……それで、全部が説明できるわけじゃないわ。だって……、見て！」

僕はニッキから拝借したブラウスの前をはだけ、彼女の目の前に、若い女性の上半身をさらしていた。

「あたしは今、女よ。それを、ゲイとは言わないでしょ……えっ？　あ、あたし、いったい、なに言ってるんだろ」

僕は、泣き始めていた。

ニッキは、そんな僕をベッドに座ら

せると、やさしく抱いてくれた。

僕は、彼女の肩に顔を埋めて、すすり泣いた。

「アンディ、たぶんあなたは、ずっと自分を見失ってきたの。本当の自分を見つけられないできた。でもね、聞いて。私があなたと同じ年頃だった頃……あなたが生まれるずっと前ね……あたしなんて、自分のことを見失い放しだったのよ。だから、まちがったことばかりしてたわ。過去のあなたのことを思って、くよくよしてもしようがないと思うのよ。それより、今の自分の気持ちを見つめるの。じゃなきゃ、未来は開けないわ」

「それで……あたしは、どうすればいい？ デュークを避けた方がいい？ 前に思ってたように、彼の前から姿を消した方がいい？」

ニッキはそこで、ポットからお茶を

注いで、僕に手渡してくれた。

「それは、まだ決めなくていいんじゃない。どっちにしても、3・4ヵ月先には、ジョージアに戻るわ。そこで決めたら」

「えっ? ……ちょっと待って。それじゃあ、これまでの分と合わせても、6ヵ月か7ヵ月にしかならないじゃない。ハネムーンは、1年つづくんじゃないの?」

ニッキは、自分の紅茶を飲みながらつづけた。

「そう、あれこれあったから、ヨーロッパでの寄港先を、当初の予定よりずいぶんはしょっちゃったの。本来なら、デュークは、もっとあちこちで、あなたといっしょに過ごすつもりだったのよ。……あつ、じゃなくて、あなたの妹とね」

次の日、デッキでひとり食事をとっている時だった。

首すじに、なにかひんやりしたものがすべるのを感じた。

僕が安全な環境にすっかり慣れていたという点で、デュークは運がよかった。以前なら——たとえ2ヵ月前でも——僕がそのものの正体を判断する前に、デュークはあばら骨を折っていただろう。

しかし今の僕は、ゆったりと自分の上半身に目を落とし……、それが、夫からプレゼントされたパールのネックレスであることを知った。

「ああっ、デューク、すてき！」

僕は、ほとんど無意識のうちにそう反応していた。

「ありがとう！」

デュークは体を傾けて僕の頬にキスし、でも、それだけにとどめて、僕の隣に腰を下ろした。

「僕が、特別な日を忘れるとでも思ったのかい？」

「……え？ 特別な日？」

なにかの記念日なのだろうか？

「とぼけないでよ」

デュークは、そう言ってウインクしてみせた。

でも、僕にはなにも思い当たらなかった。だいいち、デュークを知ってからまだ日が浅いのだ。1年が経過したことなど、あるはずもない。

もしかして彼は、本物のアンドレアと僕を、勘違いしてるんだらうか…
..？

「双子なんだから、誕生日はいっしょだろ。アンディ、20歳、おめでとう！」

「えっ？ ……あつ」

デュークは、それに、ちょっと驚いた顔をした。

「えーっ、ほんとに忘れてたの？」

「デューク、だってあたし、これまで、人から誕生日を祝ってもらったことなんて、ないのよ。だからこれは、あたしの初めての誕生日プレゼント」

僕は、気持ちが高ぶり、震えるような声で言っていた。多少、ホルモンの影響もあったかもしれない。

「ああ、アンディ。それなら僕は、その19個分のプレゼントを、今すぐ用意するよ」

もちろん、僕は泣いていた。

「ううん、いいの。これでじゅうぶん」

僕は、必死で涙をこらえ、鼻をすすり上げた。

「ねえ、デューク。ゆうべのこと……」

「えっ、ああ」

デュークは、ちょっと臆病そうに僕

を見た。

「あたしにはまだ、なんの答えも出てないの。自分でも、なにがなんだか、わからなくなってる」

「ああ、だろうね。ごめん」

「謝らないで！」

僕は、強い語調で言っていた。

「そんな意味で言ってるんじゃないの。ねえ、ニッキから聞いたんだけど、あなたは、このハネムーンで、ふたりだけで過ごす時間をもっとたくさん、予定してたんでしょ。あたしのせいで、それができなくなったのよね」

「まあ、そういうことだけど……」

「せっかくのハネムーンなのに、あたしがいやがってたから、それができなかったんだとしたら、謝らなきゃいけないのはあたしだって気がするの。それでね……。この近くに、船が泊められるビーチかなにかない？　ここまで

でとばしちゃった時間を、そこで取り戻せないかなって……。そしたら、ふたりだけで……。つまり、その……。お互いもっと知り合えるでしょ」

ことわっておけば、この時僕は、そんなに具体的に、なにかを暗示したつもりはない。でも、デュークと僕にとって、もうゲームの時間は終わるのだということは、わかっていた。

あの結婚式の時以来はじめて、デュークの顔に、なんのこだわりもない笑顔が浮かんだ。

「セーシェル群島だったら近いな。そんなにたくさん観光地があるわけじゃないけど、きれいな島だ。そこで船を下りて、しばらく滞在しようか？ 君と僕とニッキで」

「ニッキだってきっと、ひとりになれる休暇がほしいと思うわ」

セーシェルは、インド洋上の小さな島がいくつも集まってできた国だ。観光が主要な産業だが、アメリカやヨーロッパの資本が入り、大規模な開発が行われているような場所ではない。

でも、上陸したとたん、僕らは、ここがすばらしいところだとわかった。

住民のほとんどは黒人だが、植民地時代の名残で、ヨーロッパとアフリカとインドの言葉がごちゃ混ぜになった奇妙な言葉を話す。

彼らはみんな、陽気でフレンドリーだ。たとえば、観光地で働いている人たちも、けっして卑屈な目をしていない。

小さな町へ行っても、遠くからの訪問者を温かくもてなしてくれる。もちろん、観光客がお金を落としてくれる

という期待もあるのだろうが、だからといって、そのあとをぞろぞろついてくるようなことは、けっしてしない。

そんな土地柄だから、ホテルでも、レストランでも、ビーチでも、デュークと僕は、誰にもじゃまされず二人だけの時間が持てた。

ちなみに、ニッキも上陸したのだが、彼女は、数マイル離れた別のホテルに部屋をとった。

とはいえ、デュークと僕の間には、ご期待に添えるようなストーリーが急速に進展したわけでもなかった。

連日暑い日がつづく熱帯の気候の中で、僕の精神的抵抗が徐々に薄れていったのは事実だが、その抵抗感は、僕が思っていた以上に大きく、根深いものだった。

だからこそ逆に、その抵抗感が崩れ落ちたとき、そこには新たなアンディ

ーが出現したとも言える。これまでとはまったくちがう生まれ変わったアンディが、いや、考えようによっては、現れるべくして現れたアンディが。

上陸した当初から、僕らは新婚カップルとして行動していた。

僕はデュークに日焼け止めを塗ってもらい、僕もデュークの体にそれを塗った。

周囲にカメラマンの影などないのに、僕らは、手をつないでほこりっぽい道を歩いた。

彼は、僕の髪に花をとめてくれ、僕らは小さなバーで踊った。

いっしょに泳ぎ、そのあと彼は、僕の体を拭いてくれた。

彼は僕にキスしてくれ、僕は彼の体を抱きしめた。

ただ、ホテルでは、なかなかそうは

いかなかった。

じつは、チェックインするとき、僕らはいわば勢いで、ダブルの部屋を選んでしまった。

しかし、その部屋を目にしたところで、僕はひどく狼狽した。

デュークの方は、すぐに僕のそんな様子に気づいたようで、あくまで紳士的に振る舞った。

僕にバスルームで着替えればいいと言い、夜は、自分から、枕をソファへと運んだ。

でも、やがて、そのダムが決壊する日がやってきた。

僕らはその夜、ずいぶん飲んでいて。月光が射すビーチで、裸足になった僕らは、ふざけ合いながら追いかけてっこをしていた。

僕は裾の長いドレスを着ていて、走

っている途中、それにつまずいて転んでしまった。

デュークは、そんな僕を助け起こそうと、手を差し出した。

でも、酔っていた僕は、その手をつかみ、彼を倒すように引っ張っていた。

デュークの体が僕に覆い被さり、そこで僕らは笑うのをやめた。

すぐに、デュークの舌が僕の口の中に入ってきた。

3カ月の独身ハネムーンは、彼を限界まで追いやっていたようだ。

僕の裸の肩にあてたその手が、乱暴に肌の上を走った。

ちょっと恐くなった僕は、もがくようにそこから逃れた。

「ドレスが砂まみれ。シャワーを浴びなきゃ」

デュークは、それに大きなため息をついたが、すぐに「わかった」と言い、

つづけた。

「たぶん……、たぶん僕もすぐに浴びたくなるよ。背中を……流してくれないか」

ホテルの部屋に戻ると、僕はすぐに、逃げ込むようにバスルームに入り、シャワーを浴びた。

降り注ぐお湯の熱気が、シャワーカーテンの内側に充満した。僕の日焼けした肩や、裸の乳房、硬い乳首にあたったお湯が、はじかれ、滝のように流れ落ちた。

でも僕は、全裸ではなかった。下半身にビーチパンツを履いていた。

もしこれから、夜も妻を演ずることになるなら、その最初の時に、ペニスを見られたくはなかったからだ。

ドアの音が響いた。

バスルームにもあるBGMのスイッ

チが入り、代わりに照明の光度が落とされた。

デュークの手がカーテンを開け、そして、彼が入ってきた。

一瞬、彼はなにか着けているのかと思った。でも、その棒のようなものが、ひくっひくっとして揺れていた。

どう表現したら理解してもらえるだろう？ ……そこにはたぶん、バスタオルが……5枚くらいは……掛けられたにちがいない。

「アンディ……」

デュークは、僕の肩をつかもうと手を伸ばした。

でも僕は、彼のお厚い胸に手をあて、それを止めた。

そして彼に、石けんを手渡した。

「先に、あたしの背中を洗って。それから、前もね。もし、上手だったら、あたしも、あなたのを洗ってあげる」

数時間後、僕は、胸もあらわな姿でベッドに横たわっていた。体中がぐったりと疲れ、それに、痛みもあった。

でも、僕は満たされていた。

デュークは、僕の横で寝息を立てていた。

彼の腕は、まるで、自分が手に入れたものを離したくないとでもいうように、僕の体を取りまいていた。

でも僕は、なかなか寝つけなかった。

……ほんとに、これでよかったの？

……あたしたち、これから、どうなるの？

……あたしなんかで、ほんとにいいの？

……あなたの人生に、あたしの居場所はあるの？

僕らが船に戻ったのは、その1週間後だった。

ふたりとも満面の笑顔で、手に手をとって、まるでスキップでもするみたいに、僕らはタラップを昇った。

デュークが、今後の航行予定について船長と話しに行っている間に、ニッキが部屋にやってきた。

「この旅から帰ったら、離婚発表をしなきゃいけないのを忘れてない？ カメラマンの前であんまり幸せそうにしてると、今度は離婚の理由を詮索されるわ」

僕は、僕らのことを、ニッキも喜んでくれているだろうと思っていた。でも、彼女は眉間にしわを寄せていた。

「それは、あなたが望む結末とはちが

うでしょ」

「ええ、もちろんちがうわ。あたしはまだ、この旅から帰ったあと、自分がどうするのか、なにも決めてないもの。でも、あなたが前に言ってたとおり、この暮らしには、楽しいことがいっぱいあった。あたしはそれを、つづけられたらって考えはじめてる」

ニッキは、なんだか皮肉っぽい笑顔を浮かべた。

「どうやら私は、自分の仕事を、思った以上にうまくやったってことね

「ええ、あなたはそれに胸を張っていいわ」

僕は、彼女を抱きしめた。

「あたしは今、幸せよ。こんなふうに感じたのは、生まれてはじめて。本当に幸せなんだもん。すべて、あなたのおかげだと思ってるわ」

「お願いだから、私に感謝なんかしな

いで」

「どうして？ あなたには、感謝の気持ちでいっぱいよ。だって、もしあなたがいなかったら、あたし、自分に…人を受け入れられる部分があるなんて、知らなかったわ」

ニッキは、僕から目をそらした。きっと、僕の言ったことが恥ずかしかったにちがいないと思った。

「あのね、ニッキ」

僕は、そんな彼女に語りかけた。

「デュークと出会えた以外に、この旅行にはいいことがもうひとつあったわ。姉妹を持てたこと」

「……アンドレア？」

「ちがうわ、あなたよ」

ニッキの目が、大きく見開かれた。「そんなふうに言っちゃだめ。……い、いえ、つまり、私はあなたの母親でもおかしくない年よ」

「そんなこと、関係ないわ。あなたは、あたしにとって、友だち以上の人だもん。あたしの家族よ。お姉さんって呼ばせて」

きっと、ニッキは、涙をためて僕に抱きついてくるにちがいない。

僕は、そう思っていた。

ところが、彼女は、そんな僕を、にらむような目で見てきた。

「そんなふうに呼ばないで。二度と、そんなふうに呼ばないで！」

叫ぶようにそう言うと、彼女はいきなり部屋を飛び出した。

僕には、ニッキの突然の拒絶的な態度が理解できなかった。でも、それは、いずれ彼女の口から説明してくれるだろうと思った。

それで、旅行から持ち帰った荷物をかたづけ、そのあと、デュークをさがしに船室を出た。

デュークのオフィスに近づいた時だった。

中から、怒鳴り声が聞こえた。いや、それは、怒鳴ると言うより、叫ぶというのに近かった。デュークが、なにかを叫んでいた。

と、ドアが開き、ニッキが飛び出してきた。

彼女は、これまで見たこともないほど、怯え、絶望的な顔をしていた。

彼女はそこに立っていた僕に気づいたようだったが、なにも言わず、悲しげな後ろ姿とともに歩き去った。

オフィスのドアから顔を出したデュークは、僕には気づきもせず、そんなニッキの後ろ姿をにらんだあと、ぱたんとドアを閉めた。

ニッキは、彼女の船室にいた。

「なにがあったの？ ニッキ」

彼女は、クローゼットの中のものをスーツケースにしまっていた。

「出てって！」

「ニッキ、どうしたの？ 理由を教えてください。なににも言わないで、行ってしまいうつもり？ 話して、ニッキ」

ニッキがこちらに向けた顔を見て、僕は、その暗い絶望のまなざしに、わけのわからない衝撃を受けた。

「私は、あなたとデュークを裏切りつづけてたの。もう、それに耐えられなくなった」

その表情とも相まって、背筋を寒気のようなものが走った。

「えっ？ いったい、どういうこと？」

僕は一瞬、例のギリシャでの盗撮を、ニッキが手引きしたのかと思った。…まさか！

「アンディ、私は、あなたの友だちな

んかじゃない。私は……」

ニッキは、苦しそうに声を絞り出していた。

「私は……、あなたの妹、アンドレアの手先だったの。彼女に協力して、あなたを陥れた」

僕は、立ってられないような気持ちになり、そこにあった椅子の背もたれにしがみついた。

「で、でも……、協力って……、いったい、なにを？」

「すべてよ。アンドレアとデュークを引き合わせて、デュークが彼女と恋に落ちるように仕向けたのも私。あなたの所在をつきとめて、あなたが彼女に会いに行くよう仕組んだのも私なの」

彼女は、大きくうなだれ、つぶけた。「それに、結婚式の前に、あなたを動けなくしたクスリを手配したのも私よ」

僕は言葉を失っていた。

僕が親友だと思っていた人、姉と慕った女性は……裏切り者だった。

「あなたのことを、お姉さんなんて言った自分が情けないわ。ニッキ、すぐにでも消えてほしい。気持ちとしては、この場からってことだけじゃないのよ」

僕は、そう言い捨てて、きびすを返した。

「説明させてくれない？」

「今さら、なにを？ あなたが、デュークとあたしを売ろうとしたこと？
いったい、いくらもらう約束だったの？」

「ちがう！ お金じゃないわ」

「じゃあ、なに？ 有名になりたかった？ それとも、ドラッグ？」

僕は、できるかぎり残酷になろうとしていた。

「彼女に、脅されたの」

僕は、鼻を鳴らした。

「そう言うと思ったわ」

「ほんとよ。うそじゃないの。彼女に私の秘密を知られてしまったの。アンディ、私が、女装について詳しすぎると思わなかった？」

「えっ？ そんなこと考えたこともないけど、それがなんの関係があるの？」

「アンディ、私は15年前まで、ニックという名の男だったの」

その言葉に呆然とし、僕はニッキの方を振り向いた。

高めの身長、大きめの手……連想できるのはそれくらいだが……でも……もしかすると……。ニッキは男……もと……男？

僕の心には疑問が渦巻いていた。しかし、すぐ口をついて出たのは、あの男のことだった。ニッキのボーイフレ

ンド、パイロットの……

「……トレントは？」

僕がその名を口にすると、ニッキはすぐに言った。

「ええ、知ってるわ。それでもいいって言ってくれてる」

僕はまだ、わけもわからず立ちつくしていた。

僕にとって、ニッキはいつも女性だった。

ニッキが、僕と同じような過去を持っていたなんて、信じられなかった。

と、彼女がつづけた。

「デュークのもとで働きだしたのは、性転換したあとよ。男としての人生は、あたしにとって地獄だった。でも、私の夢は実現した。女としての生きることは、天国のようだったわ。そこへ、ある日、あの女……あなたの妹が現れた。デュークをだますのを手伝わなけ

れば、私の秘密を世間にばらすと……」

そこまでは、多少、彼女に同情していたのだが、僕はちょっと疑問を感じた。

「ちょっと待って。たしかに、デュークの妻がもと男だったとしたら、世間は騒ぐでしょうね。だけど、デュークの広報担当秘書がそうだったとしても、そんなにニュースバリューはないわ。せいぜい、10面のすみに載るくらいでしょ。それに、デュークに相談すれば、きっとあなたの味方になってくれたと思うわ」

「ええ、デュークは、私のために、どんなことでもしてくれたはずよ。でも、彼女が脅しのネタにしたのは、それだけじゃないの」

「他に、なにが？」

「男として年をとることは、私にとって苦しみ以外の何ものでもなかった。

いつも自殺を考えてたわ。だけど、私には、助けてくれるお金持ちなんていなかった。だから、死ぬほどあこがれた手術もできなかった」

「……で？」

「私は、その手術代ほしさに、前に勤めていた会社で3万ドル横領して逃げたの。それで新しいアイデンティティをつくり、デュークのもとで働きだした。アンドレアは、それを公表して、告発すると脅したの」

「それにしても、正直に相談すれば、デュークはあなたのために動いてくれたんじゃない？」

「ええ、たぶん。でも、デュークにだってできないことはあるわ、アンディ。私が犯罪を犯したのは、ニックとしてよ。だから、もしつかまれば、私は、男の刑務所に送られるはずよ。そこでなにが起こるか、考えてみて」

「それで、あなたは、2人の人間の人生を狂わしたってこと？」

僕は、できるだけ冷淡に言い放とうとした。でも、それは、けっして成功したとはいえなかった。

「私に言い訳できることがひとつだけあるとしたら、アンドレアの計画がうまくいくなんで、これっぽっちも思っていなかったってことよ。彼女に言われたとおりに動いてはいたけど、あんな危うい計画は、かならずどこかで破綻すると思ってたわ。ところが、ものごとは、私が想像してた以上にうまくいってしまった。あなたが、きれいだったからね。ただ、デュークが預金をガードしていたという点だけが、彼女の計算違いだったの。そしたら、デュークがあんなことを言いだした。しかも、あなたは、それをうまくこなしてしまった。私は、口をつぐんだまま、

デュークの花嫁付き秘書の仕事をする
しかなかったわ。でも、そんな私を、
あなたは姉と言った……私がこれまで
言われた中で、いちばんうれしかった
呼び名……だからこそ、私にはもう耐
えられなくなったの。だから、デュー
クに、すべてを告白する決心をしたの」
その言葉を振り払い、その姿には振り
向かず、僕は船室を出た。

オフィスに入っていくと、デューク
はまだそこにいた。

室内は、惨憺たるありさまだった。
机の上は散乱し、そこにのっていた高
価なコンピュータは床に落ちて壊れ、
さまざまな装飾も、すべて壁からはぎ
落とされていた。

未だ壁に向かってパンチをふるって

いるデュークを、僕はあわててとめた。
「やめて。指の骨が折れるわ」

こちらを向いたデュークの顔は、PCP(※)中毒者の中にもいないような恐ろしいものだった。

(※訳注 麻薬・フェンサイクリジン ‘Phencyclidine’ の略称 幻覚剤だが、強度の異常行動を誘発する)

「聞いたんだろ。あの淫売が僕にしたことを。僕らにしたことを」

僕は、倒れていた椅子を起こし、そこにデュークを座らせた。そして、彼の肩に両手を置き、静かになでつづけた。

数分後、やっと、その緊張が解けてきた。それはまるで、ビーチボールがしぼんでいくようだった。

デュークは、机の上に倒れた、フレームの壊れた写真立てを見ていた。そこに入っているのは、会社創業当時の

集合写真らしかった。その中央に並んで座っているのは、デュークとニッキ……信頼によって結ばれた友人どうし……。

「あの女があんなやつだったなんて……。この借りは、かならず返させる。オーストラリアのそばの小さな無人島に放り出してやる。のたれ死ねばいい。それとも、どこかの手荒い船員のいる船を雇って、家まで送ってやろうか。その間、ずっとフェラさせられつづけるんだ。あの淫売シーメールめ。国へ帰っても、働けないようにしてやる。あいつが男だってことを、大々的に公表してやるんだ」

僕は、机の上のものを払いのけ、彼の真向かいに座った。

「言いたいことは、それだけ？」

「……あ、ああ」

「それもいいわね。でも、あなたが今、

本当にやらなきゃいけないことは、こういうことよ。まず、ニッキを飛行場のある島で下ろす。アメリカ行きの飛行機に乗るところまで見届ける方がいいわね。その上で、彼女を降格するか、休職扱いにする。それとも、あなた以外の方が首を切れない部署に配転する。少なくとも、あなたが落ち着くまでの1・2ヵ月間はね」

デュークは、僕が異常をきたしたとしてもいう目を見てきた。

「よく、平気でそんなことが言えるな。あいつは君を、女に変えたんだぞ」

「あら、そんなに、よくなかった？」

デュークは、まだ怒っているにもかかわらず、笑ってしまった。

「ふっ……、僕の立場から言ったわけじゃないさ」

「彼女は、あたしたちを傷つけた。デューク、あたしだって彼女を許さない

わ。一生許さないと思う。でも、彼女は怯えてるわ。刑務所に入れられるんじゃないかって。それは、彼女に対して、あなたが望んでること？」

デュークは、不満そうに口をとがらせた。

僕は、そこにキスをした。

2日後、僕らは、ディエゴガルシア島(※)の海軍基地でニッキを下ろした。

(※訳注 ‘Diego Garcia’ インド洋上のイギリス領だが、島全体が基地としてアメリカに貸与されている)

翌日、ニッキを乗せた飛行機が、本国へと旅立った。今後1年間、彼女は、デュークの子会社のひとつで副社長秘書として働くことになった。これまで

の仕事にくらべ、華やかさに欠けるし、給料も2分の1程度になるらしい。

その週のうちに、ニッキがもと勤めていた会社は、弁護士から意外な手紙を受け取った。かつてニックが横領した金を、ある匿名の人物が利子つきで代返済するというのだ。会社は、その条件どおり、横領に関する告訴を取り下げた。

ニッキの事件はデュークを落ち込ませ、その結果、僕が彼といっしょにいる時間はますます長くなった。

また、僕らが信頼してあれこれを任せていた人物がいなくなったということは、後に残された混乱を、僕ら自身が引き受けなければならないということだった。

これまでニッキが担ってきた旅行の計画については、デュークが自分で旅程を決め、手配した。ニッキの計画では、インド洋を出たあと、北へ向かい日本に寄る予定だったが、デュークは、南半球まわりにコースを変更した。

これまでニッキに頼ってきたファッションや女性としてのアドバイスがなくなっただぶん、僕は、毎日のあれこれを自分ひとりで判断しなければならなくなっただ。

ここまでの自分の経験と、デュークの高速度衛星インターネット回線を駆使し、僕は、服やメイクやヘアスタイリングについて、賢い選択ができるようになっていった。

毎日つづけているホルモンは、僕の体をますます曲線的にしていた。もう、朝起きたとき、胸の重みに驚くようなこともなくなり、ブラを着けることも、

当たり前のこととしてとらえていた。

ペニスは、弱々しい感じになり、勃起もしなくなっていた。例のセックス隠蔽下着を使えば、ビキニのボトムも、平気で着られるようになった。

そんな姿を見て、デュークは、胸をつくってくれた医者が、下もやったにちがいないと、さかんにからかってくる。

僕らふたりの肉体的な関係も、次第に変わっていった。

デュークは今や、夜、こっそりと別の部屋に逃げ出さなくてもよくなった。

正直言って、最初の頃、僕は、夜が来るのが恐かった。でも、デュークはやさしくて、けっして無理強いはしなかった。

何週間か過ぎた頃には、彼は、僕の

世界を大きく広げてくれた。

わかりやすく言えば、僕がここへ来てはじめて経験したこと……チョコレートシロップの甘さだとか、グラスの中の氷がはじける感じ、あるいは、シルクのスカーフの肌触り……そんな経験が、僕の体の中にも起こったということだ。

デュークは、僕の妹のことを思い出したくないという理由から、僕を「アンドレア」と呼ぶのをやめてしまった。

代わりに、今は「アンディ」と呼ぶ。スペルの語尾が「I」になる「アンディ(Andi)」だ。(※)

(※訳注 アンドレア ‘Andlea’ もアンドリュー ‘Andlew’ も、短縮形の愛称としてはアンディ ‘Andy’ と呼ぶのがふつう ただ、語尾が ‘y’ になる愛称は男女両方に用いるのに対し、‘Andi’ のように ‘i’ で終わる愛称は女性にし

か使わない 実際の発音としてはほとんど変わらないのだが、文字で見ると、かわいらしくて女の子っぽい印象になるようだ)

アメリカに帰ったあとのことについては、ふたりとも、会話を避けていた。

この旅行は、もともと「離婚」を前提としたハネムーン。

……でも、本当にそれでいいの？

……アメリカに帰って、すぐじゃなきゃ、いけないの？

ニッキを船から降ろして3週間後、僕らは、本来の旅程にはなかったオーストラリア北部のダーウィンに寄港した。

これまですべての寄港地の中で、僕は、ここがいちばん好きだった。

きれいな海、白い砂浜、そして、すがすがしい天候。

デュークは、ここでまた、ふたりだけの時間を好きなだけ過ごすつもりだと言った。でも、この頃には、僕は誰よりも、彼のことがわかるようになっていた。

彼は社会が好きだ。友人をつくり、人々とつながりを持つことを熱望していた。

僕が、リゾートでなく街へ出ようと言うと、彼はうれしそうな顔をした。

地元の有力者たちがチャリティーのダンスパーティを計画していると聞いたデュークは、米ドルに換算して1000ドルを出し、2枚のチケットを買った。

僕は、オープントップで、背中が大きく開いたドレスを着た。最近、白さを増した乳房も、大胆にのぞいているものだ。

髪をセットしたあと、僕は、デュークが誕生日にくれた例のネックレスを

つけた。

パンプスを履き、買ったばかりのバッグを持って、僕は準備を終えた。

その姿を姿見で確かめていると、デュークが僕の後ろに立った。

彼は、僕の首にキスし、そして、両肩を後ろから抱くようにした。

「アンディ、君は本当に変わったよ。あのマイアミのパーティの時とはまったく別人だ」

彼の手をつかんだ僕は、それを、片方の乳房を包むようにあて、いたずらっぽく笑い返した。

「ああ、もちろん、これもだけど、それだけじゃないさ。あの時にくらべたら、君は自信に満ちている。それに…」

「それに……なに？」

「幸せそうだ。……そうだろ？」

僕は、香水をつけながら言った。

「ふふ、だって、マイアミの時、あたしは女装男でしかなかったんだもの。今は……女よ」

デュークは、しばらく鏡の中の僕を見つめたあと、手をとった。

「行こう」

ダンスもまた、すべてのこと同様、格段に進歩していた。

デュークと僕は、楽しく踊り、そして飲み、人々との会話を楽しんだ。

デュークが言った「自信に満ちている」という表現は、まちがいではなかった。

会話の中で、誰かが、僕の知らない上流社会の話題を持ち出したとき、僕は堂々と、その意味をきいた。

僕に悪意を示す人がいたときには、僕は平然と、それを無視した。

ひとり、例のギリシャで撮られた写

真のことを持ち出した鉱山技術者がいたが、僕は彼を、笑い飛ばした。

パーティが終わりかける頃、デュークは、このあと、ちょっとしたサプライズが用意してあると言った。

会場の外に出てみると、デュークが頼んでおいたらしいサンドバギー車が置いてあった。

そのバギーに乗り、僕らは、1時間ほど無人の砂漠(きっと秘境にちがいない)を走った。

車を停めたあと、後部座席に用意してあった毛布をかぶり、しばらくうたた寝した。

さらに1時間後、起き出して待っていると、砂漠の上に太陽が昇りはじめた。

その雄大な光景を眺めていると、デュークが僕の手をとった。

「アンディ、ずっと考えていたんだけ

ど……」

「ええ」

僕は、大きく深呼吸した。

「僕は、この旅が終わったら、離婚を
発表するって言ったよね」

その言葉に、僕は緊張した。

……ああ、彼は、なにを言い出すん
だろう？

「アンディ、僕は、君にますます惹か
れていく自分を感じてる。もちろん、
君の妹の代役としてなんかじゃなく、
君自身として」

「デューク、あたしも、あなたのこと
がどんどん好きになっていくわ」

鼓動が高まっていた。

彼は僕に、このまま妻でいてくれと
いうつもりだろう……永遠に。

「アンディ……言いにくいんだけど…
…」

僕は真剣に見つめてくる彼の目を見

返した。

「いいから、言って」

「国に戻ったら……」

「ええ」

「あと百万ドル出すから、もう半年間、妻でいてくれないか」

世界が崩壊していくような気がした。

これにくらべたら、ニッキの裏切りなんてかわいいものだ。

ふたりでしてきたすべてのこと……
ふたりで話したすべてのこと……でも、僕らはまるでちがう方向を向いていたらしい。

僕は、心を捧げるつもりだったのに、彼は、体を買おうとした。

「デューク、帰りましょ」

「アンディ……」

「話しかけないで！」

デュークの言葉に、僕は1週間以上も部屋から一步も出られないほど傷ついていた。

ニッキに会いたいと思った。ニッキと会って話を聞いてもらいたかった。

デュークは、もう、お金の問題などではなくなっているのがわからないのだろうか？

僕が、彼といっしょにいられるなら、アンドリューを永遠にあきらめてもいいと思っているのを知らないのだろうか？ それが、僕の心からの気持ちであることがわかっていないのだろうか？

部屋にこもって10日目にもなると、さすがに外の空気を吸いたくなった。

真夜中、僕はすべての服を脱いで、

バスローブひとつを身につけた。僕の下半身はすでに、なにも装着しなくてもよくなっていた。

デュークは、小さなペニス以外のすべてを僕から奪ってしまった。

彼は、もう、僕を女に変えていた。彼が、金で買うことができると思っている女に。

デッキに出た僕は、かつてデュークにキスされた場所まで来て、手すりにもたれた。

……あの時、どうして、彼に守られてるなんて思ったんだろう？

……どうして、彼があたしを愛しているなんて思ったんだろう？

「……アンディ？」

近づいてくる彼の声を、僕は無視した。彼の口から聞きたいことなんて、もうなにもなかった。

「アンディ」

彼は、この前と同じように僕の隣りに立った。

僕は彼を無視しつづけていたが、視野の端に、彼の苦しげな表情が入ってきた。その様子は、思わず僕の方から手をとってしまいそうなほど落ち込んで見えた。

「アンディ、時間を元に戻せるものなら、戻したいよ」

「そうね」

僕は、吐き捨てるように言った。

「できたら、1年前まで」

その言葉に、彼はしばらく黙り込んだ。

「……君は、ほんとにそう思ってるのか？」

「早く百万ドルちょうだいよ。そしたらあたしは、それを、あなたに突き返すんだから」

僕はいやみっぽく言っていた。

と、デュークは僕の両手を取り、むりやり自分の方に向かせようとした。

「アンディ、本当にすまない」

僕はそれを拒否し、その手を振り払おうとした。

「なに謝ってるの？ あたしを売春婦みたいに扱ったこと？ そんなら、謝ることなんてないわ。もともと、この旅行全体が、そういうことだったんだから」

けっきょく、デュークは、僕の手を離した。

「金のことなんか、もう、とうの昔に、関係ないよ」

僕は、そこではじめて、自分の夫に目を向ける気になった。

「へえ、そう。じゃあ、どうして、あたしを買おうとしたの？」

「僕は、どうしようもない d i c k (※) だからさ」 (※訳注 「まぬけ」)

僕はそれに同意しかねた。

「そんなの、言い訳にもならないわ。まあ、d i c k (※)そのものって時がないとは言わないけど」(※訳注 ‘dic k’ は「ペニス」の隠語でもある)

「事業に成功して以来ずっと、僕にとって恋愛は、利益とコストの関係になってしまった。つき合った女はみんなは、多かれ少なかれ、僕の金に魅力を感じてたようだからね」

「女はみんな、じゃないはずよ」

デュークは、さらに恥ずかしそうな顔になった。

「まあ、君の妹とつき合ったことで、よけいに金の力を信じるようになってしまったのかもしれない。女性の本当の愛を手に入れるには、それに頼るのがいちばんだってね」

「でも、あなたは、そんなものに頼らなくても、それを手に入れたわ。どれ

だけたくさんのお金を積まれたとしても、あたしは自分の体まで変える気にはならなかったと思う。でも、あたしはそれをした……それは、なにより、あなたに幸せになってもらいたかったからよ」

「アンディ……」

デュークは、僕を抱こうとした。

「やめて！ あたしは、売り物じゃないって言ってるでしょ」

僕はそう言い捨てて、その場を立ち去ろうとした。

「アンディ！」

彼の声は、叫びになっていた。

「まだ何かあるの？」

「愛してるんだ！ 君を、心から愛してる。これまで知り合った誰よりも、愛してる。今までの君、すべてを愛してる。どうか、行かないで」

もし、ここで僕が歩き去ったなら、

それですべてが終わったはずだ。僕は彼と「離婚」し、男に戻って生きていったにちがいない。

でも僕は、振り向き、彼に抱きついてた。

「デューク、あたしも……愛してる。離れたくなんてない」

「僕を、許してくれるのかい？」

僕は、男のミスを何度も言い立てるような女じゃない。

「許すって、なんのこと？」

「アンディ、じゃあもう一度、やり直してもいいかな？」

「えっ？」

「帰国したあとも、君は、僕の奥さんをやりつづけてくれる？ ギャラはいっさいなしだけど」

僕は、彼に笑い返した。

「やるもなにも、あたしが、その奥さんでしょ、デューク」

「じゃあ、僕らは離婚しなくてもいいんだね？ この先、ずっと」

「あなたが、男と夫婦でいることに耐えられるならね」

僕は、ちょっと意地悪を言った。

「それは、やだな。僕は、君と夫婦でいたいんだ」

「そのプロポーズなら、お受けするわ」

デュークは、僕にキスしようと顔を寄せてきた。

「でも、いくつか条件があるわ」

デュークは、動きを止めて僕を見た。

「どんなこと？」

「学校へ行かせてほしいの。ソーシャルワークの勉強をして、できれば将来、社会福祉の仕事をしたいと思ってる」

デュークは、ちょっととまどっていた。

「べつに、働かなくても、だいじょうぶだよ」

「ええ、それはわかってるわ。でも、あなたと対等でいたい。それにあたし、ひまでうわさ好きな奥様にはなれないわ」

デュークは、くすっと笑いながら言った。

「たしかに、君には無理だな」

「でしょ」

「他には、何かある？」

「あたしに、百万ドルを払おうとしないこと」

「えっ？ でも、それは最初の約束だろ。君はこれだけやってくれたんだし……」

僕は、その言葉をキスで止めた。

「もう、その話はなしよ。あたしのやってきたことを『お仕事』にしないで」

口を寄せて言ったその言葉に、彼は熱いキスで答えてくれた。

もちろん僕はそのまま、彼を、僕の

ベッド……いや、僕らのベッドへと誘った。

僕は、ついに、自分の居場所にたどりつけたのだと感じた。

その夜、僕は、これから始まる未来のことを考えながら眠りについた。

……学校、家、夫、家族。

そんな僕らの幸せに、ふたたび、あの悪魔が舞い降りたのは、それからしばらくしてからだった。

デュークの船、グレイソン二世号は、いうまでもなく、贅のかぎりを尽くしたものだ。

その中でも僕がいちばん感心し、興味を持ったのは、コンピュータのシステムだった。

これまでテレビゲームさえほとんどしたことの無い僕にとっては、最初、その扱い方もよくわからなかったのだが、コンピューターに精通した一等航海士が、喜んでレッスンしてくれた。

衛星インターネット回線は、けっして安いものではないのだろうが、デュークなら、もちろん、それをまかなえた。

その結果、僕は、帰国するのを待つまでもなく、オンラインの通信教育を受けることができた。そして、熱心に勉強した結果、船がハワイの海域に達する頃には、GED (※) も取得できた。

(※訳注 ‘general educational development’ 総合教育開発 ここでは、その制度に基づく高等教育修了認定のこと 日本の「大検」にあたる)

この頃までには、デュークが「適切な人々」に手をまわし、「アンディ・

グレイソン」名義のパスポートを手に入れてくれていた。GEDもその名でとったものだ。僕の女性としての未来が、着々と形になっていく気がした。

ホノルルに着く前日、僕は「ジョージア大学」のウェブサイト調べながら、僕らの未来をじゃまするものは、もうなにもないと感じていた。

「奥様」

例の一等航海士が、コンピュータールームに顔をのぞかせ、言った。

「本国から、奥様あての電話が入ってるそうです。こちらに、まわさせますね」

僕は、首をひねった。

僕に電話をかけてくる人間などいるのだろうか？

本物のアンドレアの知り合いでなければよいがと思いながら、僕は、恐る

恐る受話器を取った。

「アンディ？」

どこかあせっている感じの声でした。

「……えっ？ ニッキ？」

僕を陥れる片棒を担いだ人間だというのに、懐かしさがこみ上げてきた。

……それにしても、彼女がなんの用だろう？

「アンディ、切らないで。大事な話があるの」

「あら、なにかは存じませんが、あたくしが帰るまで、お待ちになれませんの？」

僕は、上品な若奥様を演じてみせた。

「だって、あたくし、今、ハネムーン
の最中なんですよ」

「アンディ、笑い事じゃないのよ」

「ふふ、いったいなんなの？」

「あなたの妹のことよ。じつは私、ト

レントに、彼女の動向を探ってもらったの。まあ、あなたが彼女の役をやっているかぎり、デュークの財産にも手は出せないわけだけど」

「よかった。うちには、彼女のような人にお金を渡すほどの余裕はないものの」

「ちゃんと聞いて。彼女、あれからずっと身を隠してたらしいけど、最近、ハワイに旅立ったそうよ。きっと、デュークと接触するつもりよ。花嫁の座を、あなたから奪い返そうとしてるにちがいないわ。たぶん、あなたを捨てて、自分を元に戻さなければ、すべてをマスコミにばらすってデュークを脅すんでしょうね。気をつけて、アンディ」

僕は、すぐにデュークのオフィスに行き、すべてを報告した。

「デューク、どうしたらいいと思う？」

デュークは、僕の話を表情ひとつ変えずに聞いていたが、話し終わったところで、机の上の鉛筆をとると、それをボキッと折った。

「くそっ。いいさ。こっちから会いに行行ってやる」

「でも……」

「心配ないよ。ただ、君には申し訳ないことを頼まなきゃならない。ハワイに着いたあと、ことがかたづくまで、船内から出ないでほしいんだ。彼女がこっちにいるとすれば、君が同時に2カ所に現れることになる。そんなリスクは避けたいんだ。この埋め合わせは、かならずするよ」

「そんなことはいいけど……」

「だいじょうぶ。僕に任せてくれ。それより、じつは今、緊急の仕事を抱えてしまったんだ。ハワイに着くまでに、

どうしても片付けなきゃいけない。悪いけど……」

デュークはそう言って、未だ不安を抱える僕をドアへと導いた。

船は、未明にアメリカ50番目の州に着いたようだ。

僕は、デュークが出かける前に、もう一度、彼がどうするつもりかをきいておきたいと思っていた。

ところが、僕が目覚めたときには、デュークはすでに船を下りていた。それを知り、僕は、なにかに押しつぶされるような気分になった。

その日一日を、僕は船室に閉じこもり、不安にさいなまれながら過ごした。

……デュークは、何をしに出かけたんだらう？

もし、アンドレアがマスコミにしゃべれば、そのひと言で、事態は一挙に

ひっくり返る。

僕が男であることが知れ渡り、あのギリシャでの写真が真実であったことがあらためて確認される。

僕らは、タブロイド紙の格好のネタとして、センセーショナルに取り上げられつづける。

デュークの人生は破滅に追いやられ、屈辱的な余生を送ることになる。

時間はゆっくりと過ぎ、その時間が過ぎるごとに、僕の精神状態は、追いつめられていった。

……彼はどこに行ったんだろう？

……あたしたちは、どうなるの？

僕はついつい、デュークと僕の妹の恋愛時代を想像していた。デュークは今となっては思い出したくもないなどと言うが、周囲の反対を押し切って結婚の決意をしたのだから、彼女に強く惹かれていたにちがいない。

……もし、彼の中にまだ、そんな感情が残っていたら？

……たとえそうでなくても……もし、会うことで、そんな感情がまた燃え上がったら？

……もし彼が、本物の彼女の方が、シーメールの模造品よりいいと気がついていたら？

……ああ、神様！

僕は、完全にパニックに陥っていた。

……なんで、彼のような人があたしなんか？。

……あたしなんて、何者でもない。実際には、女ですらない。

……彼の妻は、アンドレア。そう、あたしじゃないんだ。

……あたしはいつたい、なにを勘違いしてたんだろう？

デュークは、その夜、戻ってこなか

った。そして、さらに次の夜も。

3日目の朝、僕は、荷造りをはじめていた。

デュークは僕をただ放り出したりはせず、おそらく何らかの和解条件を持ち出すだろう。

どこか住むところを用意し、学校に行かせる。そんなところだろうか？

そして、彼は今のままの生活を続ける。今のままの結婚生活を。彼の妻、アンドレアとともに。

僕は、かつて、全身全霊をかけて彼を愛した女だったという思い出とともに生きるだけだ。

デュークは、その午後に戻ってきた。「アンディ、どうしたんだい？ 浮かない顔をして」

彼は、そう言って、僕の首にレイをかけた。

「デューク、今さらそんなことはしないで。彼女のところへ戻って」

僕は、自分の乳房に、ナイフを刺したような気がした。

「あたしは、止めないから」

デュークは、ひどく混乱した顔で僕を見つめた。

「……えっ？ どこへ戻れって」

「アンドレアのところ」

デュークは笑い出していた。

「彼女には2日も手こずらされたんだ。なんでわざわざ、また、彼女のところへ戻らなきゃいけないんだい？」

「だって、彼女は、あなたの妻だから」

「いや、あの時、『誓います』って言ったのは君だったと思うけど。だから僕は、君にキスしたんだ」

「デューク、彼女は本物の女よ。彼女の方がいいに決まってるわ」

デュークは、僕の頬にやさしく触れ

てきた。

「君こそ、本物の女だろ。じゃなかったら、そんな言い方はしないよ」

僕は、夫の胸に顔を埋めて、涙を流していた。

「ほんとに、あたしでいいの？」

「君以外に誰がいるって言うんだい？」

そこで、ひとしきりうれし涙を泣かしたあと、僕はやっと顔を上げた。

「で、彼女になにを言ったの？」

デュークは、僕の隣りに座った。

「まあ、彼女は相変わらずだったな。状況としても、ニッキの推測どおりだったよ」

「ええ、それで、あなたは……？」

「今後、二度と僕らとかかわるなと言ったんだ」

僕はわけがわからなかった。

「それで、彼女が納得するわけないと思うけど……」

「じつはこっちにも、彼女について、ひとつふたつ、わかったことがあってね。たとえば、ある武装自動車窃盗団との関わりとか、あるいは、ドラッグの運び屋としてメキシコ国境付近で過ごした日々とか……。それを持ち出したら、彼女はとたんに震え上がってたよ。もう、余分なことはしゃべらないと思うよ」

デュークが、ハワイに着くまでにかたづけなければならぬ仕事と言っていたのは、これのことだったのだと、僕は納得した。

「だけど、彼女がいなくなったわけじゃないわ。誰かに気づかれる可能性だってあるんじゃない？ 名前だって、あたしといっしょなんだし」

『アンドレア・ジョーンズ』さんは、けっこう何人もいると思うよ。同姓同名なんていくらだってあることだろ」

「でも、あたしたち、そっくりよ」

「君は、最近、鏡を見てないの？」

その言葉につられ、僕は思わず壁の鏡をのぞき込んでいた。

ノーメイクのパジャマ姿でベッドに腰掛けているにもかかわらず、そこには、女性であることを否定するものはなにもなかった。

僕は今や、あらゆる点で女だった。

「あたしが、彼女とは別のものに見えるってこと？」

「ああ、僕のかわいい妻。それが今の君さ。アンドレアは、あいかわらず美人だったよ。でも、君ほどじゃない。君こそ本物だよ。それは、ホルモンとか、手術とか、メイクとか、そんなこととも関係ない。君にはもともと、彼女と似てるところなんて、ひとつもないよ」

僕は、彼に抱きつき、キスしていた。

「ありがとう」

「アンディ、君は今、幸せ？」

「ええ」

「それなら、僕も幸せだ」

デュークは、そう言って、僕の頬や首にキスしてきた。そして、その手が、僕のパジャマの下に忍び込んできた。

「ちょっと待って、デューク。あたしたち、旅に出てから、どれくらいたつ？」

「8カ月とちょっと」

「まるで8年みたいな気がするわ。でも、8日みたいな気もするし」

「ああ、わかるよ」

「デューク、ハネムーンは切り上げて、もう帰らない？」

デュークは、なんだかうれしそうな顔をした。

「君は、ほんとにそうしたいの？」

「だって、もう、これ以上、誰かをだ

ます必要はないわけでしょう。あたしは、早く世の中に出て、女としての人生を始めたいの。あたしたちのほんとの暮らしを始めたいの」

「じゃあ、すぐにロサンゼルスに向けて出航だ。ロスから先は飛行機。船は、僕たちがいなくても動くからね」

いよいよ、僕らの冒険旅行も終わりが近づいた。

僕がにせ物の花嫁を演じてからおおよそ9ヵ月後、僕らの船は、サンフランシスコ湾の上を軽快に走っていた。

ゴールデン・ゲート・ブリッジをくぐったところで、デュークは僕の体を抱き、太平洋をを指し示した。

目の前に広がるのは、みごとなオーシャンサンセット。

「じゃあ、もう、すべてがセットされてるのね？」

僕は、夫に聞いた。

「ああ、今日はここに泊まって、明日はロスまで航行する。そこから先の航空券も手配済みさ。この船は、パナマ運河を通して、僕らが家に帰った2週間後にジョージアに戻る」

「すてき。あたし、初めて自分の家に住めるのね」

「きっと、気に入ってくれると思うよ、アンディ。だけど、これが、君が逃げ出すためのラストチャンスってわけだ。いったん家に入ったら、僕はもう、君に出て行かせないつもりだから」

僕は、デュークの耳を噛んだ。

「逃げ出すつもりなんてないわよ。でも、この旅の終わりに、したいことがひとつだけあるの……」

カリフォルニアは、つねにゲイの結婚の急先鋒だ。

たまたま僕らが滞在した日も、フリスコ(※)では、何組かの同性カップルの結婚が合法的に認められたようだ。

(※訳注 ‘Frisco’ サンフランシスコの略称)

その夜、ある静かなユニテリアン(※)教会で、デュークと僕は、もう一度、ふたりだけの結婚式をした。

(※訳注 ‘Unitarian’ 一神論者 キリスト教の一宗派だが、三位一体を認めず、自然神的な神のみを信仰の対象とする 一神論といっても、キリストや教団など権威の絶対化を排することから、むしろ戒律はゆるやか 特にアメリカでは、リベラルな社会活動を重視し、エコロジストやゲイの活動家などに信者が多い)

結婚証明書をとったわけではないので、これ自体は正式な式典ではなかったが、デュークに、僕が僕自身として妻になるのを望んでいることを示すた

め、どうしてもしておきたかったのだ。

あと、語らなければいけないことは、ごくわずかだ。

ニッキとは、ロサンゼルスで会った。3人とも、泣きながら笑っているという再会だった。

僕は特に、彼女の指のエンゲージリングに気づいたとき、もう、彼女へのわだかまりは消えてしまった。彼女が、僕に結婚式の付き添いを頼んできたとき、僕は喜んで引き受けた。それこそ、姉妹が果たす役割だろう。

ニッキとデュークは、やがて、デュークが留守にしていた間のビジネス上の留意事項を話題にしだし、どうやらそれが長くなりそうだったので、僕は

席を立て、海辺のバーで待つことにした。

その店に座ってグラスを傾けている時だった。

はげかかった中年男が近づいてきて、断りもなく僕のテーブルに座ったので、僕はちょっとイラついた。

「あの……なにかご用かしら？」

と、その男がにやりと笑った。歯並びの悪いその笑いは、どこか不気味な気がした。

「いや、あんたにはもう、じゅうぶん用を果たしてもらったからな。礼を言うべきかもしれんな」

僕は、そのまま立ち去ろうかとも思ったのだが、なにか引っかかるものがあり、きいた。

「以前、お会いしたかしら？ お名前は、なんておっしゃるの？」

「クラビン・C・ウッドワード」

その名に心当たりはなかった。と、そう思ったことが顔に出たのだろう。男がつづけた。

「俺はカメラマンさ。たぶん、俺があんたを撮った写真は、覚えているだろ」

その言葉で、すべてがわかった。

こいつは、ギリシャで例の写真を撮ったやつだ。

僕に、豊胸手術を受けさせた男。すべてを狂わせた男……。

こんな男と語り合うことが、いいことであるはずがない。

僕は、そそくさと席を立った。

と、彼は、テーブルの上になにか置いた。

分厚いファイルのようだ。

それが気になり、僕がふたたび席に着くと、クラビンはビールを注文した。

中身に目を通した僕は、いきなりパニックに陥った。

イスラエルの病院で入手したらしいカルテのコピーがあった。そこには、僕の手術の内容が詳しく書かれていた。

ギリシャで、同じ時に撮った、ちょっとピントのぼけた写真もあった。トップレスの平らな胸がわかることは変わらない。

さらに、他の時に撮られた写真もあった。マイアミだ。踊っている僕のドレスから、ラバーフォームのパッドがのぞいた瞬間のショットだった。

そして最後に……僕の出生証明書のコピー。そこには、はっきりと「男」と記載されていた。

「あんたの妹が、よろしく伝えてくれとさ」

また、不気味なにやにや笑いでカメラマンは言った。

「いくらほしいの？ なんでも言って。」

デュークは、それを出すと思うわ」

「金の問題じゃないさ。あんたの豊胸手術は、俺の仕事を奪った。俺の写真は、偽造だということにされてしまった。でも、それだけの裏づけがあれば、あんたが男だということは、もう一度、確実に証明できるわけだ」

「百万ドル！」

「1000万でも、受け取らないね」

「じゃあ、なにがほしいの？」

もし彼が、僕の肉1ポンドを望んだとしたら、僕はそれを差し出すだろうと感じていた。

「ビールをもう1杯」

僕は、ウェイターを手招きし、それを注文した。

「で、クラビン、なにがほしいの？」

彼は、そのビールを、一気に飲んだ。そして言った。

「だから、ビールをもう一杯」

僕はショックを受けていた。どうやらこの男は、その証拠品を置いて立ち去る気はないようだ。

「いったい……どうしろというの？」

と、彼は、また笑いながら座り直した。その笑いは、これまでより、いくぶんか誠実さが増したように見えた。

「20年間、俺はハイエナみたいな仕事をしてきた。みじめな人間の肉をむさぼってきた。スキャンダルや墮落した生活を暴き立てては、人の名声をぶち壊してきた。解雇されたあとのこの何ヵ月かだっけ、あんたに復讐することばかり考えてたよ。でも、食ってかなきゃならん。俺は、あんたが名前も聞いたことがないようなイリノイの田舎の新聞社で働いてた。で、どうなったと思う？ 朝、洗面所の鏡の中に、俺は、この20年間ではじめて自分の顔を見た気がしたんだ」

そこで、新しく来たビールを一口飲んでから、彼はつづけた。

「ミズ・グレイソン、俺はあんたの人生を破滅させられる。でも、二度とあの頃の自分には戻りたくない。まったく幸せじゃないんだからな。で、もう、こんな馬鹿なことはやめることにした」

僕は、驚きに何度もまばたきした。

「なんと言ったらいいか……」

「ただ、俺もジャーナリストのはしくれた。真実が知りたいんだ。本当のことを聞かせてくれないか？ あんたがいったい、どんなつもりで、こんなことをしたのか。どうやら、あんただって、金のためじゃないんだろ」

「だけど、あなたが、それを発表しないって保証はあるの？」

「俺は一度、あんたの旦那に逆らったんだ。そのリスクがどのくらい大きい

か、身をもって知ってるさ。そんな馬鹿なことは、二度としないよ」

冗談めかしてはいるが、彼の真摯なまなざしに、僕はひとつうなずき、僕のためのコークハイを注文した。

「いいわ、クラビン。あれは、今から9カ月前……」

Based on the text FictionMania

Translated by Rino Maebashi

この「処女航海」は、ブライアンさん作のオンライン小説“Maiden Voyage”を、前橋梨乃が翻訳したものです。原作著作権はブライアンさんが、翻訳著作権は前橋が保持します。個人で楽しむ以外、無断でのコピーを禁止します。